令和４年度

# 小・中学校 実 践 研 究 集 録

八戸市教育委員会

# 目　　次

## ◇各小・中学校　実践研究報告

### ○小学校


| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １ | 八　戸 | １３ | 白　鷗 | ２５ | 下　長 | ３７ | 多賀台 |
| ２ | 城　下 | １４ | 白銀南 | ２６ | 城　北 | ３８ | 豊　崎 |
| ３ | 吹　上 | １５ | 町　畑 | ２７ | 高　館 | ３９ | 新井田 |
| ４ | 長　者 | １６ | 鮫 | ２８ | 根　岸 | ４０ | 旭ヶ丘 |
| ５ | 図　南 | １７ | 種　差 | ２９ | 日計ヶ丘 | ４１ | 南　郷 |
| ６ | 中居林 | １８ | 大久喜 | ３０ | 是　川 | ４２ | 島　守 |
| ７ | 柏　崎 | １９ | 金　浜 | ３１ | 三　条 | | |
| ８ | 小中野 | ２０ | 根　城 | ３２ | 西　園 | | |
| ９ | 江　陽 | ２１ | 白山台 | ３３ | 明　治 | | |
| １０ | 湊 | ２２ | 西白山台 | ３４ | 桔梗野 | | |
| １１ | 青　潮 | ２３ | 江　南 | ３５ | 轟　木 | | |
| １２ | 白　銀 | ２４ | 田面木 | ３６ | 多　賀 | | |


### ○中学校


| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １ | 第　一 | ８ | 白　銀 | １５ | 北　稜 | ２２ | 東 |
| ２ | 第　二 | ９ | 白銀南 | １６ | 是　川 | ２３ | 中　沢 |
| ３ | 第　三 | １０ | 鮫 | １７ | 三　条 | ２４ | 島　守 |
| ４ | 長　者 | １１ | 南　浜 | １８ | 明　治 | | |
| ５ | 小中野 | １２ | 根　城 | １９ | 市　川 | | |
| ６ | 江　陽 | １３ | 白山台 | ２０ | 豊　崎 | | |
| ７ | 湊 | １４ | 下　長 | ２１ | 大　館 | | |

| No. | 学校名 | 令和４年度　小学校　研究主題及び副題 | 年次 |
|---|---|---|---|
| 1 | 八戸 | 考えを深める子の育成 | ３年計画の<br>３年次 |
| 2 | 城下 | 主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成<br>～児童の課題解決力を高める指導法の工夫を通して～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 3 | 吹上 | 主体的に課題に向かい、共に学び合う子どもの育成<br>～解決意欲を引き出す「学習課題」の設定と集団解決の場の工夫を通して～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 4 | 長者 | 確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり<br>～各教科等において「聞く」ことの育成を目指した指導の工夫～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 5 | 図南 | 主体的に学び合う子の育成<br>～問題解決的な学習を通して～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 6 | 中居林 | 表現し合い学びを深める子どもの育成<br>～個の考えを全体へ広げる対話の工夫～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 7 | 柏崎 | 主体的に学び合う柏っ子の育成<br>～問いの意識と“わかった”笑顔が生まれる授業づくりの工夫～ | ２年計画の<br>１年次 |
| 8 | 小中野 | 自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成 | ３年計画の<br>２年次 |
| 9 | 江陽 | 主体的に学ぶ児童の育成<br>～問題解決の意欲を持続させるための「しかけ」と「発問」の工夫～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 10 | 湊 | 自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成<br>～言語活動の工夫を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 11 | 青潮 | 主体的に学ぶ子どもの育成<br>～問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 12 | 白銀 | 主体的に学び、自分の考えを表現できる子の育成<br>～導入から課題設定までのはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 13 | 白鷗 | ねばり強く考えを深め合う子の育成<br>～子どもが解決したくなる、話したくなる働きかけの工夫を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 14 | 白銀南 | 「わかった！できた！役立った！」が実感できる授業づくり<br>～問題解決的な学習の授業実践を通して～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 15 | 町畑 | 主体的に学び合う子どもの育成<br>～「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を目指して～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 16 | 鮫 | 関わり合いながら、ともに成長する子どもの育成<br>～特別支援教育の充実と改善を通して～ | １年計画の<br>１年次 |
| 17 | 種差 | 自分の考えをもち、分かりやすく伝え合う子供の育成<br>～複式学習において、主体的・協働的に学びを深め合う授業づくり（算数科）～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 18 | 大久喜 | 主体的に問題解決に取り組み、伝え合う子どもの育成<br>～子どもが本気で話したくなる算数科の授業づくりを通して～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 19 | 金浜 | 主体的にかかわり、ともに学び合う子の育成<br>～少人数・複式学級における、算数科の授業実践を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 20 | 根城 | 主体的に学び合う子の育成<br>～各教科における対話的学びの実現を目指して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 21 | 白山台 | 主体的に表現する児童の育成<br>～問いの意識をつなげる授業づくり（算数科）～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 22 | 西白山台 | 運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもの育成<br>～自己の変容を実感できる授業づくりの工夫を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 23 | 江南 | 主体的に課題に向かい　自分の考えを表現できる子の育成<br>～各教科における思考を促すしかけや授業展開を通して～ | １年計画の<br>１年次 |
| 24 | 田面木 | 進んで伝え合い、主体的に学ぶ子の育成 | ３年計画の<br>１年次 |
| 25 | 下長 | ともに学び合い、考えを深める子どもの育成 | ３年計画の<br>３年次 |
| 26 | 城北 | 自分の考えをもち、主体的に学ぶ子の育成<br>～学ぶ意欲を持続させるための手立ての工夫～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 27 | 高館 | 主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり<br>～思いや考えを伝え、学び合う学習活動を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 28 | 根岸 | 自分のこととして課題解決する子の育成<br>～解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫～ | ２年計画の<br>１年次 |
| 29 | 日計ケ丘 | 主体的に学び合う子の育成<br>～対話力を高める指導の工夫～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 30 | 是川 | 主体的で対話的な授業づくり<br>～つながる意識をもたせる働きかけの工夫～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 31 | 三条 | 主体的に学ぶ子供の育成<br>～問いをもたせる授業づくりを通して～ | １年計画の<br>１年次 |
| 32 | 西園 | 学びに向かう力の育成<br>～「対話」「見通し」「振り返り」の学習過程を大切にした授業づくり～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 33 | 明治 | 主体的に学び、考えを深め合う子の育成<br>～よりよい対話のある授業を通して～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 34 | 桔梗野 | 関わり合い、考えを深め、解決する子の育成<br>～主体的に学び合う活動の工夫を通して～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 35 | 轟木 | 主体的に学び合う力の育成<br>～複式・少人数における問題解決の力を育成する授業実践を通して～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 36 | 多賀 | 進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成<br>～一人一人が考えをもち、表現できる授業づくり～ | ２年計画の<br>１年次 |
| 37 | 多賀台 | 自分の考えをもち、進んで表現する子の育成<br>～児童の思考に寄り添う授業づくりを通して～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 38 | 豊崎 | 主体的に学びに向かう子の育成<br>～思いや考えを表現し、学び合う学習活動を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 39 | 新井田 | 主体的・対話的で深い学びのできる子の育成<br>～問題解決的な授業展開を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 40 | 旭ヶ丘 | 関わり合いながら、深く考える子の育成<br>～対話的な授業づくりを通して～ | ２年計画の<br>２年次 |
| 41 | 南郷 | 主体的に学び合う児童の育成<br>～話す意欲を高める対話活動を通して～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 42 | 島守 | 主体的に学び合う子どもの育成 | ３年計画の<br>３年次 |

| No. | 学校名 | 令和４年度　中学校　研究主題及び副題 | 年次 |
|---|---|---|---|
| 1 | 第一 | 主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成<br>～言語活動の充実を図る工夫を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 2 | 第二 | 思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫<br>～特別支援教育の視点を生かして～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 3 | 第三 | 意欲的に学び、友と高めあう生徒の育成<br>～「共有化」を意識した授業づくりを通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 4 | 長者 | 主体的に学び、自己の生き方を探究する生徒の育成<br>～進路や将来設計に結び付く「学ぶ意義」を踏まえた授業づくり～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 5 | 小中野 | 課題解決に向け、主体的に授業に取り組む生徒の育成<br>～身に付けた知識・技能を生かし、協働的に活動する学習を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 6 | 江陽 | 自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成<br>～対話的・協働的活動を通して～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 7 | 湊 | 問題解決的な学習を通しての主体的・対話的で深い学びの研究<br>～まとめ、振り返り場面における評価の工夫～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 8 | 白銀 | 主体的に課題を解決する生徒の育成<br>～基礎的・基本的内容の定着に向けて～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 9 | 白銀南 | 生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫<br>～必要感をもって問題解決に取り組ませる指導をとおして～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 10 | 鮫 | 生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究<br>～自分の考えを表現する活動を中心として～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 11 | 南浜 | 夢や希望に向かい、主体的に学ぶ生徒の育成<br>～問題発見につながるための導入と個に応じたまとめの工夫～ | ３年計画の<br>１年次 |
| 12 | 根城 | 主体的に学ぶ生徒の育成<br>～課題設定の工夫と振り返りを通して～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 13 | 白山台 | 主体的に思考・判断・表現する生徒の育成<br>～主体的・対話的な学習につながる評価活動の研究を通して～ | ２年計画の<br>２年次 |
| 14 | 下長 | 意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成<br>～生徒が自ら学び考え表現できるための教師のはたらきかけの工夫を通して～ | ３年計画の<br>４年次 |
| 15 | 北稜 | 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方<br>～生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の工夫～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 16 | 是川 | 基礎・基本の定着（確かな学力）を目指した授業づくり<br>～特別支援教育の視点を取り入れた学習指導の工夫～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 17 | 三条 | 自分を律し、課題に向き合う生徒の育成<br>～探究的な学習活動を通して～ | ２年計画の<br>１年次 |
| 18 | 明治 | 「学びに向かう力」の育成<br>～主体的な学びを支える学習場面の工夫～ | ３年計画の<br>３年次 |
| 19 | 市川 | 見方・考え方を働かせながら、自分の考えを広げ深める学習指導の在り方<br>～言語活動と振り返りの場の設定の工夫を通して～ | ４年計画の<br>３年次 |
| 20 | 豊崎 | 確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒の育成 | ３年計画の<br>１年次 |
| 21 | 大館 | 主体的に学習に取り組む生徒の育成<br>～協働的に学ぶ場面の工夫を通して～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 22 | 東 | 課題の解決に向けて主体的に取り組む生徒の育成<br>～「自発的行動力」の向上を促す指導を通して～ | ２年計画の<br>２年次 |
| 23 | 中沢 | 自ら学ぶ力の育成<br>～自己調整学習を通して～ | ３年計画の<br>２年次 |
| 24 | 島守 | 主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成<br>～ねらいに迫るためのＩＣＴとツールの効果的な活用～ | ３年計画の<br>３年次 |

令和４年度

# 小学校

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １ | 八　戸 | １３ | 白　鷗 | ２５ | 下　長 | ３７ | 多賀台 |
| ２ | 城　下 | １４ | 白銀南 | ２６ | 城　北 | ３８ | 豊　崎 |
| ３ | 吹　上 | １５ | 町　畑 | ２７ | 高　館 | ３９ | 新井田 |
| ４ | 長　者 | １６ | 鮫 | ２８ | 根　岸 | ４０ | 旭ヶ丘 |
| ５ | 図　南 | １７ | 種　差 | ２９ | 日計ヶ丘 | ４１ | 南　郷 |
| ６ | 中居林 | １８ | 大久喜 | ３０ | 是　川 | ４２ | 島　守 |
| ７ | 柏　崎 | １９ | 金　浜 | ３１ | 三　条 | | |
| ８ | 小中野 | ２０ | 根　城 | ３２ | 西　園 | | |
| ９ | 江　陽 | ２１ | 白山台 | ３３ | 明　治 | | |
| １０ | 湊 | ２２ | 西白山台 | ３４ | 桔梗野 | | |
| １１ | 青　潮 | ２３ | 江　南 | ３５ | 轟　木 | | |
| １２ | 白　銀 | ２４ | 田面木 | ３６ | 多　賀 | | |

八戸小

# 考えを深める子の育成（３年計画の３年次）

校長　　小　林　　淳

## １　研究主題について

⑴　教育目標具現化の立場から

本校の教育目標である「誇りをもち、主体的に生きる子」の育成に迫るために、努力目標の一つとして、「進んで学ぶ子」を掲げている。さらに、学校課題をふまえ、今年度の学校目標は「みんなとなかよく進んで考えを深めていく子」と設定した。学習問題の設定の仕方を工夫し、話合いの場を効果的に設定することによって、学ぶ意欲や思考力の向上を目指したい。

⑵　これまでの実践から

児童の主体的に学ぼうとする意欲の向上や話合いを通して思考力を高めるという課題をふまえ、令和２年度から「考えを深める子の育成」という主題で研究に取り組んできた。学習問題を設定する際に、子どもたちのつぶやきやつまずき、疑問などを取り上げて解決する必要感をもたせたり、考える内容を明確にして提示したりしたことで、問題解決への意欲が高まった。また、「話す聞くスキル」を掲示したり、モジュールの時間に対話の仕方の指導に取り組んだりしたことで、進んで対話活動に取り組む児童が増えてきた。しかし、話合い活動の中で、相手と自分の意見をつなぐ言葉を活用していても、十分に考えを深めているとはいえない児童も多くいた。

そこで今年度は、昨年度に引き続き、児童が主体的に学び思考力を高めることができるように、学習問題の設定の工夫や相手の話を受けて話す指導の工夫を取り入れた授業展開を行っていく。学習問題の設定では、児童の思考の「ズレ」を意識させて、解決しようとする意欲を高める工夫に取り組んでいく。また、話合い活動では、教師のはたらきかけなどの指導を工夫し、児童同士が考えを積極的に交流し考えを深めていき、「考えを深める子の育成」を目指したいと考えた。

## ２　研究のねらい

考えを深める子を育成するために、解決する必要感のある学習課題を設定し、相手の意見を受けてつなぐ話合いをさせることが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

## ３　研究仮説

⑴　「ズレ」を生じさせ、その「ズレ」から解決する必要感のある学習問題を設定することで、考えを深める意欲が高まるのではないか。

⑵　つなげて話す場の工夫をすることで、考えを深めることができるのではないか。

## ４　研究内容

⑴　学習問題の設定の工夫

ア　解決する必要感のある学習問題の工夫

イ　学習問題の提示の工夫

⑵　話合いの指導や支援の工夫

ア　根拠をはっきりさせて話合いをさせる。

イ　既習事項や経験を生かして話合いをさせる。

ウ　図や資料を用いて話合いをさせる。

エ　話をつなぐ言葉を用いて話合いをさせる。

オ　教師のはたらきかけを工夫する。（板書、揺さぶり、発問、指示、切り返し等）

⑶　考えをもち表現する力をつけさせるための土台づくり

ア　何でも話せる雰囲気を作る。（場の設定の工夫、話す聞くスキルの掲示）

イ　学習の約束の定着を図る。（学習準備・ノートの書き方・振り返りの工夫）

（学習の準備→八戸小「学習のやくそく」の活用・ノートの書き方）

⑷　研究の検証

ア　授業の中で児童が行う振り返りから、考えが深まったか変容を見取り、研究の日常化を図る。

イ　児童に対して年２回のアンケートをとり、話合いに対する意欲や実態を把握しながら研究を進める。

## ５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・助言者 | 授業の概要（校内研究との関わり） |
|---|---|---|---|
| ９ | １４ | 第１回授業研究（６学年）<br>「円の面積」（算数）<br>授業者　教諭　髙畑　和子 | 導入時に前時の図形との違い（ズレ）を意識させたり、ワークシートを活用して解き方を書かせたりしたことにより、自分の考えを説明したいという学習意欲が高まった。そのため、対話では多様な考えが出て、考えが深まった。 |
| １１ | １６ | 第２回授業研究（１学年）<br>「かたちづくり」（算数）<br>授業者　教諭　横内　佑依 | 導入時に前時との学習課題の違い（ズレ）を意識させたり、ワークシートを活用して考えの共有を行ったりしたことにより、友達の解き方を知りたいという意欲が高まり、対話が深まった。 |

⑵　一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師等 |
|---|---|---|
| ５ | ２５ | 板書指導に関する研修 |
| ６ | １ | 問題解決的な学習づくり<br>（講師：八戸市教育委員会教育指導課　主任指導主事　福田　秀貴　先生） |
| ８ | ２２ | １人１台端末の活用と遠隔操作について<br>（講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　先生） |
| ９ | ２８ | １人１台端末の活用と遠隔操作について<br>（講師：八戸市立旭ヶ丘小学校　教諭　佐々木　俊介　先生） |
| １０ | １９ | アセスの結果を活用した児童理解と活用方法<br>（講師：青森県総合学校教育センター　指導主事　工藤　直子　先生） |

## ６　研究の成果

⑴　児童の思考にズレが生まれるように意図的に学習問題を設定し、思考のズレを共有させることにより、問題を解きたいという学習意欲が高まった。

⑵　「話す聞くスキル」を掲示し、授業の話合い活動を意識させてきた。また、考えを共有させる際に、教師が意図的にファシリテートを行い、考えを共有させることにより、対話による考えの深まりが見られた。

⑶　昨年度より継続して授業の終末で書く振り返りに自分の考えの変容やその根拠を書かせてきた。そのことにより考えの変容やその根拠を意識して発言する児童が増えた。

## ７　研究の課題

⑴　導入時に思考の「ズレ」をもたせること、また、その思考の「ズレ」を共有することにより、児童の対話への関心・意欲を高める研究を行ってきた。しかし、児童により関心・意欲に差があったり、関心・意欲の持続に差が見られたりした。

⑵　対話の際、根拠をもとに話合い、自分の考えが深まったり、変容したりしたことを振り返ることができる児童が増えた。児童自身の対話について、児童・教師の共通する基準の必要性が出てきた。

（記入者　畑中　衛）

城下小

# 主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成

## ～児童の課題解決力を高める指導法の工夫を通して～　（３年計画の２年次）

校長　　木村　朋子

### １　研究主題について

・教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標の「心豊かに学び　たくましく生きる子どもの育成」及び努力目標の「進んで学ぶ子」を受け、「夢や志の実現に向け進んで努力する子」を目指す児童像として教育活動を行っていく。昨年度から主題を「主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成」とし、児童の課題解決力を高め自らの夢や志の実現に向かって行動していくための基礎を培うとともに、課題解決の基盤となる情報活用能力を養うための授業づくりについて研究を深め、教育目標の具現化を進めていく。また立腰姿勢で話をよく聞かせることや特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを共通の取組としながら、児童が本時のねらいに確実に到達できるように努めていきたい。

・児童の実態から

本校児童は、１年次の取り組みの成果もあり、学年の発達段階に応じた１人１台端末の基本的な操作ができるようになってきた。インターネットで情報を収集したり、jamboard や Google スライドなどのアプリを活用したり、文字入力をしたりと課題解決をする上で学習の基盤となる情報活用能力の基礎が身に付いてきている。今年度は、学習に必要な情報・課題解決に必要な情報を探し出したり、共有して共に考えたりする場面で、身に付いてきた１人１台端末を操作する力を活かしていきたいと考えている。お互いに得た情報を共有し学び合う機会を設けることで、課題解決力を高め、学びを深めていく児童の育成を目指していく。

・これまでの実践から

これまで本校では、児童の課題解決力を高めることを目指し、情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための基礎的な力「情報活用能力」を養うための指導法を工夫してきた。国語科をパイロット教科とし、１人１台端末を活用する場面を授業内に位置付けることで、児童は端末の使い方に慣れ、基本的な操作ができるようになってきた。今年度は、１人１台端末を活用する際、学習に必要な情報・課題解決に必要な情報を探し出したり、共有して共に考えたりする場面を授業内に設けることで、児童がより課題解決力を高め、学びを深めていく指導を積み重ねていきたい。教科の特性を生かして端末を活用できるように、今年度は教科を特定しないで研究を進めていく。

### ２　研究のねらい

主体的に関わり、学びを深めていく児童を育成するために、学習に必要な情報を取り出し課題解決のための手立てとしたり、意見を集約し他者とともに問題の発見や解決に挑んだりできるような指導の在り方について、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

児童が学習に必要な情報を探し出したり、精査したり、考えを共有して共に考えたりする場を設けることで、課題解決力を高めることにつながり、主体的に関わり、学びを深めていくことができると考える。

### ４　研究内容

⑴ 情報活用能力を養うための指導の工夫

ア　ICT 機器の効果的な指導の工夫をする

⑵ 特別支援教育の視点を取り入れた指導の工夫

ア　児童が考えたり理解したりする助けとなる視覚支援を工夫する

## ５　研究の経過

⑴ 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 題材名・授業者 | 授業の概要 |
|---|---|---|---|
| 6 | 20 | 第１回授業研究（５学年）<br>算数「整数」<br>授業者　　相内　悠理子　　教諭<br>助言者 八戸市総合教育センター副所長<br>松橋　祐哉 氏 | 公倍数の活用問題として、長方形をいくつか並べて正方形を作るという課題に取り組ませた。Jamboard 上での長方形の敷き詰めや２つの数直線で長方形の縦と横の長さの倍数を比べることで、自分の考えをもって確かめることができた。また、ICT 機器の活用により、他の考えを理解しやすくなるなど、意欲的に課題解決に取り組むことができた。 |
| 11 | 22 | 第２回授業研究（３学年）<br>体育「マット運動」<br>授業者　　大高　あい菜　　教諭<br>助言者　白山台小学校　教諭<br>小向　一樹 氏 | 後転をよりきれいに回るために、３人グループで互いにアドバイスしながら練習をした。動画に撮って見合うことにより、自分の後転する様子を客観的に見たり、きれいに回るためのポイントに着目したアドバイスをし合ったりし、主体的に活動をすることができた。後転のポイントが焦点化された絵や言葉が掲示されたことで、どの子も取り組みやすくなった。後転が前より上手くなったと実感したり、互いに認め合ったりすることができた。 |

⑵ 一般研修

| 月 | 日 | 研　修　の　内　容 |
|---|---|---|
| ４ | ２５ | 校内研究の進め方、指導案の書き方<br>１人１台端末活用研修　　講師：本校職員 |
| ６ | ２９ | 体育指導研修　　講師：本校職員 |
| ９ | ７ | 小・中 JS 特別支援教育(ｽｸﾘｰﾆﾝｸﾞ研修会) 講師：八戸学院短期大学教授　野口　和也　氏 |
| ９ | ２８ | 危機管理(不審者対応)に関しての研修　講師：教育指導課　副参事　甲地　由樹　氏 |
| １０ | １９ | １人１台端末活用研修　　講師：総合教育センター主任指導主事　石井　一二三　氏 |
| １１ | ９ | 若手研修講座　　講師：教育指導課主任指導主事　福田　秀貴　氏 |
| １１ | ３０ | 特別支援教育研修　　講師：本校職員 |

## ６　研究の成果

⑴ １人１台端末を効果的に活用することで、自分の考えをもって課題解決に取り組み、個別最適な学びにつながった。

⑵ 実技を伴う活動等の際には、１人１台端末を使うことで、客観的に自分の姿を捉え、課題発見や解決のためのポイントに気付くことができた。また、そのことは、課題解決に意欲的に取り組むことにつながった。

⑶ 板書、掲示物などの適切な視覚支援によって、情報や考え方が焦点化され、主体的に活動することが増えた。

## ７　研究の課題

⑴ 考えを共有していくには、本時のめあてがしっかりと共有されていること、自分の意見、立場をはっきりさせ、課題解決に取り組ませることが必要である。

⑵ 学習のねらいに則して、１人１台端末の活用かノートや具体物の活用か、よりベストミックスを考えた研究が必要である。

（記入者　　髙橋　康子）

吹上小

# 主体的に課題に向かい、共に学び合う子どもの育成

## ～解決意欲を引き出す「学習課題」の設定と集団解決の場の工夫を通して～

（３年計画の１年次）

校　長　　川村　洋

### １　研究主題について

本校では、教育目標として「気づき、考え、行動する子」、努力目標として「進んで学ぶ子」を掲げ、自ら課題を見つけ、解決に向けて主体的に学習に取り組む子どもを育てることを目指している。学習指導要領の目標及び内容をふまえ、子どもの解決意欲を引き出す「学習課題」を設定するとともに、授業の展開では児童の考えを広げたり、深めたりする「集団解決の場の工夫」を設定することで、主体的に課題に向かい、学び合う子どもを育てることができると考え、研究主題を設定した。

昨年度は、３年計画３年次として「主体的に学び、共に高め合う子どもの育成～児童の意欲を引き出す『学習課題』と学びを確かなものにする『振り返り』を意識した授業づくり～」という研究主題のもと、教材のしかけや発問の工夫をしたことで、教師が意図する「授業のねらい」と子どもが「解決したい」という思いが一致したタイミングで学習課題を設定することができた。また、授業の終末に、子どもが「わかった、できた、身に付いた」と実感したことを、板書やノート、評価問題や発表などで振り返り、学びを確かなものにする授業づくりを目指し、授業改善を行った。その結果、学習で分かったことや学習に対する意欲などについて、様々なパターン（文章、数値、観点）での振り返りを提示したことで、子どもが自分の学びを振り返ることができるようになった。

今年度は、これまで国語科を研究教科として取り組んできた成果を他教科へと広げ、子どもと子ども、先生と子どもとの対話の中から、解決意欲を高める実践例を蓄積していきたい。また、考えをよりよいものに練り上げ、考えを広げ深める集団解決の場の工夫について研究を進めることで、子どもが主体的に学び合い、「わかった、できた、楽しい」と実感できる授業の実現を目指していくことができると考える。

### ２　研究のねらい

主体的に課題に向かい、共に学び合う子どもを育てるために、解決意欲を引き出す「学習課題」の設定の仕方と考えを広げ深める集団解決の場の工夫を、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

子どもの意欲を引き出す「学習課題」を設定し、考えを広げ深める集団解決の場の工夫をすることにより、主体的に課題に向かい、共に学び合う子どもを育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 子どもの解決意欲を引き出す「学習課題」設定の工夫

(2) 子どもの考えを広げ深める「集団解決の場」の工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 授　業　研　究・実　践　発　表 | 授業の概要 |
|---|---|---|---|
| ６ | １ | 授業公開（算数）<br>特別支援学級　授業者　元木　欣也<br>阿部　千絵　　寺田　晴美 | 個々の課題に応じた段階的な個別指導と、問題づくりをしながら解き合う場を設けることで意欲的に学習に取り組むことができた。 |
| ６ | ２９ | 第１回授業研究（国語）<br>「アップとルーズで伝える」<br>４年３組　授業者　上平　陽子 | 「削除した段落がどこに入るのだろうか」と問うことで、削除した段落の役割に関わる言葉や文に着目することができた。ネームプレートを活用して自分の立場を明確にし、３人組の話合いを設けたことで考えを深めることができた。 |
| １１ | ２ | 第２回実践発表（国語）<br>「じどう車くらべ」<br>１年２組　授業者　福士　珠未 | 文を並び替える活動を通して、クレーン車の「しごと」と「つくり」の文を見付けることができた。ジャムボードを活用して本文を並び替え、並び替えた理由について話型を提示してペアの話合いを設けたことで自分の考えを伝えることができた。 |
| １２ | ７ | 第３回実践発表（高学年）<br>家庭科：６年　熊野　淑<br>国　語：６年　杉本　佳子<br>社　会：５年　三浦　真由美 | ・ジャムボードを活用しての考えの共有や深め合い<br>・意見の出し合いで終わらない共有場面の手立てとしてのジャムボードの活用<br>【集団解決の場の工夫】<br>個人で打ち込む→グループで共有→全体で共有→グループで再考 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内　容 |
|---|---|---|
| ６ | ６ | 問題解決的な授業づくり（集団解決の場の工夫）<br>講師　八戸市教育委員会　主任指導主事　福田　秀貴　氏 |
| ６ | ２２ | 考える議論する道徳の授業について<br>講師　八戸市教育委員会　主任指導主事　大野　勉　氏 |
| １１ | １６ | スクーリング活用について<br>本校　生徒指導主任　横内　裕史 |

## ６　研究の成果

(1) 国語以外の他教科においても児童の意欲を引き出す学習課題を吟味し教師の働きかけを工夫して掲示したことで、より深く考えようとする意欲が高まった。
(2) ネームプレートやジャムボードを活用して自分の立場を明確にし、ペアや少人数での話合いを設けたことで、自分の考えを伝えたり比べたりしながら考えを深めることができた。
(3) まとめの整合性がとれた学習課題を設定する授業が日常化されるようになった。

## ７　研究の課題

(1) 児童の実態把握や教科の特性を生かし、児童が自ら解きたくなる学習課題を設定できるよう研究を進めていきたい。
(2) 児童の考えを広げ、深めるペアや少人数での話合い活動の場の工夫をしていきたい。

（記入者　　上平　陽子）

長者小

# 確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり

## ～各教科等において「聞く」ことの育成を目指した指導の工夫～

（３年計画の３年次）

校長　　島浦　靖

### １　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

青森県及び八戸市の学校教育指導の方針を受けるとともに、児童や家庭・地域社会との連携のもと学校経営に創意工夫をこらし、教育目標「めあてをもって　自ら学ぶ子」の育成に取り組んでいく。その根幹として校是である「徳と知識を磨く」という理念を共有し、笑顔いっぱいの学校を目指している。学校は、子どもたちにとって学ぶ楽しさを実感できるところでなければならない。その基盤となるのが、学習指導と学級経営である。学習指導では、聞き方を定着させ、授業における児童同士の関わり合いを深めること。学級経営では、月別生活目標やソーシャルスキル・アンガーマネジメント等の指導を通して、支持的風土が溢れる学級づくりに努めることである。これらの基盤づくりによって、本校が目指す研究に取り組むことができると考えた。児童は、各教科等において、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、物事を捉える視点や考え方を広げていく。その中で、自分自身が受け入れられ、認められ、かけがえのない存在であることを実感したとき、学ぶ力が育まれると考えた。

支持的風土が溢れる本校において、各教科等の学習だけではなく、生涯にわたって重要な働きをする「見方・考え方」の育成を目指す本研究は、本校の目指す児童像を具現化するために有効であると考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態から

昨年度の研究結果から、確かな「見方・考え方」を育成するために、「聞き方」についての手立てを学び、活用することによって、友達の話を聞こうとする姿勢が見られるようになった。児童が比べて考えたり自分の発表に生かしたりすることができた。また、「話す人を見て聞く」「うなずきながら聞く」の観点を全校で決めて取り組むことで、教師・児童の意識が高まり、聞くことの基盤作りにつながった。しかし、確かな「見方・考え方」の育成を全体に広げるためには、「聞き方」の底上げがまだ必要であることを実感した。聞くことができても、それを聞いて意見を変えたり広げたり深めたりすることができない児童がいるため、特別支援教育の視点を生かした手立てを講じる必要があることが分かった。また、「聞く」を発展させるために、今後も課題提示の工夫、日常の授業において意識する点として、教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけ（コーディネータ機能）をより研究する必要があるということについて、共通理解した。

そこで今年度は、「聞き方」の育成から「聞く」ことの育成に改め、指導の工夫に努めていく。目指す児童像を「見方・考え方」をさらに広げる子どもとし、そのためにも「聞く」ことに重点を置いた指導を工夫することによって、物事を捉える力の育成を目指す。

課題解決に向けて、多様な「見方・考え方」をすることで、「自分でもできる」という自己肯定感をもたせることができ、努力目標の「進んで学ぶ子」の育成につながると考える。

### ２　研究のねらい

考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を育てるために、導入から課題設定までにおける教師の働きかけや、教師が児童につなぐ言葉がけの工夫をすることによって、各教科等における「見方・考え方」が広がる手立ての有効性について、日常の授業実践を通して明らかにしていく。

### ３　研究仮説

各教科等において「聞く」ことの育成を目指し、導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけや、教師が児童につなぐ言葉がけの工夫の有効性について、児童の考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を広げることができる。

### ４　研究内容

子どもの変容が見える授業づくりとして、以下の２点を示す。

(1) 導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫が、日常の授業において実践できているかについて検証する。

(2) 特別支援の視点を生かし、教師が児童につなぐ言葉がけの工夫が、様々なとらえ方ができる「聞く」ことの育成につながる効果について検証する。

## 5 研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名 | 成果・授業の概要 |
|---|---|---|---|
| 7 | 15 | 第１回授業研究　低学年ブロック<br>道徳<br>「くろぶたのしっぱい」<br>（規則の遵守）<br>２年３組　教諭　佐藤　芳実 | 本時は、みんなが使う物や場所を大切にし、きまりを守って気持ちのよい生活をしていこうとする態度を育てる学習である。<br>問い返しをしたことが、児童の考えを深めることに有効だった。 |
| 10 | 27 | 第２回授業研究　中学年ブロック<br>社会科<br>「自然災害からくらしを守る」<br>４年２組　教諭　山崎　孝裕 | 本時は、「もし自分たちのまちが災害に襲われたら」という想定で、様々な問題に対し、選択・判断を迫る学習である。<br>イラストを提示することで、避難所に集まってくる人たちの多様性を具体的にイメージさせることができ、最終的に「共助」の考え方に繋がった。 |
| 11 | 11 | （午前）教育指導課・センター訪問 | 各教科において、目標・手立て・評価の研究 |
| | | （午後）【要請訪問】<br>第３回授業研究　高学年ブロック<br><br>体育科<br>「ソフトバレーボール」<br>６年２組　教諭　相前　由佳子 | 本時は、レシーブの行い方を理解したり技能を身に付けたりすることを通して、簡単なゲームに生かすことができるようにする学習である。<br>前時の活動の振り返りから出された課題「つなげたい」を共有することによって、「つながる」から「つなげる」という児童が目指す姿を入れた課題設定ができ、主体的に課題解決に向かわせることができた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 一　般　研　修 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | ソーシャルスキルトレーニングに関わる研修　校長　島　浦　靖 |
| 6 | 8 | 特別支援教育に関わる研修会①　なかよし学級　担任　前田　健一 |
| 9 | 28 | アンガーマネジメント研修　一般社団法人アンガーマネジメントジャパン |
| 11 | 1 | 特別支援教育に関わる研修会②　心のケア研修支援事業<br>「集団の中で活動しにくい児童への関り方について」　立教大学　教授　大石　幸二　氏 |
| 2 | 15 | 特別支援教育に関わる研修会③　なかよし学級　担任　前田　健一 |

## 6 研究の成果

(1) 導入から課題設定における工夫をすることによって、児童に学びの必要感を与えることや、意欲的に学習に取り組ませることにつながることを確かめられた。

(2) 「聞く」ことを発展させるために、日常の授業において教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけ（コーディネータ機能）を工夫したことによって、児童の聞こうとする意識が高まり、自分の言葉で言い換えることができるようになった。

(3) 特別支援教育研修では、立教大学の大石幸二氏やアンガーマネジメントジャパンの佐藤恵子氏の研修を受けることによって、児童に寄り添った授業実践に生かすことができた。

## 7 研究の課題

(1) 確かな「見方・考え方」を育てるためには、児童が自分ごととして課題に取り組むこと、自己の変容に気付くことが必要である。そのために、問題へのつぶやきや疑問を明確にしたり、自分の立場や考えの変容を視覚的に確認したりする手立ての工夫が必要であると考える。

(2) 児童全員が主体的・対話的に課題解決に取り組むためには、日常的に教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけを研究していく。特に、聞く力が弱い児童やうまく話せない児童には、特別支援の視点を生かした手立ての工夫や共有が必要であると考える。

（記入者　相前　由佳子）

図南小

# 主体的に学び合う子の育成

## ～問題解決的な学習を通して～　　（３年計画の１年次）

校長　大坂　隆

### １　研究主題について

本校では教育目標に「明るく　やさしく　たくましい子」を、努力目標の一つに「自ら考え、学び合う子」を掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。この目標を具現化するために、児童一人一人が学ぶ意欲をもち、問題に真摯に向き合い、自分の考えを友達と積極的に伝え合う中で、自分の考えを広げたり深めたりしていくことが必要になると考えた。

昨年度までの３年間、「共に学び合い、問題を解決していく子の育成」と主題を掲げ、算数科（２年間）、社会科（1 年間）を研究してきた。算数科では前時の問題との違いを話し合わせる、ペープサートや絵を用いて視覚に訴える、図形の一部分を隠して提示するなど問題提示の工夫をすることで問題場面の状況を共有することができた。また、問題提示をした後の児童の気付きや疑問について交流する場を設定することで、解決への見通しをもたせることができた。社会科では、２年間の算数科での研究の成果を生かし、授業の導入部分で児童が課題を見出していくような資料の吟味や比較検討できるような提示の仕方を工夫した。児童の思考にゆさぶりをかけることで課題解決の意識を高め、課題に意欲的に取り組む姿が見られるようになった。しかし、児童が主体的に問いを見つけ出したり、授業の終末まで学ぶ意欲を持続させたりするにはどうしたらよいかという課題も残った。さらに、課題解決のためには効果的な話し合いが必要だと考えるが、話し合いの素地となる「聞く・話す」ことについての課題も挙げられた。

そこで今年度は、昨年度までの研究を踏まえ、研究主題を「主体的に学び合う子の育成」として、主体的に問題解決に向かうことができるよう問題解決的な学習に向けて授業改善を図ることとした。必要感のある学習課題を設定するために、児童の実態を把握し、授業の導入場面において教師のはたらきかけを工夫することにより、児童一人一人が自分の考えをもって授業に臨むようにさせたい。さらに、児童の主体的な学びが持続するように、自分の学びを実感したり、友達と共有したりする振り返りの工夫をすることで研究主題に迫ることができると考える。

### ２　研究のねらい

主体的に学び合う児童を育成するための効果的な指導のあり方について、問題解決的な学習を取り入れた国語科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

問題解決への必要感のある学習課題の設定や学びを実感できる振り返りの工夫をすることにより、主体的に学び合う児童を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 必要感のある学習課題の設定の工夫

(2) 学びを実感できる振り返りの工夫

(3) 日常における「聞く」「話す」活動の工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師等 | 授業の概要 |
|---|---|---|---|
| ６ | ２４ | 第１回授業研究（要請訪問）<br>第４学年　国語科「ごんぎつね」<br>授業者　教諭　加藤　晃介<br>指導助言<br>教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事 | 前時に書かせた「ごん」宛ての２種類の手紙を授業の導入で提示した。それぞれが考える「ごん」の性格の捉え方に違いがあることに気付かせ、課題解決への必要感をもたせた。振り返りでは、再度「ごん」への手紙を書かせることで、読み取りの変容や自己の学びについて実感させた。 |
| ９ | １４ | 第２回授業研究<br>第６学年　算数科「円の面積」<br>授業者　教諭　石橋　柊子<br>指導助言<br>江陽小学校　校長　三津谷　喜美典氏 | 複合図形をアニメーションで提示し、既習の図形に気付かせたり、公式を想起させたりして課題解決の意欲を引き出した。単元を通して、「教師主導」「相互理解」「自己内」の様々な手法の振り返りを計画的に実施した。個人での振り返りは、書く観点を与えて書かせたことが有効だった。 |
| １１ | ３０ | 第３回授業研究（要請訪問）<br>第１学年　国語科「じどう車くらべ」<br>授業者　教諭　山田　章子<br>指導助言<br>教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事 | 順序を入れ替えた文章を提示したり前時までの説明の順序を振り返ったりしながら、「しごと」と関連付けた「つくり」の説明の順序を考えさせた。２種類の顔マークで学習の振り返りをすることにより、自分の学びを実感させるようにした。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師等 |
|---|---|---|
| ４ | ４ | エピペン講習会　　講師　　養護教諭　久保　沙也香 |
| ６ | １７ | 問題解決的な授業づくり（国語）<br>講師　　教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事 |
| ６ | ２２ | 連携について考えよう　　～校内支援体制と保護者連携～<br>講師　　こども支援センター　　上澤　司　特別支援教育アドバイザー |
| ８ | １９ | １人１台端末の活用<br>講師　　総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事 |
| ８ | １９ | 若手研修会(算数)<br>講師　　総合教育センター　松橋　祐哉　副所長兼主任指導主事 |
| ８ | ３１ | 県学習状況調査の分析・考察 |

## ６　研究の成果

(1) 問題提示の仕方や教材にしかけを作る等、導入の工夫をすることで、児童に問いの意識を芽生えさせることができた。また、児童に自分の立場を表明させることは、課題解決への意欲的な取り組みにつながった。

(2) 学習で分かったこと、よいと思った友達の考え等を様々な方法（文章、絵文字など）で振り返らせることで、次につながる振り返りができた。

(3) 話し手に体を向けて聞く、反応をしながら聞くというようなことを全校で取り組むことにより、教師、児童の「話をよく聞く」ということへの意識が高まった。

## ７　研究の課題

(1) 授業の導入時だけでなく、45 分を通して児童の意欲を持続、増幅させるような授業の展開はどうあればよいか。また、学びを実感させる振り返りや相手を意識して話すことについての手立ての工夫を今後も研究していく必要がある。

（記入者　　松橋　麻紀）

# 表現し合い学びを深める子どもの育成

## ～ 個の考えを全体へ広げる対話の工夫 ～

（３年計画の１年次）

校長　沼舘　寿朗

### １　研究主題について

本校では、教育目標を「自分を育てる子」とし、自己を振り返りながらよりよい自分を目指して努力し、自分を高めていく子を育むこととしている。また、努力目標の一つとして「自分の考えをもち、進んで学習する子」を掲げ、相手の考えを理解するためによく聞き、自分の考えと比べたり質問したりしてよさに気付きながら考えを創り上げ、協働して課題解決する子をめざしている。今年度の学校目標は、目的意識をもって学び合おうとする態度を育てることが肝要と捉え、「向上心をもち、互いに高め合う子の育成」としている。

昨年度の校内研究では「主体的に学び合う子どもの育成」（３年目）の取組として、全ての児童に学ぶ意欲をもたせ授業を充実するために、導入時に前時と本時の違いを明確にし、問いを共有する学習の流れを積み重ねた。このことにより、児童が課題解決に意欲的に取り組むことができるようになった。また、考えの根拠を可視化させる手立てを講じた。このことは、双方向の対話を生み、友達の考えを全体で共有することに有効であった。振り返りでは、できるようになったことやもっと考えてみたいことを書かせたり、説明させたりした。この取組は、自己の学びの確認や変容を自覚させることに有効であった。

課題としては、考えの根拠を明確に表すために、普段から既習の知識や経験と関連付けて考えさせることが必要であること。また、対話の基礎となる聞く力がまだ十分とは言えないため、発表の内容を考えさせながら対話させていく指導の工夫が必要なこと等が挙げられた。

本校児童の実態として、ＣＲＴの意識調査結果を見ると、「主体的に学習に取り組む態度」は全学年とも低い傾向にある。日頃の様子からも、与えられた課題を行う素直さはあるが、自分で考えて行動したり、得た知識を活用して新たな課題に取り組もうとしたりする姿があまり見られない。また、話を理解しながら聞く力が弱く、学習に対して自信がもてず受け身的な関わり方の児童が多く見られる。

そこで、より多くの児童を能動的に学習に関わらせるために、学び合いの基礎となる聞く力と話す力を育てるとともに、教師の関わり方や指導の工夫を研究していくこととする。自分と他者との関わりの中で展開される協働的な学習活動を通して、学びを深める子どもの育成をめざし、本主題を設定することとした。今年度は、自己の考えを全体に広げる対話のあり方に焦点を置き、研究を進めることとする。

### ２　研究のねらい

一人の考えを全体に広げるための効果的な指導の在り方について、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

児童の中に生まれた問いや思い、考えを全体へと広げる対話を工夫することにより、表現し合い学びを深める子どもを育成できるのではないか。

### ４　研究内容

(1) 児童の中に生まれた問いや思いを全体へ広げて課題意識をもたせる指導の工夫

(2) 個の考えを全体へ広げて課題解決につなげる指導の工夫

【目指す学びの姿の例】
○他の考えを聞き、自分の考えとの差異を見つける。
○自分と他の考えをもとに問いをもつ。
○他の考えと自分の思いや考えを結びつける。
○他の考えから、よりよいものを選ぶ。
○他の考えを自分のものと照らし合わせながら、じっくりと考え思考を広げていく。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく研究

| 月 | 日 | 内　容 |
|---|---|---|
| ６ | ２９ | 第１回授業研究（要請訪問）（４学年）授業者　髙坂 幸代<br>「垂直と平行と四角形」　講師：八戸市総合教育センター　副所長　松橋 祐哉　氏 |
| | | 台形や平行四辺形は、長方形や正方形と同じ仲間かどうかという問いをもたせた。仲間分けの理由を発表させる際、平行な辺を色付けし可視化させ、他の児童にも説明させたり繰り返し聞いたりすることで、全体の考えを共有しながら学習を進めた。 |
| １０ | ４ | 第２回授業研究（要請訪問）（６学年）授業者　山口 義始<br>「戦国の世から天下統一へ」<br>講師：八戸市教育委員会教育指導課　主任指導主事　大野 勉　氏 |
| | | 天下統一への働きが大きかったのは織田信長か豊臣秀吉かを問い、様々な考えを共有し合うことにより、追究意欲を高めた。３つの視点で分けたジャムボードの表にまとめ、表を活用しながら互いの考えを関連付けて説明させ、対話を通して学びを深めた。 |
| １１ | ２ | 第３回授業研究（１学年）授業者　野里 文　　「かたちづくり」 |
| | | 教師の誤答提示によって児童の活動意欲を高め、児童のつぶやきを拾い全体に問い返すことで課題意識をもたせた。自力解決の後、考えた色板の並べ方を実物投影して説明させることで、個の考えを全体に広げ、様々な図形の構成に気付かせた。 |
| １１ | ３０ | 報告会 |
| | | 授業仮説に沿った授業実践の内容・成果と課題の発表を行い全体共有した。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内　容 |
|---|---|---|
| ４ | １３ | 今年度の校内研究年間計画について |
| ５ | １１ | 特別活動に関わる研修会（特活主任　馬渡 静香） |
| ６ | １ | 特別支援教育に関わる研修会（みどり学級　成田 涼子）<br>授業参観と質疑・応答（初任者研修示範授兼） |
| ６ | ２２ | 道徳教育に関わる研修会　授業者　（道徳教育推進教員 安ケ平 祐美子）<br>授業参観と質疑・応答（初任者研修示範授兼） |
| ８ | １９ | 小・中学校ジョイントスクール推進事業　第一中学校区第二回合同研修会 |
| | | 生徒指導に関わる研修会（八戸市教育委員会教育指導課主任指導主事　石田 純也　氏） |
| ８ | ２５ | 県学習状況調査（５学年） |

## ６　研究の成果

(1) 導入時に児童の中に生まれた問いや思いを共有することで、課題意識が高まり、友達の考えを聞こうとする態度に向上が見られた。

(2) 具体物やICT機器等を活用しながら考えの根拠を表現させることで、双方向の対話がしやすくなり、学び合いに深まりが見られた。

(3) 発表者の考えを他の児童にも繰り返して発表させることで、個の考えを全体に広げ浸透させることができた。児童の発言をもとにした問い返しを行っていくことにより、新たな気付きを発表する姿も見られるようになった。

## ７　研究の課題

(1) 自分の立場を明確にさせて学習を進めていくことで、考えを積極的に話そうとする児童も見られた。しかし、全体として見ると、発表に対する意欲は高いとは言えない。発表意欲を高める指導を工夫していく必要がある。

(2) 相手の立場になって話したり、聞いたことをもとに自分の考えを広げようとしたりする姿勢が、対話的な学びには必要な姿であると考える。話す場面の設定を工夫することにより、学び合いを深める授業づくりを目指したい。

（記入者　佐々木　直子）

柏崎小

# 主体的に学び合う柏っ子の育成

## ～問いの意識と“わかった”笑顔が生まれる授業づくりの工夫～（２年計画の１年次）

校　長　　南舘　義孝

### １　研究主題について

本校では、教育目標に「夢をもち　自分を育てる柏の子」を掲げ、発達の段階や個性に応じて「夢」をもち、自分の心の中の「三本の苗木：やる気・根気・勇気」を育て広げる教育を行っている。今年度は、昨年度の研究の成果と課題を受け、研究主題を「主体的に学ぶ柏っ子の育成」から「主体的に学び合う柏っ子の育成」とし、共同的な学びをより深め、日常の授業改善を繰り返しながら子どもを育てる取組を行っていくものとした。

昨年度の校内研究では、国語科に焦点をしぼり、児童が主体的に学んでいくために、読み取る力を育てる効果的な指導の在り方についての実践研究に取り組んだ。それにより、読み取る必要性を高めるために、思考のズレを生かすなどの課題設定の工夫、問い返しやゆさぶりなど発問の吟味の重要性を確認することができた。

今年度は昨年度の課題設定の工夫を継続した上で、教科を国語科と算数科に広げることとした。そして「主体的に学ぶ」姿をさらに追究するため、学習問題の設定と自分の立場（考え）を明らかにした上で、授業に取り組む児童の姿を共有することにした。また、個で考えを収束させるのではなく、「学び合い」を経て多様な考えに触れ、自分の考えを見つめ直す「変容」の姿についても明らかにすることとし、本主題及び副題を設定した。そのために、研究授業の参観の際には教師の働きかけだけではなく、児童一人一人の姿に着目し、事実の収集に努めて検討するようにした。

### ２　研究のねらい

児童が主体的に学びに向かい、読み取る力をつけていくための効果的な指導の在り方を国語科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

児童の追究意欲を喚起する課題設定や、人や教材と向き合う場面を取り入れることにより、主体的に学ぶ児童を育てることができると考える。

### ４　研究内容

(1) 問いの意識を大事にした働きかけの工夫

ア　問いを生み出す発問の仕方・教材提示の工夫

イ　児童にとって必要感のある課題設定（問いの共有）

(2) 人や教材と関わり、一人一人の変容を促す「学び合い」の工夫

ア　変容を意識するための、立場の相違の可視化・顕在化を生かし、思考を再構築させる工夫

イ　個に応じた指導・手立て

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者等 |
|---|---|---|
| 6 | 22 | 授業研究（４学年）算数科「垂直・平行と四角形」／講師　細越　一貴 |
| 6 | 29 | 授業研究（３学年）算数科「表とグラフ」／教諭　須藤　大貴 |
| 7 | 6 | 授業研究（２学年）算数科「図を使って考えよう」／教諭　渡辺 柚 |
| 9 | 28 | 授業研究・要請訪問（５学年）講師：八戸市総合教育センター副所長　松橋　祐哉氏<br>算数科「直角三角形の面積」／教諭　下村　亘 |
| 11 | 2 | 授業研究（１学年）国語科「ともだちのこと　しらせよう」／教諭　丹波　美夏 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 5 | 25 | スクリーニングに関する研修<br>講師：SSW　髙野　康一氏 |
| 7 | 20 | 体育指導に関する研修<br>講師：本校校長　南舘　義孝、体育主任　松橋　海渡 |
| 8 | 19 | 県小学校教育課程研究集会（資料研修） |
| 8 | 31 | 県学習状況調査の採点・分析・考察 |
| 12 | 7 | １人１台端末活用についての研修<br>講師：石井一二三　主任指導主事 |

## ６　研究の成果

(1) 児童は、自分の立場を明確にすることで、他者との違いを意識して考えを広げたり、多様な理由に触れて考えを深めたりして、主体的に学習に取り組むことができた。また、教師は「主体的」の捉えとして、「興味・関心だけではなく、粘り強く、自ら学びを調整してくものである」ということを児童の姿を通して共有することができた。

(2) 児童は、「学び合い」の場面によって授業の導入からの変容が見られ、試行錯誤しながら問題の解決に向かうことができた。また、教師は「学び合い」とは「話合い」だけではなく、それも含めて多様な考えに触れることであることを明らかにすることができた。

## ７　研究の課題

(1) 児童が主体的に学び続けていくための学習課題について、導入だけではなく、展開においても児童の問いの変化を意識しながら、追究を継続していく必要がある。

(2) 学び合いを単なる意見交換で終わらせず、考えを深めていくことが大切である。そのために、１人１台端末などのＩＣＴ活用や場の設定など、学び合いの効果的なあり方について研究を進める必要がある。

（記入者　下村　亘）

小中野小

# 自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成

（３年計画の２年次）
校長　花生　典幸

## １　研究主題について

これまで本校では、国語科と算数科の授業を中心に「対話する場面」を意図的に設定し、１年間研究を進めてきた。また、対話のさせ方(発問、教材へのしかけ、対話をファシリテート)を工夫して指導を継続してきた。それにより、相手の話をじっくり聞こうとする児童が増え、相手の意見をしっかりと受け止め、共感しながら聞こうとする姿勢が多くみられるようになり、あわせて自分の考えと相手の考えを比較しながら聞くことができるようになってきた。また、相手の考えをしっかりと受け止め、その上で自分の思いや考えを相手にわかりやすく伝えようとする姿も多くみられるようになってきている。しかし、全体的に見ると、友達の話を集中して聞くことができなかったり、自分の考えをもっているものの、その考えをうまく相手に伝えたりすることができない子どもの割合も依然として多いことが分かった。

そこで、今年度は研究テーマと研究教科はそのままで、昨年度までの研究の成果を生かしながら、より「対話」に焦点を当て「対話のベース作り」「『対話する場面』の工夫」の２点を研究の中心とすることとした。話をよく聞き、進んで考えを伝えようとする子どもを積極的にほめ、互いの考えを尊重し、何でも言い合える学級の雰囲気づくりにも力を入れていく。その上で、教師が発問を工夫することにより、ただの意見交流で終わらず、子どもが必要感をもって対話ができるようになり、また、子どもたちが自分の力で問題解決ができるようにしていきたいと考えた。以上のようなことをもとに、自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成に努めていきたい。

## ２　研究のねらい

自分の考えをもち､進んで伝え合う子どもを育成するための効果的な指導のあり方を、国語科と算数科の学習における授業実践を通して明らかにする。

## ３　研究仮説

授業の中に｢対話する場面｣を意図的に設定し､対話のさせ方を工夫することにより、自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育てることができる。

## ４　研究内容

(1) 対話のベース作り
　ア　話を聞こうとする姿勢の育成
　イ　進んで話そうとする意欲の喚起
　ウ　何でも言い合える学級の雰囲気づくり

(2)「対話する場面」の工夫
　ア　発問の工夫
　イ　教材へのしかけ、提示の仕方

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 研修内容・学年・授業者等 |
|---|---|---|
| 9 | 7 | 第１回授業研究（２学年）授業者　教諭　尾形　夏帆<br>国語「どうぶつ園のじゅうい」 |
| 9 | ２８ | 第２回授業研究（３学年）授業者　教諭　木村　裕莉愛<br>算数「あまりのあるわり算」 |
| １１ | １６ | 第３回授業研究（５学年）授業者　教諭　野里　さや香<br>国語「大造じいさんとガン」 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 研修内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | 「一人一台端末の活用」についての事例発表<br>講師：本校職員 |
| 6 | １５ | 「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修 |
| 8 | ３１ | 青森県学習状況調査採点と分析 |
| １１ | 9 | 「特別支援の視点を活かした授業づくり」について<br>講師：立教大学現代心理学部　教授　大石　幸二 |

## ６　研究の成果

(1) 対話する場面を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫したことにより、子ども同士の対話スキルに向上が見られた。また、対話しようとする意欲が高まり、全体の場で堂々と発表できる子が増えてきた。

(2) 問題を二択にし、立場をはっきりさせてから対話させたことで、対話に必要感が生まれ、深まりが見られた。また、問題にしかけを取り入れたり、発問を工夫したりすることにより、自分の考えをもち積極的に対話をする子が増えた。

## ７　研究の課題

(1) 積極的に対話をしようとする子と、なかなか勇気を出せずに対話に参加できない子の個人差が顕著に表れてきた。全員が自信をもって自分の考えを主張できるようになるために、日常の授業の中で自信をもてない子たちを大いにほめ、自信をもたせていく指導が必要である。また、対話の仕方について具体的に指導し、対話する力を確実に定着させていく必要がある。

(2) 教師がファシリテートしすぎてしまい、子どもが主体となる、子ども本位の対話にならないことが多かった。対話のねらいは、意見交流ではなく、課題解決であるということを全教職員でしっかりと共通理解し、子どもたちが考えを出し合い、話し合っていく中で自分たちなりの答えを導き出せるような対話のあり方をめざしていく必要がある。そのために、子どもたち同士で対話を進めることができるスキル（対話のつなぎ方、自分の考え方の述べ方など）を、日々の授業で継続して指導していく必要がある。

（記入者　佐々木　亮輔）

江陽小

# 主体的に学ぶ児童の育成

## ～問題解決の意欲を持続させるための「しかけ」と「発問」の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　三津谷　喜美典

### １　研究主題について

令和３年度の研究主題「確かな学力を育てる授業づくり～児童が表現したくなる『しかけ』と『発問』の工夫」の実践についてのアンケートでは、導入で、課題提示や発問・指示を工夫することで、児童が自ら問題を発見することができたという意見が９０％だった。実際、導入の場面で、児童が、「あれ？」「どうして？」「今までとちがう。」「このままではできない。」「どうすればいいの？」など、課題を自分ごととしてとらえる姿が見られた。また、本時の目標に迫る場面で意欲や活動が停滞することが多いという一昨年度の課題を受けて、授業全体を通して児童の主体性が持続するような「しかけ」の工夫や、効果的にしかける場面選びについて、指導者が意識するようになった。

しかし、展開で、児童が話したくなる「しかけ」を発問に取り入れたり、場面を選んで効果的にしかけたりする実践は、十分とは言えなかった。

そこで今年度は、問題解決の意欲を持続させることに重点を置いて研究を深めることとした。昨年度に引き続き、導入では、課題提示や発問・指示を工夫することで、児童が自ら問題を発見できるようにし、全体でそれを共有させる。展開では、児童が進んで考えたくなる流れを工夫し、問題解決の意欲を持続させる。それによって、これまで身に付けた「見方・考え方」を働かせて課題解決に向かい、最後までやり遂げようとする児童を育てることができると考える。このような授業を重ねることで、主体的に学ぶ児童を育成していきたい。

### ２　研究のねらい

問いをもち、最後まで児童の問題解決の意欲が持続するような「しかけ」と「発問」の工夫について、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

(1) 導入で、児童の知的好奇心を刺激し問いを引き出す「しかけ」を工夫することで、児童が課題を自分ごととしてとらえることができる。

(2) 展開で、児童が進んで考えたくなる流れを工夫することで、問題解決の意欲を持続させることができる。

### ４　研究内容

(1) 問いの意識をもたせる、課題提示や発問・指示の工夫。

(2) 問題解決の意欲を持続させるための展開時における働きかけの工夫や場面の選択。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

| 月 | 日 | 題材名・授業者 | 授業の概要 |
|---|---|---|---|
| 7 | 6 | 第１回授業研究（２学年）<br>「かさ」<br>授業者　花岡　梨紗　教諭 | バケツの水のかさの量をペットボトル何本分で計量し、間違った演示によって、正確に測定する必要性を引き出した。水に色をつけて具体物を用いた学習は児童の学習意欲の継続につながった。 |
| 9 | ２１ | 第２回授業研究（要請訪問４学年）<br>「式と計算のじゅんじょ」<br>授業者　高橋　由香　教諭<br>　　松橋　淳子　教諭<br>講師　　総合教育センター<br>　　副所長　松橋　祐哉　氏 | 整然と並んだ石の図を式で表し、図と結び付けながら説明する活動を行った。クイズを出題したり、解答したりする学習形態を取り入れることで問題解決の意欲を持続させることができた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容等 |
|---|---|---|
| 4 | ２７ | 児童理解・生徒指導情報交換 |
| 6 | 1 | 江陽中学校区ジョイントスクール研修会（江陽中での授業をオンライン参観） |
| 7 | ２１ | Q-U アンケートの見方と活用について　講師：こども支援センター<br>教育相談員　原　寿　氏 |
| 9 | ２８ | １人１台端末の授業での活用について　講師：総合教育センター<br>主任指導主事　石井　一二三　氏 |
| １１ | 9 | 江陽中学校区ジョイントスクール研修会（江陽小での情報交換） |

## ６　研究の成果

(1) 導入時に、問い返しや立場表明、具体物を用いた提示など、課題提示の工夫を行ったことで、児童が課題を自分ごととして捉え、問いをもたせる授業を積み重ねることができた。

(2) 展開時に、クイズ大会や間違った演示、問い返し等の働きかけを行ったことで、児童が自分の考えを深め、課題の解決場面まで意欲を持続して学習することができた。振り返りの内容にも思考の深まりや自己の成長に気付く姿が見られた。

(3) 問題を全体で把握し、めあてを共有するという導入時のしかけが日常化してきたことで、学習への取り組みやすさや安心感などのよい雰囲気を作ることができた。

## ７　研究の課題

(1) 導入時・展開時ともに、しかけを毎時間考え展開させることは難しい。しかけの日常化のためには、それぞれに実践を積み重ね、共有する場を設ける必要がある。

(2) 児童の聞く力・話す力を高めるための場の設定や、特別な支援を要する児童への配慮を加味した働きかけを意識する必要がある。

〈記入者　横内　真樹子〉

湊小

# 自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成

## ～言語活動の工夫を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　音　喜　多　　勧

### １　研究主題について

本校は、昨年度、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成」を研究主題とし、教科を４教科（国語・社会・算数・理科）に広げて、「話す・聞く」を中心に言語活動のさらなる充実を図りながら、次のような手立てを工夫した。

〇基礎・基本のさらなる定着
〇自分の考えたことを表現させる方法
〇問題解決のための交流の場の設定

その成果として次のようなことが挙げられる。

・導入にゲームやクイズ、センテンスカード、視覚に訴える資料、既習事項の確認を取り入れることで、意欲的に問題解決に取り組むようになった。
・ペア・３～４人グループなど、授業のねらいに応じて話合いの場を設定した。話型を提示してパターンを身に付けさせる話合いを繰り返し行うことで、自分の意見を伝えることができるようになってきた。
・キーワードや図、順序を表す言葉などを板書し、意識して使うようにさせたことで、話合いや説明のときに視点がずれないようになってきた。

その一方で、意見を話す、聞くことはできるようになってきたが、自分の考えと比べながら聞く、聞いたことをしっかりと理解して自分の考えを深めているかといえば個人差がある。各教科において、基礎・基本を徹底させ、話型の提示などパターン化し、話すことに抵抗がないようにさせていきたい。また、話合い活動の中で、分かるところまで発表したり付け足して説明したりすることや友達の考えを理解して言い換えて説明するなどして全体で考えをまとめていけるような学び合いをできるようにさせていきたい。

そこで、今年度も上記の研究主題を継続して設定し、日々の授業実践において言語活動の工夫をすることによって、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子ども」の育成を目指すこととした。

### ２　研究のねらい

自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもを育成するために、自分の考えが相手に伝わるように話す指導や、相手の伝えたいことを考えて聞く指導を工夫することによって、基礎・基本が定着するとともに、思考力・表現力が高まることを実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

相手に伝わるように話したり正確に聞いたりする活動の工夫をすることにより、基礎的な知識・技能が身に付き、自分の考えを的確に表現できる児童が育つ。

### ４　研究内容

(1) 児童が意欲的に問題解決に取り組むようにするための工夫
　ア　「問い」や必要感をもたせる手立て
　　①課題提示の工夫
　　②発問の吟味
(2) 児童同士が積極的に関わる学び合いができるようにするための工夫
　ア　話合いのもたせ方の工夫
　　①授業のどの場面で話合いをさせるか
　　②ペア、グループ、全体
　イ　説明のさせ方の工夫
　　①図や資料を使って説明する

②用語（既習事項、教科の専門用語、本文からの引用など）を使って説明する
③理由や根拠を明確にして説明する

ウ　話合いの仕方の工夫
①言い換えて話す
②付け足して話す
③質問したり聞き返したりする
④相手が話したことを受けて自分の考えを話す

エ　振り返り・評価の工夫
①考えを伝える
②考えを聞く
③考えを深める

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・題材名 | 授業者・指導助言者 | 主な内容 |
|---|---|---|---|---|
| 6 | 28 | 第１回授業研究<br>６学年<br>算数<br>「面積」 | 教諭　三浦　圭太<br>指導助言者<br>八戸市総合<br>教育センター<br>副所長　松橋　祐哉 | 円弧を含む複合図形の面積の求め方について、式を先に提示し、式からどのように考えたのかを半具体物を使って考えさせ、グループ、全体で説明させたことで求め方の理解を図った。 |
| 11 | 30 | 第２回授業研究<br>1学年<br>国語<br>「じどう車くらべ」 | 教諭　出貝　小百合 | トラックの模型を実物投影機で提示することによって、意欲をもたせた。つくりとしごとの文末に着目させ、サイドラインを引かせることで、自己決定させていた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内　　容 | |
|---|---|---|---|
| 6 | 8 | 特別支援教育研修会 | 講師：本校難聴学級担任　教諭　中野　　恵 |
| 6 | 29 | 体育実技研修会 | 講師：本校　　校長　音喜多　勧 |
| 9 | 7 | 絵の鑑賞会（描画指導法・絵の審査） | 講師：本校図工部 |
| 9 | 26 | クロームブック活用研修会 | 講師：旭ヶ丘小学校　　教諭　佐々木　俊介 |

## ６　研究の成果

(1) 導入で、模型や図、写真や作品などを提示し、視覚的に捉えさせたことにより、主体的に問題解決に取り組むことができるようになった。
(2) ペア・３～４人グループなど、授業のねらいに応じて話合いの場を多く設定することにより、関わり合うことへの抵抗感が少なくなり、活発に意見交換や学び合いができる児童が増えた。
(3) 説明の仕方の見本や話型を提示し、繰り返し話す練習をさせたことで、説明する力がついてきた。また、友達の意見を聞いてそれを受けて自分の考えを話すこともできるようになった。

## ７　研究の課題

(1) 友達の意見に対して、どの部分が大事なのか判断できない児童が多い。自分の考えと比べたり友達の考えを理解しながら聞いたりする力は、さらに指導が必要である。また、自分の考えを組み立てて話すことが難しいため、今後も、話型の提示や提示されたキーワードを使って話すなど繰り返し取り組んでいく必要がある。
(2) わかったことを話したりノートにまとめたりすることはできるようになったが、後の学習につながるような疑問や自分の考えの変容に迫るような振り返りはまだまだである。視点を与えて振り返りをさせるなどの指導が必要である。　（記入者　　中川　彩子）

青潮小

# 主体的に学ぶ子どもの育成

## ―問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを通して―（３年計画の３年次）

校長　　三角　浩司

### １　研究主題について

本校では、教育目標である「たくましく　心美しく」の具現化のために、一昨年度から「主体的に学ぶ子どもの育成」という主題で、全教科において研究を進めてきた。昨年度までの研究により、算数の授業では、導入場面で三角定規と自分のかいた三角形を比較し、「どんな三角形でも内角の和が１８０度になるか。」について導入場面で問いの共有ができる課題提示をしたこと、特別の教科道徳の授業では、問題提示の工夫をすることにより、児童の課題解決意識を高めることができた。また、自力解決ができるようにペア学習やグループ学習などの場を工夫することで、見通しをもって考える児童が増えるなどの成果が見られた。一方で既習事項を基に自分の考えをしっかりともたせるための話合い活動の工夫や「主体的に解決したくなる問い」へとつなげていくための教師の働きかけの工夫が課題としてあげられた。

そこで、今年は、昨年度までの研究を踏まえ、問題解決的な学習を通して、児童が課題解決に向けて主体的に学ぶことができるように、意欲を高める課題提示や教材、発問の工夫、見通しをもたせ、解決に向けた場の設定の工夫をする。児童に「あれ、どうしてかな。」から「答えを出したい。分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「何を学習したのか。」を明確にした振り返りを行わせることで、自らの学びについて客観的に捉え、次への問いにつなげることができると考える。

今年度の学校目標は、「よさを生かし、よく考えて取り組む子どもの育成」で、学びづくりの重点施策は、子どもたちの確かな学力の向上（基礎・基本の内容の定着）である。児童が自ら考えたい、調べてみたいと主体的に課題に取り組む授業を重ねることで、学力の定着を図っていきたい。

### ２　研究のねらい

児童が自ら課題を見つけ、課題解決に向けて主体的に学ぶことができるようにするために、教材や発問等の「しかけ」による問いの共有や見通し、解決に向けた場の設定をどのように工夫すればよいか、問題解決的な授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

「あれ、どうしてかな。」から「答えを出したい。分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「何を学習したか。」が明確になる振り返りの工夫をすることで、主体的に学ぶ子どもを育成できる。

### ４　研究の内容

(1) 児童が問題を発見し、主体的に問題解決にむかえるように、教師のはたらきかけを工夫する。
(導入から課題設定まで)
・教材の工夫
・発問の工夫

(2) 見通し、解決に向けた場の設定の工夫
・書く活動
・話合い活動
・振り返り

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授業研究 | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| 7 | 6 | ○第１回研究授業・協議（4 学年　国語）授業者　教諭　滝本　由佳<br>題材名　「アップとルーズで伝える」<br>・文末表現に着目したり大切な言葉を探したりする活動を通して、筆者の考えや段落のつながりをとらえることができる。 | |
| 9 | ２８ | ○第２回研究授業・協議（2 学年　算数）授業者　教諭　加藤　愛理<br>題材名　「かけ算（１）」<br>・かけ算の用いられる場面を式に表し答えを累加で求めることを通して、身のまわりのものをかけ算で表すことができる。 | |
| １１ | １７ | ○第３回研究授業・協議（要請訪問　５学年　算数）授業者　教諭　坂本　健一<br>題材名　「単位量あたりの大きさ」<br>助言者　八戸市総合教育センター副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉　先生<br>・１人あたりの畳の数を考えることを通して、混みぐあいを比べることができる。 | |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師　等 |
|---|---|---|
| 5 | ２５ | ・特別支援教育（個別の支援計画作成のしかた、保護者への対応）<br>講師　淡路　美樹子（青潮小学校 さくら学級担任） |
| 6 | ２２ | ・救急法（AED・熱中症対策）<br>講師　八戸市東消防署　職員 |
| 8 | ２３ | ・１人１台端末活用研修会（授業の中での実践例発表）<br>「スクラッチ」を用いた正多角形の作図について　教諭　粟津　宏治<br>「ジャムボード」の活用例　教諭　小笠原 真理子<br>「電気と私たちのくらし」～理科 プログラミングの活用～　教諭　簗瀬　えみ<br>音楽・図工で活用できるフリーソフトの紹介　教諭　中川原　泰文 |
| １０ | １９ | ・心のケア支援事業「困っている子どもたちへの支援について」<br>講師　八戸学院大学短期大学部　幼児保育課　教授　野口　和也　先生 |

## ６　研究の成果

(1) ・発問の工夫をしたり児童の考えを可視化したりすることで、児童一人一人が自分の考えをもつことができるようになってきた。
・問題解決への必要感をもたせることで、意欲的に取り組もうとする意識が高まった。

(2) ・文字と写真や絵と図などを対応させるなど、導入部分を工夫することで、解決への見通しをもって取り組むことができた。
・課題解決に向けた話合いを重ねることで、まとめや振り返りを行うことができるようになってきた。

## ７　研究の課題

(1) 「思考のズレ」から漠然とした問いを持たせることができたが、明確なめあてとして共有させる点で課題が見られた。

(2) グループでの話合いの目的を共有するための問い返しや揺さぶりなど教師のしかけの工夫が必要である。

（記入者　中川原　泰文）

# 主体的に学び、自分の考えを表現できる子の育成

## ～導入から課題設定までのはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫～

（３年計画の１年次）

校長　本宮　共子

### １　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では「たくましく心豊かな子」を教育目標に、「明るく思いやりのある子、すすんで学ぶ子、健康にくらす子」を努力目標に掲げ、教育活動を展開している。その中で校内研究が特に担う役割は「すすんで学ぶ子」の育成である。学習をする上での基礎的な学習ルールを徹底させ、児童一人一人の学びの場である授業において、主体的に学ぶ態度を身に付け、自分の考えをもち、考えを伝え合うことで、よりよい解決につながることが確かな学力に結びつき、教育目標である「たくましく心豊かな子」の育成に寄与すると考える。

全ての児童が主体的に学び、自分の考えを表現することができるようにさせるためには、教師のはたらきかけと工夫が必要である。児童一人一人が「わかった！できた！身についた！」と実感でき、主体的に学習に参加することが、学校目標にせまっていくことができるものと考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態とこれまでの研究経過から

本校の実態として、授業への集中を欠きやすく、学習課題の見通しがもてない児童が多い。また、基礎・基本の習得や授業中の課題の解決にも不安な児童が多い。そこで７年前からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに取り組んだところ、児童の学習への意欲が少しずつ高まり、学習の理解も深まってきた。昨年度は、「焦点化」を意識して授業することで、活動に見通しをもてるようになった児童が増え、児童の集中力も高まってきた。また、コロナ禍の中でも「共有化」の場面では、グループやペアで分担して発表させるなど、全体で自分の考えを伝える場の工夫が見られた。伝え合いを繰り返すことにより、児童はペアや全体等で話し合うことが抵抗なくできるようになり、理解が深まる姿も見られるようになった。

しかし、「焦点化」の充実には、ねらいに基づく発問や見通しをもたせる手立てや工夫がより求められ、「共有化」をどのような形で行うとより効果的であるのか、活動のさせ方の工夫が必要であることが分かった。

そこで今年度は、算数科においてさらに児童が見通しをもって課題に取り組めるよう、研究内容を導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけや手立ての工夫に絞り、児童全員が主体的に授業に取り組み、学ぶことができるよう実践していきたい。導入における児童の思考のずれに着目することで問いの意識を高め、さらに自分の立場を明確にすることで、学習課題を自分事として捉え、主体的に自分の考えをもち、その考えを伝え合うことで学びを深めていくことができると考える。

### ２　研究のねらい

授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫をすることで、主体的に学び、自分の考えを表現できる子が育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫をすることにより、全児童の問いの意識を高め、見通しをもたせると共に、学習課題を自分事として捉えさせ、その考えを伝え合わせることで、主体的に学び、自分の考えを表現できる子どもが育成できるのではないか。

### ４　研究内容

(1) 授業づくりにおける導入から課題設定の場面で、子どもたちが見通しをもって取り組めるような手立てや方法を工夫する。

ア　導入で「思考のずれ」を生じさせる工夫をすることで、問いの意識を芽生えさせる。

イ　「立場の表明」をすることで、全員参加ができる場をつくり、主体的に問題解決へ取り組ませる。

(2) 子どもたちの考えの伝え合いが効果的にできるような手立てや方法を工夫する。

## ５　研究の経過

（1）研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名　等 |
|---|---|---|
| 9 | 7 | 第１回授業研究（６学年）　授業者　教諭　古川　裕子<br>題材名　算数「円の面積」 |
| 11 | 9 | 教育指導課訪問（計画訪問）　全学級授業 |
| | | 第２回授業研究（要請訪問・３学年）　授業者　教諭　大庭　菜摘<br>題材名　算数「何倍でしょう」<br>講師　総合教育センター副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉　氏 |
| 11 | 24 | 初任者研修実地研修「他校種研修」（５学年）　授業者　教諭　淡路　衣津季<br>題材名　算数「単位量あたりの大きさ」 |
| 1 | 31 | 公開授業（２学年）　授業者　教諭　類家　民江<br>題材名　音楽「きょくの　ながれ」 |

（2）一般研修

| 月 | 日 | 研修日の内容 |
|---|---|---|
| 4 | 27 | 校内における配慮を要する児童の共通理解 |
| 5 | 25 | 小・中ジョイントスクール全体会 |
| 6 | 29 | 個別の指導計画について |
| 8 | 22 | １人１台端末活用の研修　講師　白鷗小学校　教頭　吉田　悟　氏<br>教育課程研究集会（資料研修） |
| | 31 | 県学力状況調査　学力分析の研修 |
| 11 | 16 | 小・中ジョイントスクール授業参観　情報交換 |
| 1 | 10 | 特別支援についての研修（さくら学級の実態と特別支援の手立て）<br>講師　さくら学級　荒谷　正博　野里　安紀　野月　陽子<br>児童生徒のための調査法の活用（「アセス」の理解と活用）気になる児童の対応について<br>青森県学習状況調査　分析・研修 |
| 1 | 18 | 県外研修報告会　発表者　淡路　衣津季 |

## ６　研究の成果

⑴ 校内で抽象的だった教師側の「思考のずれ」の捉え方が、少しずつ統一されてきた。導入から課題設定の場面では、教師の発問や課題提示などのはたらきかけから「思考のずれ」を生じさせることで、児童が「おや」「どうしてだろう」などという問いの意識をもち、課題を自分事として捉え、自力解決しようとする姿が見られるようになってきた。また、「立場の表明」では、１人１台端末や挙手、ネームプレートなどを使って児童全員が参加する場面を意図的に取り入れ、児童の考えを視覚化することで、問題解決へ取り組もうとする児童が見られるようになった。

⑵ 伝え合い活動では、ペアやグループ活動、１人１台端末を活用した取組など、児童が自分の思いや考えを伝え合う時間を徐々に増やすことができた。また、意欲的に自分の考えを伝えようとする姿が見られた。

## ７　研究の課題

⑴ 一部の児童の中には、まだ「思考のずれ」から問いの意識をもつことができない児童がいる。今後は、更に主体的に問題解決に取り組めるよう、児童の実態にあった「思考のずれ」や「立場の表明」を取り入れ、その後の展開に生かすために、効果的な発問や授業展開を工夫していく必要がある。

⑵ 全体として発言する児童に偏りが見られ、自分の考えを言葉にして伝えることへ苦手意識をもっている児童がいる。今後は、より意欲的に自分の考えを説明したり、話し合ったりすることができるように、児童の思考や能力に合った効果的な伝え合い活動を工夫する必要がある。次年度は、子どもたちが効果的に自分の考えを伝え合いができるような手立てや方法を工夫することに重点を置いて、研究を進めていきたい。

（記入者　大庭　菜摘）

白鷗小

# ねばり強く考えを深め合う子の育成

## ～子どもが解決したくなる、話したくなる働きかけの工夫を通して～（３年計画の３年次）

校　長　　寺　井　　健　司

### １　研究主題について

(1) 学校教育目標具現化のために

本校では、「生き生きした子」を教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、その具現化のための取組を続けている。教育目標を具現化するためには、県教育委員会の学校教育指導の方針と重点にあるように、「一人一人の子どもが、各教科及び総合的な学習の時間等において、主体的・対話的で深い学びを通して確かな学力を身に付けることができるよう、言語活動の充実を図りながら、一人一人の能力・適性に応じた指導と学習習慣の育成に努めること」が大切であると考える。また自分の考えをもって伝え合える場を設定し、話合いのさせ方や支援・手立ての在り方を工夫することは、生き生きと自分の考えを表現することにつながり本校で目指す児童像の実現に迫ることができると考える。

(2) 児童の実態から

昨年度は、ねらいに沿った問い返しを授業者が意識することで児童の思考を揺さぶり、話合いを焦点化させることができた。また、話合いの観点や「話し方の努力事項」を意識させることで、考えの足跡（思考過程）が生かされ、話合いの内容に深まりが見られるようになってきた。

しかし、話合いの場における児童同士の問い返しがあまり見られなかったことや、児童が自ら解決したい、取り組んでみたいという学びに向かう意欲に個人差が見られることが、課題として挙げられた。

そこで、今年度は副題を「子どもが解決したくなる、話したくなる働きかけの工夫を通して」とし、学ぶ意欲を高めるための課題決定までの工夫や話合い活動の工夫について研究を進めていく。前年度まで積み重ねてきた内容を継続しながらも、さらに生き生きと自分の考えを表現する児童の育成を図っていくことで、ねばり強く考えを深め合う児童の育成につながると考える。

(3) 「ねばり強く考えを深め合う」とは

「何を理解しているか、何ができるか」という生きて働く「知識・技能」を習得させ、「理解していること・できることをどう使うか」という未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を育成していくことが深い学びにつながると考える。「自分一人で分かったつもりになっていても、他者に説明してみたらうまく言えなかった。」「他者の話を聞いたら自分の気付かなかったことが分かった。」などの対話的活動を通して学びが深まると考える。また、学習内容を理解し記憶することも重要だが、それを通して新たな事象に対する見方を形成し、「自分なりの見方・考え方」ができるようになることも深い学びととらえる。そして、このような取組を日常の授業の中で継続して行うことが、確かな学力の育成につながると考える。これらから、本校では「ねばり強く考えを深め合う」ことを、次のようにとらえる。

ア　お互いに納得できるまで話し合い、学びを深めること。
イ　お互いに気付かなかった新しい視点を獲得できるまで、学びを深めること。
ウ　お互いに新たな事象に対してよりよい考え方ができるまで、学びを深めること。

### ２　研究のねらい

ねばり強く考えを深め合う子を育成するために、子どもが解決したくなる課題提示の工夫や自分の考えを進んで話したくなる話合い活動の工夫はどうあればよいか、算数科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

子どもが解決したくなる、話したくなる働きかけを工夫することにより、ねばり強く考えを深め合う子を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 課題設定までの働きかけの工夫

ア　児童の思考にずれを生じさせる課題提示（しかけ）の工夫
イ　立場の相違を可視化・顕在化する場面を設定し、問いの意識をもたせる場面の工夫

(2) 話合い活動の工夫

ア　グループ構成を考え、観点を焦点化して話し合わせる工夫
イ　他者と考えたり表現したりする場を設定し、考えの共有化を図る工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究の仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名 |
|---|---|---|
| 7 | 13 | 第１回授業研究（５学年）題材名「合同な図形」<br>授業者　櫻庭　信純　指導助言　総合教育センター　松橋　祐哉　副所長兼主任指導主事 |
| 11 | 2 | 第２回授業研究（１学年）題材名「ひきざん（２）」<br>授業者　佐々木靖子　指導助言　総合教育センター　松橋　祐哉　副所長兼主任指導主事 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | 心の架け橋研修「特別な支援が必要な子の共通理解」<br>生徒指導部 |
| | 22 | クロムブック活用研修　「授業で使えるクロムブック」<br>講師：総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事 |
| 10 | 19 | 特別支援研修　「通常の学級における特別な配慮を必要とする児童の指導」<br>講師：八戸市教育委員会子ども支援センター　横沢　吉則　主任指導主事 |

## ６　研究の成果

(1) 問題の一部を空欄にし計算を想像させたり、既習の方法では解けない問題を提示したりするなど、児童の思考に「ずれ」を生じさせる課題提示の工夫をすることによって、問いの意識を芽生えさせることができた。

(2) ネームプレート等を活用して、立場の相違を可視化・顕在化する場面を設定し、問いの意識をもたせることによって、全体の思考の傾向を児童自身が把握し、解決したい「問い」として自覚し、問題に取り組むことができた。

(3) 話合いで出されたいくつかの考え方を焦点化された観点で話し合わせることによって、相手に分かりやすく・伝わるように話そうという意欲を高めさせ、話合いの活性化につながった。

(4) ペア学習やグループ学習の際に、他者と考えたり表現したりする場を設定し、考えの共有化を図る工夫をすることによって安心感が生まれ、話したいという意欲とねばり強く課題に取り組む態度を育成させ、理解を深めることにつながった。

(5) 課題解決の途中で、分からない部分を「分からない。」と言える児童が増え、つまずいている子に進んでアドバイスをする児童が増えた。今年度の「解決したくなる、話したくなる働きかけ」の取り組みにより、温かい雰囲気の中で、児童同士、児童と教師の関わり合いを大切にした授業が展開された。

## ７　研究の課題

(1) 導入場面で児童の思考に「ずれ」を生じさせる際に、予想される児童の反応を超えるような「しかけ」が用意されると、児童の思考に混乱を招く恐れがある。「しかけ」を考える際には、児童の発達段階や予想される反応を吟味する必要がある。

(2) 全員が共通しためあてをもって問題解決に取り組むためには、「今までのやり方では解けない。」という困り感を共有することが大切である。困り感を共有し明確にしていくための働きかけが必要である。

(3) 対話の力を高めさせるために、話す力の育成だけでなく、聞く力の育成も並行して進めていくことが課題である。安心して話すことができる学級を作るために、日常的に聞く態度や環境を整える必要がある。

(4) 教師の問い返しにはよく反応し、考えを深めてはいるが、児童同士の問い返しについては改善の余地がある。今後は、児童同士の問い返しの手立てを明確にし、日常的に児童に指導していくことが求められる。

（記入者　松尾　亮祐）

白銀南小

# 「わかった！できた！役立った！」が実感できる授業づくり

## ～問題解決的な学習の授業実践を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　越　戸　　順　子

### １　研究主題について

本校の児童は、明るく素直で、与えられた課題に対してまじめに取り組む。しかし、自分の力を高めようと意欲をもって自ら進んで学習に取り組むという点では、消極的な姿が見られる。このような実態から、本校では、教育目標として「豊かな心をもち、主体的に活動する子」、努力目標として「進んで学習する子」を掲げ、自ら課題を見つけ、問題解決に向けて意欲的に取り組む児童の育成を目指している。

校内研究では、平成２８年度以降、国語科を中心に、書く力や読む力の育成に取り組んだ。また、令和元年度から令和３年度にかけては、児童がより主体的に学習に取り組み、思考力・判断力・表現力を伸ばしていくことを目標に、国語科における「問題解決的な学習」を軸として、研究を進めてきた。

その結果、①児童間の問いの共有、②自分の考えを積極的に発信する児童の増加、③学習の振り返りによる次時への学習意欲の向上、という３つの研究成果が得られた。一方、研究課題として、「相手の意見に自分の考えをつなげて話し合ったり、疑問点について問い返しをしたりすること。」「自分の変容を見取ったり、友達の考えを取り入れたりする多面的な振り返りをすること。」が挙げられる。

そこで、前年度までの成果と課題をふまえ、今年度は「問いをもたせる学習課題の設定」と「話合い活動の充実」の２つの取組を継続的に検証しつつ、「学習を振り返り、学ぶ意欲を高める」という取組についてもさらに研究を深めたいと考える。「友達の意見を受けて、自分の考えを発信すること」「自分の考えと友達の考えをもとにした上で意見を深めるような話合いを行うこと」「問いに対する振り返りを土台とし、自分自身の考えや正解にとらわれない多面的な振り返りを行うこと」などによって、児童の学ぶ意欲を高められると考え、本研究主題を設定した。

### ２　研究のねらい

問題解決に向けて意欲的に取り組むための効果的な指導のあり方を、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

(1) 児童一人一人に問いをもたせる学習課題を設定し、話合い活動を充実させることによって、児童が問題解決に向かうことができる。

(2) 「わかった！できた！役立った！」が実感できる振り返りを充実させることによって、児童の学ぶ意欲を高めることができる。

### ４　研究内容

(1) 学習課題の工夫（一人一人に問いをもたせる課題設定・提示の仕方）

(2) 課題解決に向けての話合いの工夫

(3) 振り返りを生かした学びの工夫（変容を見取り、次の学びに生かす）

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者等 | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| ４ | １３ | | 全体会（共通理解） |
| ６ | １ | 小・中学校ジョイントスクール推進事業<br>（白銀南中学校の授業を参観） | 分科会・全体会<br>（学習・生活・行事・特別支援） |
| ６ | ２７ | 第１回授業研究 算数科（中学年）<br>４年３組 授業者 中園 由香 教諭 | 要請訪問<br>研究協議会（グループ・全体会） |
| １１ | ２ | 第２回授業研究 国語科（低学年）<br>１年２組 授業者 中野 茉由 教諭 | 研究協議会（グループ・全体会） |
| １１ | ９ | 小・中学校ジョイントスクール推進事業<br>（白銀南小学校で授業を実施） | 分科会・全体会<br>（学習・生活・行事・特別支援） |
| １１ | ２４ | 第３回授業研究 算数科（高学年）<br>５年２組 授業者 植村 一也 教諭 | 研究協議会（グループ・全体会） |
| １ | １２ | | 全体会（成果と課題） |
| ２ | １ | | 全体会（研修のまとめ、<br>来年度の方向性・計画） |
| ２ | １５ | | 全体会<br>（来年度の研修について） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容等 |
|---|---|---|
| ４ | ２７ | 子ども理解・生徒指導　情報交換 |
| ５ | ２７ | 図画工作　描画・版画の効果的な指導法について |
| ６ | １０ | 幼保こ小連携推進事業　授業公開（１学年） |
| ８ | ２３ | ＩＣＴ機器（クロムブック）の活用方法について |
| ９ | ２８ | 特別支援教育について |

## ６　研究の成果

(1) 授業の導入を工夫し、前時との違いや思考のずれを明確にすることで、それぞれの児童が問題意識をもち、問題解決に向かおうとする意欲を高めることができた。

(2) 話合い活動にかける時間を十分に確保したり、話し合うときの児童の立場を明確に示したりすることで、友達の考えを認め、意見を積極的に発表しようとする意欲を高めることができた。

(3) 学習の達成度を可視化したり、学習の振り返りを行ったりすることで、児童と教師の両者が学習の理解度を細かに把握することができた。

## ７　研究の課題

(1) 話す・聞く力の個人差により、話合い活動に積極的に取り組むことが難しい児童がいる。どの児童でも活発に意見交流ができるよう、教師の発問や話合いの形態をさらに工夫する必要がある。

(2) 話合いの中で、友達の考えを取り入れてよりよい考えにすることが難しい。考えを深める活動を日常化し、児童が主体的な話合いを行うことができるよう工夫する必要がある。

(3) 学習後に、意見の変容や学習の中での気付きについて振り返る児童が少ない。正解したことや達成したことだけでなく、学習過程においても多面的に振り返り、次の学びに生かすことができるような手立てを講じる必要がある。

（記入者　　佐藤　元）

町畑小

# 主体的に学び合う子どもの育成

## ～「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を目指して～（３年計画の１年次）

校長　　後　藤　　浩

### １　研究主題について

本校では、教育目標に「心豊かにたくましく」と設定し、どの子にもわかりやすい授業をすることで、一人一人が生き生きと明るく学ぶ活気に満ちた学校を目指して教育活動を展開している。

昨年度までは、研究主題を「学びを生かす子どもの育成」とし、導入から課題設定までの発問や教材提示に工夫を凝らして、既習とのずれを感じさせるようにしたり、振り返りでは視点やキーワードを与えて書かせたりして、既習を生かしながら主体的に課題を解決しようとする児童の育成を目指してきた。その結果、分かったことやできたことを振り返り、友達との関わりから自分の学びが広がったことや次に生かしたいことなどを書く児童が増えてきた。一方で、教育活動のアンケートにおいて、児童から「自己肯定感や自己有用感」と「相手を意識して表現する」の項目について、肯定的な自己評価が得られなかった。また、授業においては、自信のない問いに対して消極的な態度を見せる児童が多く、一部の児童で学習が進んでいる傾向がある。

このことから、主体的・協働的な学びを通して児童の自己肯定感や自己有用感を高めることを目指して本研究主題を設定するに至った。３年計画の１年次として、今年度は国語科説明文の学習において、全ての児童が自分の立場を決定することができるような教材提示や発問を工夫し、学習のゴールを明確にした授業展開を目指す。また、自分の考えや根拠について意見交流して学びを広げ、集団解決の場で学びを深めるための板書についても研究する。さらに、日常的に安心して表現できるように、教師が児童の発言を肯定的に価値づけたり、話し方・聞き方などの学び合いの基礎的技能の向上を図ったりすることで、主体的に学び合う児童の育成に努め、児童の自己肯定感や自己有用感を高めていきたい。

### ２　研究のねらい

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を目指し、主体的に学び合う子どもを育成するための国語科（説明文）の指導の在り方を明らかにする。

### ３　研究仮説

児童が主体的に取り組む課題設定の工夫や協働的に解決する場面における学びを広げ深める手立ての工夫を行うことで、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

### ４　研究内容

⑴　児童が主体的に取り組む課題設定の工夫

ア　教材提示や発問等の働きかけ

イ　自分の考えや立場の可視化

⑵　学びを広げ深める手立ての工夫

ア　意見交流の方法

イ　集団解決場面の板書

## ５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく研究授業等

| 月 | 日 | 学年・授業提案者（報告者）・題材名・講師 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | 第１回授業研究（３学年）　授業者：髙谷　園江　　国語「こまを楽しむ」<br>講師：八戸市立長者小学校　教頭　上柿　尊志氏 |
| 7 | 20 | 指導課訪問授業実践報告会 |
| 11 | 10 | 第２回授業研究（５学年）　授業者：三橋　亜未　　国語「固有種が教えてくれること」<br>講師：八戸市立長者小学校　教頭　上柿　尊志氏 |
| 2 | 22 | 国語科（説明的文章）授業実践報告会 |

⑵　一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師 |
|---|---|---|
| 6 | 29 | 「国語科説明文における指導方法、問題解決的な授業づくり」<br>講師：八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　福田　秀貴氏 |
| 7 | 13 | 「一人一台端末の活用について」<br>講師：八戸市総合教育センター主任指導主事　石井　一二三氏 |
| 7 | 20 | 「エピペンの使い方について」<br>講師：本校養護教諭　佐藤　春花 |
| 8 | 19 | 「外国語教育について」<br>講師：八戸市教育委員会　教育指導課副参事兼主任指導主事　日向端　聖氏 |
| 1 | 10 | 「AED 救命救急講習会」<br>講師：八戸市東消防署署員 |

## ６　研究の成果

⑴　授業の導入において、ずれや疑問、解決意欲が生じるように教材提示を工夫し、板書や赤白帽子、タブレット端末等で立場の選択を可視化させたことで、根拠や理由を表現しようと主体的に課題解決に向かう姿が多く見られた。

⑵　同じ立場同士で考えを伝え合ったり、異なる立場で理由や根拠を示し合ったりしたことで、学びを広げ深めていくことができた。また、教師が児童に考えを変化させた理由を問うなどして児童の発言を促したことは、児童の学びを深めることに効果的だった。

## ７　研究の課題

⑴　立場の表明や教材提示の工夫は児童の意欲を喚起するきっかけとなったが、根拠や理由を表現するための手立てを必要とする児童が多かった。より多くの児童が、意見交流に参加できるように、個別のつまずきに対する手立ても充実させたい。

⑵　タブレット端末を生かした立場の表明や意見交流の可能性を探っていくために、情報モラルを繰り返し指導していく必要がある。

⑶　今年度の研究では、集団解決の場面の板書を手立てとして、児童の話し合いが広がり深まることの効果は得られなかった。教師がファシリテーターとして意見をつないだり、掘り下げたりしながら、効果的な板書ができるように今後も研修を重ねたい。

（記入者　髙谷　園江）

鮫小

# 関わり合いながら、ともに成長する子どもの育成

## ～特別支援教育の充実と改善を通して～

（１年計画の１年次）

校　長　　鈴　木　規　夫

### １　研究主題について

本校は、「明るく思いやりのある子」「めあてをもって学ぶ子」「健康でたくましい子」を教育目標に掲げ、徳・知・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成のため、「心の教育」を基盤とし、個を生かしながら「生きる力」の育成を推進してきた。

昨年度は、「かかわり合いながら、学びを深める子どもの育成」という研究主題で、国語科における授業構成の工夫や思考を伴う言語活動の充実について取り組んだ。児童が見通しをもって問題解決に取り組んだり、伝え合う場面での言語活動の充実が見られたりという成果が見られた。しかし、児童の中には、学びに参加できずに学習意欲をもてないまま過ごしている子どもや、個別の支援や配慮が必要な子どもが多くいるのが現状である。

そこで、今年度は、誰にでも分かりやすい授業づくりを実践していくために、教科を絞らずに、特別支援教育の視点を生かした授業のあり方について研究を深めていくこととした。また、個別の支援を必要とする児童の実態が多様であるため、全体でのケース会議を行い、事例研究をすることで、児童一人一人の特性に応じた支援について理解し、日常の実践に役立てていきたいと考える。個別の指導計画については、作成するだけではなく、それを生かした実践や改善などが行えるように、進め方について話し合い、共通理解していく。このような研究を通して、関わり合いながら、ともに成長する子どもを育成していきたい。

### ２　研究のねらい

関わり合いながら、ともに成長する子どもの育成を目指して、特別支援教育の視点を生かした授業のあり方や通常学級における特別な支援を必要とする児童への配慮と工夫について、実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

誰にでも分かりやすい授業づくりや、通常学級における特別な支援を必要とする児童についての事例研究及び個別の指導計画作成の進め方について考え実践することで、関わり合いながら、ともに成長する子どもを育成することができると考える。

### ４　研究内容

(1) 特別支援教育の視点を生かした授業のあり方

ア　誰にでも分かりやすい授業について

(2) 通常学級における特別な支援を必要とする児童への配慮と工夫

ア　事例研究（情報の共有を含む）

イ　個別の指導計画作成の進め方

## ５　研究の経過

(1) 研究の仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 研究内容等 |
|---|---|---|
| １１ | ２８ | 小・中ジョイントスクール授業公開（全学級） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師等 |
|---|---|---|
| 5 | １１ | ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに関する研修<br>講師：八戸市こども支援センター　上澤　司 |
| 6 | １６ | ケース会議及び気になる子の見方・捉え方・考え方についての研修<br>講師：八戸市こども支援センター　上澤　司 |
| 6 | ２９ | ケース会議及び保護者との連携についての研修<br>講師：八戸市こども支援センター　上澤　司 |
| 7 | １１ | ユニバーサルデザインについての研修<br>講師：八戸市こども支援センター　上澤　司 |
| 9 | １２ | ケース会議及び学習のつまずきへの対応についての研修<br>講師：八戸市こども支援センター　上澤　司 |
| １０ | １２ | LD 及び愛着障害についての研修<br>講師：八戸市こども支援センター　上澤　司 |
| １１ | 9 | １人１台端末研修会「クロムブックの活用について」<br>講師：八戸市総合教育センター　指導主事　大下　洋一 |

## ６　研究の成果

(1) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについて研修し、日常の実践に役立てることで、課題解決に向かう児童の意欲につながった。

(2) 通常学級における特別な支援を必要とする児童についてのケース会議を全体で行うことで、児童の特性に応じた支援について学び、実践することができた。

(3) 年間を通して研修を進めたことで、気になる児童の見方や捉え方、考え方についての理解を深めることができた。また、保護者対応の基本についても学ぶことができた。

## ７　研究の課題

(1) 学習面で困っている児童が多いため、誰にでも分かりやすい授業づくりについてさらに研究が必要である。

(2) 個別の指導計画作成の進め方について、全体で共通理解したり研修で活用したりするなどの工夫が必要である。

（記入者　小山　ゆかり）

種差小

# 自分の考えをもち、分かりやすく伝え合う子供の育成

## ～複式学習において、主体的・協働的に学びを深め合う授業づくり（算数科）～

（３年計画の３年次）

校長　　寺　口　朋　男

### １　研究主題について

教育目標「自ら学ぶたくましい子」の具現化のためには、身に付けた知識及び技能を活用し、自ら考え表現し合いながら主体的に学ぶことのできる資質や能力の育成が重要であると考える。これを受け、昨年度は少人数学習において、主体的・協働的な学びを生み出す授業づくりについて研究した。その成果として、問題提示等の工夫により、問いが生まれ、主体的に解決しようとする姿に結び付いた。また、考えの違いを生かしてみんなで学ぶことを意識した授業づくりを行うことにより、みんなで解決しようという気持ちが高まり、分かりやすく説明しようとする態度が育ってきた。一方で、間接指導場面において主体的・協働的な学びを生み出す手立てを工夫するとともに、児童の学びを教師が適切に把握し児童の思考過程を大切にした学びを継続させていくことにより、学力を着実に高めることが課題として挙げられた。

そこで今年度は、複式学習において主体的・協働的に学びを深め合い、算数科で求められる資質・能力を高める授業づくりについて、授業実践を通して明らかにしていきたい。

### ２　研究のねらい

複式学習において、主体的に考え、伝え合うことによって学びを深め合える子供を育てるために、効果的な指導法を算数科の実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

間接指導場面における効果的な授業展開を工夫することにより、複式学習において主体的に考え、協働的に学びを深め合う力を高めることができると考える。

### ４　研究内容

(1) 間接指導場面において主体的・協働的な学びを生み出すための指導
　ア　効果的な学習指示の在り方（ガイドの育成、活動内容の明示）
　イ　直接指導場面における指導の工夫（問いを生む工夫、解決の見通し）
(2) 児童の学びを教師が把握する方法
　ア　思考過程を残す工夫（黒板、ミニボード、ノートの記述、ふりかえり）
　イ　学習過程の工夫（同時間接指導、わたり後の児童の報告）

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 内容・学年・題材名・授業者 |
|---|---|---|
| ６ | ３ | 三八管内複式学級担当者研修会公開授業<br>１年「ふえたりへったり」２年「たし算とひき算のひっ算」授業者　小林美奈子<br>３年「表とグラフ」　　４年「１けたでわるわり算の筆算」授業者　山内　温子<br>５年「割合を表す小数」　６年「割合を表す分数」　　授業者　阿保　祐一 |
| ９ | １ | 授業参観ウィークⅠ |
| １０ | ２７ | 授業参観ウィークⅡ |
| １１ | ９ | 南浜中学校区小・中ジョイントスクール |
| １１ | １８ | 教育指導課・総合教育センター訪問 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内　容　・　講　師　等 |
|---|---|---|
| ４ | ４ | 非違行為根絶のための研修　　講師　教頭　山口将貴 |
| ７ | １３ | 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり<br>講師　教育指導課　大野勉主任指導主事 |
| ８ | ３１ | 県学力調査採点及びNRT分析結果についての考察と対策 |
| ９ | ２１ | 考え議論する道徳の研修　　講師　根岸小学校　佐藤直子教諭 |

## ６　研究の成果

(1) 効果的な学習指示の在り方を工夫するとともに、ガイドを中心とした学びを進める授業づくりに努めたことにより、間接指導場面において、主体的・協働的な学びが見られるようになってきた。

(2) 間接指導場面における児童の学びの状況を把握するための工夫や同時間接指導を意図的に設定し俯瞰して学習状況を把握したことにより、思考が途切れることなく学びを継続させることにつながった。

## ７　研究の課題

(1) 算数科の指導で取り組んできた「問いを生む工夫」や「学びの継続」を他教科に広げて、問題解決への必要感・切実感を高める指導の在り方について研究を深めたい。

(2) 話合い場面における相互理解が不十分な場合に、学びが深まらないことが課題として挙げられた。お互いの考えを解釈し合うことにより、より協働的に学びを深める授業づくりについて研究を深めたい。

（記入者　小林美奈子）

大久喜小

# 主体的に問題解決に取り組み、伝え合う子どもの育成

## ～子どもが本気で話したくなる算数科の授業づくりを通して～

（３年計画の１年次）

校　長　　髙　橋　　将　樹

### １　研究主題について

⑴ 教育目標の具現化のために

本校では、教育目標に「夢に向かいたくましく生きる大久喜の子」、努力目標に「進んで勉強する子」を掲げ、夢や希望をもち、進んで学習する児童の育成を目指している。

その具現化に向け、算数科の授業を中心に、「本気で問題解決に取り組み、お互いの考えを伝え学び合う姿」を目指す児童像として掲げた。気付きを生かして課題をとらえ、考えや立場の相違を可視化することで、自力解決していく意欲につながり、問題を解決していく経験を積み重ねることが教育目標の具現化につながると考え、研究主題を「主体的に問題解決に取り組み、伝え合う子どもの育成」と設定し、研究を進めてきた。

⑵ これまでの研究経過から

本校児童は、自分から粘り強く問題に取り組む力が弱い傾向にある。そこで昨年度は、問題把握のさせ方や課題を解決していくための手立てを具体的に工夫することによって、自分でできる部分を増やし（＝主体的に問題を解決する）、自分一人の力で解き進めること（＝本気で取り組む）ことができるのではないかと考え、算数科を中心に実践を積み重ねてきた。

成果として、次の点が挙げられた。

ア　課題との出会わせ方、導入の工夫、発問の仕方や問い返し等、支援の仕方を工夫し、子どもたちが本気になる場面が増えてきた。

イ　「比べる」「選ぶ」「順番をつける」等、展開を工夫することで、子どもたちが授業に参加しやすくなったり、考えを検証したりしていく流れで授業を進めることができた。

ウ　考えを交流する場を授業の中に位置づけて、日常的に取り組むことができた。

一方で、次のような課題が浮かび上がった。

ア　児童が解きたい、話したいと思うような課題の設定や授業構成を工夫することで、あえて「場」を設定しなくても、伝えたくなるような本気度を高めていく必要がある。

イ　考えに根拠をもたせ、いろいろな意見を柔軟に取り入れていく力を育てていく必要がある。

そこで､本気で問題を解決したくなるような課題との出会わせ方や自己決定の場面を工夫したり、考えや立場の相違を可視化したりすることで、主体的に問題解決に取り組み、少人数の良さを生かした「伝え合い」が実現するのではないかと考えた。

### ２　研究のねらい

主体的に問題解決に取り組み、伝え合う力を育てるための効果的な学習指導の在り方を、算数科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説（主体的→自分一人の力で解き進めること＝本気で取り組むこと）

算数科の学習指導において

⑴ 本気で問題を解決したくなるような課題との出会わせ方や自己決定の場を工夫する。

⑵ 考えや立場の相違を可視化する。

### ４　研究内容

⑴ 課題との出会わせ方と自己決定の場面の工夫

ア 子どもの問題意識を刺激する課題設定のしかた

イ 自己決定の場面（見通しをもつ、見当をつける、アイテムの選択）

⑵ 伝え合う場面設定の工夫

ア どの段階で、どのようなしかけを組むか

## ５　研究の経過

⑴ 研究授業

| 月 | 日 | 学年・単元名・授業者 | 成　果 |
|---|---|---|---|
| 6 | 15 | ２年　図をつかって考えよう<br><br>授業者：竹下　豊一　教諭 | ○「来ました」という言葉から単純に「たし算」と考えたが、問題場面をペープサートで示し、本当にたし算でよいのかゆさぶりをかけることで、主体的に学習に取り組めた。<br>○バラバラテープ図を並べかえることによって、図を完成させ、立式に結び付けることができた。<br>⇒問題把握を丁寧にしたため、やや時間がかかった。複式になることを考え、短時間でできるように工夫したい。 |
| 7 | 6 | ３・４年<br>３年　表とグラフ<br>４年　垂直・平行と四角形<br><br>授業者：佐々木　永子　教諭 | ＜３年生＞<br>○目盛りの異なるグラフ用紙の中から、数値に合うものを選ぶことが、選ぶための思考・決定を伴うので、他の考えを聞く、理由を考えるなどの主体的な思考を促し学び合うことができた。<br>＜４年生＞<br>○四角形を「おみくじ」として仲間分けすることで、平行に着目させて分類することができた。<br>⇒内容的に、もう少し負荷をかけた方がよかった。 |
| 9 | 21 | ５・６年<br>５年　分数（１）<br>６年　立体の体積<br><br>授業者：磯谷　琢磨　教諭 | ＜５年生＞<br>○リットル図を用い、色分けして比べることで自分たちで答えの予想を立てたり、答えの間違いに気づかせることができた。<br>⇒児童の発言から図に線を書き込み、分数として分かりやすくしたほうがよかった。<br>＜６年生＞<br>○ 模型を使って底面積にあたる場所を確認してから、自力解決させた。 |
| 11 | 24 | １年　３つのかずのけいさん<br><br>授業者：千葉　美樹子　教諭 | ○じゃんけんゲームの活動を３口の計算に表すことを通して、「勝つと増える」「負けると減る」という言葉を、＋・－に置き換え、自然に立式できた。<br>○適用題では、勝つと「増えるカード」、負けると「減るカード」を用いて可視化したことで、立式への手掛かりとなり、主体的に数学的活動に取り組むことができた。<br>⇒言葉→図→式と思考を整理していく仮説だったが、児童の思考過程が言葉→式だったので、あえて図は使わなかった。 |

⑵ 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師 |
|---|---|---|
| 5 | 27 | １人１台端末の活用 ジャムボードを使った授業展開について<br>講師　総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　先生 |
| 9 | 21 | 子どもが話したくなる算数の授業<br>講師　種差小学校　教諭　阿保　祐一　先生 |

## ６　研究の成果

⑴ 課題との出会わせ方、導入の工夫、可視化の取り入れ方など、子どもが本気になるしかけのバリエーションが増えた。
⑵ 自分の考えや立場を言葉で表現することが苦手な児童でも、図や表を用いて可視化することで、自分の考えを伝えたり、話し合ったりできるようになってきた。
⑶ 課題との出会わせ方が重要で、子どもたちが自分の気持ちや考えで学んでいくことができた。

## ７　研究の課題

⑴ 子どもたちだけの学びの時間（自力解決）を、複式の間接指導にどのようにつなげていくか、子どもの学び方も含めて考えていく必要がある。
⑵ 少人数を生かした伝え合いを深めていく支援の仕方を考える必要がある。

（記入者　佐々木　永子）

金浜小

# 主体的にかかわり、ともに学び合う子の育成

## ～少人数・複式学級における、算数科の授業実践を通して～

（３年計画の３年次）

校長　野田頭　典枝

### １　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校の教育目標は「夢に向かって挑戦する元気な子」である。努力目標である「かんしゃする子」「ねばりづよい子」「はきはきはなす子」「まなびつづける子」の育成に向けて教育活動を展開している。

「はきはきはなす子」「まなびつづける子」の具現のためには、主体的にかかわることや思いや考えをつなげて話合うこと、自分の学びを振り返ることを通して、自分に自信をもち主体的に表現する力を高める指導の充実を図ることが必要であると考えた。

(2) これまでの研究経過から

昨年度は、自信をもって学び合う児童を育成するために、算数科において、解決の見通しをもち問題に取り組ませ、話合いや振り返りを学習過程に位置づけた指導の工夫について、授業実践を通し研究を行った。その結果、成果として以下のようなことが挙げられた。

ア　本時の内容に関わる既習事項の掲示、前時の学習内容の想起、教具や図の提示等を行うことは、問題解決の見通しをもつことができ、児童同士で間接指導を進めていくことに有効だった。

イ　指導過程内に意図的・計画的に話合いの場を設定し、ペアやグループ、全体との関わり方を工夫し話合いをさせてきたことにより、自分の考えに自信をもったり友だちとの違いに気づいたりすることができるようになってきた。

ウ　振り返りの工夫や継続により、内容に質の高まりが生まれ、自分の学びや伸びを実感し、次時への意欲をもてるようになってきた。

これらの成果の一方で、より主体的に関わり、学び合う児童を育成するために、以下のことが課題としてあげられた。

ア　主体的に問題解決に向かうための、授業の導入から課題設定までの教師のはたらきかけ。

イ　考えを深めさせるための、児童同士の話合いや教師と児童での話合いの工夫。

ウ　学習効果を高めるためのICTの活用。

そこで今年度は、過去２年間の研究の成果を取り入れつつ、「主体的に問いをもち問題に取り組み、話合いを通し考えを広げ深められる子」という姿をめざす児童像として掲げ、問いのもたせ方の工夫、自力解決・話合いのさせ方や支援の工夫を意識した授業実践を行うことにより、本主題の実現にせまることができるのではないかと考えた。

### ２　研究のねらい

主体的に問いをもち問題に取り組み、話合いを通し考えを広げ深められる児童を育成するための指導のあり方を、算数科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

少人数・複式学級の算数科学習指導において、導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫をし、対話を通し協働的に学ぶことによって、学ぶことのよさを実感し、自信をもって学び合う児童を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫

ア　問題提示の工夫

イ　発問の吟味

ウ　見通し（考え方・方法）のもたせ方の工夫

(2) 対話を通して学び合うための、話合いの指導や支援の工夫

ア　自力解決を大切にした話合いの場の設定

イ　明確な視点で比較・検討させるような、目的意識をもった話合いのさせ方の工夫

ウ　話合いにおける、教師のはたらきかけ（板書、切り返し、揺さぶり、発問、指示等）の工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・題材・授業者など |
|---|---|---|
| 7 | 6 | 第１回授業研究（５・６年）<br>５年　「合同な四角形のかき方」<br>６年　「面積の公式を使って」<br>授業者　教諭　佐藤　かおる |
| １０ | ２５ | 第２回授業研究（３・４年）<br>３年　「あまりの大きさ」<br>４年　「面積の求め方の工夫」<br>授業者　講師　北村　美沙紀 |
| １１ | ３０ | 第３回授業研究（１年）<br>１年　「ひきざん（２)」<br>授業者　教諭　泉山　武志 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 6 | 3 | 複式担当者研修会（種差小学校） |
| 6 | ２９ | １人１台端末の活用研修　（総合教育センター主任指導主事　石井　一二三　氏） |
| １１ | １６ | プログラミング教育研修　（総合教育センター主任指導主事　石井　一二三　氏） |

## ６　研究の成果

(1) 本時の内容に関わる既習事項の掲示、前時の学習内容の想起、簡易な問題の提示等、教師のはたらきかけを工夫することにより、見通しをもち、主体的に問題解決に取り組むことができた。

(2) 話合いの進め方や観点を掲示したり、自力解決をもとにしたペアやグループでの話合いの場を設定したりするなど、話合いのさせ方を工夫することにより、対話を通して自分の考えを広げたり深めたりすることができた。

(3) ジャムボードを使って自分の考えを表したり、他の考えと比べたりするなど、１人１台端末を効果的に活用することにより、話合いへの意欲をもてるようになった。

## ７　研究の課題

(1) 間接指導で主体的に問題解決に向かうための、見通しをもたせる手立ての工夫。

(2) 多様な考えにふれ、自分の考えをつなげたり広げたりするための、児童同士の話合いや教師と児童での話合いの工夫。

(3) ともに学び合うための対話力を育てる指導の工夫。

（記入者　佐藤　かおる・松田　典孝）

根城小

# 主体的に学び合う子の育成

## ～各教科における対話的学びの実現を目指して～（３年計画の３年次）

校長　中　村　雅　臣

### １　研究主題について

昨年度、本校では、「主体的に学び合う子の育成」という研究主題のもと、児童の考えを深める対話的学びの在り方と認め合う場の工夫に焦点を当てて研究を進めた。全学級が研究主題に沿った授業を様々な教科で実践し、検証してきた。研究の成果として、次の点があげられる。

・課題設定場面では、既習事項を想起させて課題と関連付けたり、課題解決のためのイメージをもたせる資料提示を工夫したりする手立てを取り入れた。このことにより、児童の追究意欲が高められ、見通しをもって課題に取り組む姿が見られた。

・伝え合う場面では、「身振り手振りを取り入れて表現させる」「分かりやすく書いて伝える」「教師が全体の合意形成をサポートする」などの手立てを工夫した。様々な対話を取り入れた実践を行うことで、友達と関わり合いながら学ぶよろこびを感じさせることができ、学びに向かう主体性が高められた。

・認め合いの場面として、小グループでの伝え合いの後に相手の話した内容に対する励ましや評価をしたり、学習内容のまとめや感想のふりかえりの他に、「友達のいいところ」を視点として与え書く活動を取り入れたりした。これらの活動により、互いに認め合う姿が見られ、子ども同士のよりよい人間関係作りにつながる授業を進めることができた。

また、昨年度のＣＲＴの結果（観点別得点率全国比）を見ると、ほとんどの学年において、全ての教科の「思考力・判断力・表現力」に関する観点別の得点率が、合計得点率を上回っていた。上記の点から、日常の授業において、追究意欲を高める課題設定や対話的学びの工夫をした授業を展開することで、児童の「思考・判断し、表現する力」を伸ばすことができたと思われる。

一方、課題として、次の点があげられる。

・課題提示の工夫により、児童は意欲的に課題に取り組もうとするが、自力解決では活動や思考が進まないという場面も見られた。課題を自分のものとしてとらえさせ、より具体的な見通しをもたせるなどの教師側の働きかけを工夫していく必要がある。

・伝え合う場面では、話合いの目的が曖昧になってしまった実践も見られた。自己の考えを広げ深めるための対話的な学びの実現のために、伝え合う活動の目的を明確にし、児童にも目的意識をもたせた授業展開を考えていく必要がある。

・認め合う場面では、友達の頑張りを認めるだけでなく、交流した内容のよさや共感できたことにも着目させることが次の学びへの意欲につながると考える。認める内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような認め合いの場を設定して、学び合いのよさを実感させる必要がある。

そこで、今年度は、昨年度までの研究を踏襲し、「児童が主体的に学び合うための、より効果的な対話的活動と認め合い」について、全教科での授業実践により研究することにした。具体的な見通しをもたせる働きかけや、目的を明確にした対話的活動・認め合いの内容や方法の吟味を授業で実践し、より充実した対話的学びについて協議していく。そのような研究実践を積み重ねることで、主体的に学び合う子が育つと考える。

### ２　研究のねらい

児童が主体的に学び合うためには、対話的な学びの展開を工夫していくことが効果的であることを授業実践を通して明らかにする。（課題と向き合う、伝え合う、認める・認め合う）

### ３　研究仮説

対話的な学び（課題と向き合う、意思表示・伝え合う、認める・認め合う）の工夫をすることにより、児童が主体的に学び合うことができる。

### ４　研究内容

対話的な学びの工夫

ア　考えたくなる課題設定や意欲的に課題に向かうための手立ての工夫（課題と向き合う）

イ　目的を明確にした伝え合う場の効果的な設定（意思表示・伝え合う）

ウ　学習意欲を高める認め合う場の工夫（認める・認め合う）

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 曜 | 授業研究 | 全体会等 |
|---|---|---|---|---|
| ４ | １３ | 水 | 今年度の研究の方向性について | 全体会（共通理解) |
| ６ | １５ | 水 | 指導案の書き方・授業実践構想 | 全体会（授業研究） |
| ６ | ２２ | 水 | 授業実践構想・指導案検討 | 学年ブロック |
| ７ | １３ | 水 | 指導課・センター訪問<br>校内研授業研究学年の授業研究(４年) | 全体会（授業研究） |
| ９ | １４ | 水 | 授業実践報告・一人一台端末活用研修① | 全体会（授業研究） |
| ９ | ２１ | 水 | 校内研授業研究学年の授業研究(５年) | 全体会（授業研究） |
| １０ | １９ | 水 | 授業実践報告・一人一台端末活用研修② | 全体会（授業研究） |
| １１ | １６ | 水 | 授業実践報告・指導案検討 | 全体会（授業研究） |
| １２ | １４ | 水 | 校内研授業研究学年の授業研究(１年) | 全体会（授業研究） |
| １ | １２ | 木 | 校内研修アンケートの結果と研究のまとめ | 全体会(成果と課題) |
| １ | ２５ | 水 | 来年度の研究の方向性について | 全体会(成果と課題) |

＊授業研究学年以外の先生方は、校内研究の視点にそった授業の実践報告を全員行う。

(2) 一般研修等

| 月 | 日 | 曜 | 一般研修 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ５ | ２５ | 水 | 児童理解　配慮を要する児童(通常学級)<br>児童への支援の仕方 | 全体会 |
| ６ | １ | 水 | 児童理解　配慮を要する児童(ひばり学級)<br>児童への支援の仕方 | 全体会 |
| ７ | ２０ | 金 | 教育課程研究集会 | |
| ８ | ２２ | 月 | 不審者対応研修 | 外部講師 |
| ８ | ３１ | 水 | 県学習状況調査分析・考察 | |
| ２ | ２２ | 水 | ＣＲＴ分析・考察 | |

## ６　研究の成果

(1) 課題設定場面では、国語科において「図鑑を作ろう」という児童が意欲的に活動できるめあてを設定したり、教材の一文を変えて提示したりすることから、驚きや気付きが生まれ、考えたくなる課題が成立した。また、道徳科では、「誠実」という言葉の意味の理解を具体例により把握させてから、「誠実かどうか」という話合いをした。このことにより、児童の追究意欲が高められ、見通しをもって課題に取り組むことができた。

(2) 伝え合う場面では、「短冊を操作させる」「図を使って話し合う」「自分の立場を明確にしてから話し合う」などの手立てを工夫した。様々な対話を取り入れた実践を行うことで、学びに向かう主体性が高められた。

(3) 認め合いの場面として、全体での児童の発言を受けての肯定的な反応や、ペアでの伝え合いの後に相手の頑張りを認める言葉を日常の授業の中でも意識して指導し、子ども同士のよりよい人間関係作りにつながる授業を進めることができた。

## ７　研究の課題

自力解決や伝え合う場面において、児童全員の学習がスムーズに成立するために、どのような助言や補足が効果的であるか、できる限り準備しておく必要がある。また、認め合う場面では、日常の学習で発言を受けての反応の仕方や、友達の良いところを学び学習の見通しを意識することが、次の学びへの意欲につながると考える。内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような授業展開を考え、学び合いのよさを実感させていきたい。　（記入者　荒屋敷　智保）

白山台小

# 主体的に表現する児童の育成

## ～問いの意識をつなげる授業づくり（算数科）～（３年計画の２年次）

校長　　種市　八重子

### １　研究主題について

本校では、教育目標に「めあてに向かってともに学び合う子」を掲げ、校歌に謳われた「学ぶたのしさを分かちあう学校」「心とからだを鍛えあう学校」の実現を目指している。教育は人づくりという視点に立ち、すべての子どもに主体的に学ぶ態度を身に付けさせ、確かな学力を保証することを目指している。昨年度は、これまで実践してきたユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりをもとに、昨年度は、音楽科を通して表現力を高めるための指導の研究を進めてきた。「音楽を形づくっている要素」を意識した基礎・基本の確実な習得や、問題解決的な学習の充実を意識して授業づくりを進めてきた結果、児童が主体的に生き生きと学ぶ場面が見られるようになった。また、見通しをもたせてから学習を進めることや教材の焦点化や共有化を図ることで、児童の学びが深まり表現力を高めることができた。しかし、教師と児童による一方向の対話の場面が多く、児童相互が双方向に対話する「学び合い」の場面があまり見られなかった。また、児童がより主体的に取り組むための「問い」を意識した学習課題の設定や発問の工夫についての課題も残された。

そこで、今年度は、算数科を通して、児童の「問いの意識」を大切にした課題設定や、発問などの工夫により主体的に学習に取り組めるようにする。また、児童が互いの考えを共有し合う「学び合い」の場では、自分の考えを表現し合うことができるように学習形態や対話のさせ方を工夫したい。

今年度の学校目標は、「ともに学び合う児童の育成」である。子どもたち一人一人が学ぶ意義やよさを実感しながら、友達と協動的な学習に取り組むことで、思いや願いを主体的に表現することができ学ぶ力を高めていくと考え、本主題及び副題を設定した。

### ２　研究のねらい

児童が主体的に学び合い、表現し合うための効果的な指導の在り方を、算数科の授業実践を通して明らかにしていく。

### ３　研究仮説

学習課題の設定や仕方、表現の場を工夫することによって、「問いの意識」をもち、主体的に学び表現する児童を育てることができる。

### ４　研究内容

(1) 問いをもたせる働きかけの工夫

ア　解決の必要感や切実感のある課題設定

イ　「問いの意識」をもたせる発問の仕方や教材提示の工夫

(2) 「学び合い」を意識した場の工夫

ア　学習形態や対話のさせ方の工夫

イ　資料提示、ＩＣＴの活用、ノート・ワークシートの工夫等

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 学年・授業者等 | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| 4 | 6 | | 全体会（共通理解） |
| 4 | ２１ | | 全体会（指導案作成様式） |
| 7 | 5 | 第１回授業研究（要請訪問）<br>２年２組　授業者　教諭　埒見　駿介 | 公開授業 |
| 9 | 5 | 第２回授業研究（要請訪問）<br>６年３組　授業者　教諭　榊　綾子 | 公開授業 |
| １１ | １１ | 第３回授業研究（要請訪問）<br>３年２組　授業者　教諭　野澤　比奈乃 | 公開授業 |
| １１ | ３０ | | 全体会（今年度の成果と課題） |
| 1 | １２ | | 全体会（来年度の方向性①） |
| 2 | 8 | | 全体会（来年度の方向性②） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 一般研修等 |
|---|---|---|
| 4 | １３ | 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について」<br>講師：八戸市教育委員会教育指導課　　日向端　聖　副参事　兼　主任指導主事 |
| 6 | 8 | 児童理解の視点について①<br>講師：八戸学院大学短期大学部　　野口　和也　教授 |
| 8 | ３１ | 県学習状況調査の採点・分析・考察 |
| １０ | １２ | １人１台端末の実践的な活用例<br>講師：八戸市総合教育センター　　石井　一二三　主任指導主事 |
| １１ | ３０ | クロームブック活用講習会<br>講師：白山台小学校　田中　裕美　小向　一樹　工藤　佳 |
| 1 | １８ | 児童理解の視点について②<br>講師：八戸学院大学短期大学部　　野口　和也　教授 |
| 2 | １５ | 研修報告会 |

## ６　研究の成果

(1) 「問いの意識」をもたせるために、導入のはたらきかけを工夫したり、あえて児童を困らせる課題設定をしたりすることによって、児童の課題解決の意欲や表現したいという気持ちを高めることができた。

(2) ペア・グループに留まらずに自由に交流する形態の工夫や、ＩＣＴを活用した場の工夫をすることによって、一人で考えるよさと「学び合い」で話し合うよさを感じ取らせることや、「学び合い」による学習の広がりを感じることができた。

## ７　研究の課題

(1) 「問いが連続する」授業づくり

(2) 相手を意識した「学び合い」の場や表現の仕方の工夫（話し方・示し方）

(3) ＩＣＴを活用した「学び合い」の方法やそのよさを感じられる授業づくり

（記入者　工藤　佳）

西白山台小

# 運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもの育成
## ～自己の変容を実感できる授業づくりの工夫を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　加藤　慎一

### １　研究主題について

本校では、教育目標として「心豊かに　たくましく　ともに学び合う子」、努力目標として「よく聴き　よく考える子」「きまりを守り　思いやりをもつ子」「進んで体をきたえる子」を掲げている。今年度はこれらの目標を達成するため、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う授業」や「自尊感情や自己有用感を高める指導の充実」、「自己の体力向上と健康維持を意識して日々努力する態度の育成」に重点的に取り組み、「頭も心も体もたくましい子ども」の育成を目指すことにした。そのための教育活動を展開していくにあたり、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」を目標としている体育科の授業を中核に据えて研究を進め、他教科・領域を含めた日常の授業に反映させることが効果的であると考えた。

これまでの体育科を中核に据えて取り組んだ５年間の研究では、「組み合わせ単元」の有効性を実証し、教員の授業マネジメント力を向上させることができた。昨年度は、体育科における見通しと振り返りを生かした指導の工夫、１人１台端末を効果的に活用した体育の授業についての研究に取り組んだ。その結果、授業の導入場面で見通しをもたせることで、運動が苦手な児童も意欲的に取り組むことができるようになり、授業の展開・終末場面で児童の実態や活動内容に適した振り返りを行うことで、児童相互の関わりが生まれ、運動に対する理解を深めることができた。また、１人１台端末の動画撮影機能を有効に活用することにより、課題について具体的に話し合う力や、学習意欲を高めることにつながった。しかし、見通しをもたせることに注力した結果、学習課題が児童が解決したいこととずれてしまうことがあり、振り返り活動の具体的な方法について十分に吟味することができなかった。１人１台端末の活用も、運動量確保という課題が挙がり、日常的な活用には至らなかった。

そこで、これらの成果と課題から、今年度も課題設定と振り返りの場面での教師の働きかけについての研究を進めていく。まずは、児童に問いをもたせ、主体的に解決したくなるような課題設定や発問を工夫する。児童の実態に応じた分かりやすいものを提示できるようにしたい。そして、展開部で課題解決に取り組んだ後は、児童が自己の変容を実感できる振り返りを行う。場の設定や観点の示し方、発問の吟味などの工夫を行うことで、児童の学びを深め、体育の学習においても「わかった！できた！身についた！」を実感させたい。これらと並行して、児童の学習意欲を向上させるような１人１台端末の効果的な活用を研究することで、運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもを育成したいと考える。

### ２　研究のねらい

運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもを育てるため、課題設定や振り返りの場面でどのように教師の働きかけを工夫すれば児童が自己の変容を実感することができるのかを、日常の授業実践を通して明らかにしていく。

### ３　研究仮説

課題設定や振り返りの場面における教師の働きかけを工夫し、児童が自己の変容を実感できる授業づくりを行うことで、運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもを育成できる。

### ４　研究内容

(1) 児童が解決したくなる課題設定の工夫

(2) 児童が自己の変容を実感できる振り返りの工夫

(3) 体育の授業における１人１台端末の効果的な活用

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・題材名・授業者・助言者 |
|---|---|---|
| 5 | 25 | 第１回授業研究【高学年ブロック・要請訪問】<br>６学年「ハードル走」　授業者　教諭　外舘　季和<br>助言者　八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　竹井　亮　氏 |
| 6 | 29 | 第１回研究報告会【高学年ブロック】　５学年報告者　教諭　林　義隆<br>６学年報告者　教諭　外舘　季和 |
| 9 | 7 | 第２回授業研究【中学年ブロック】<br>４学年「走・跳の運動（小型ハードル走)」　授業者　教諭　小笠原　夏実 |
| 9 | 14 | 第２回研究報告会【中学年ブロック】　３学年報告者　教諭　深澤　美加子<br>４学年報告者　教諭　小笠原　夏実 |
| 12 | 7 | 第３回授業研究【低学年ブロック】<br>１学年　「にんじゃになって　とびばこあそび（器械・器具を使っての運動遊び)」<br>授業者　教諭　高谷　久美子 |
| 1 | 12 | 第３回研究報告会【低学年ブロック】　１学年報告者　教諭　高谷　久美子<br>２学年報告者　教諭　佐藤　光子 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師　等 |
|---|---|---|
| 7 | 6 | 「算数科における指導法～子どもと教師が創る算数を目指して～」<br>講師　総合教育センター副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉　氏 |
| 8 | 23 | 「みんなで使える！１人１台端末活用」<br>講師　旭ヶ丘小学校　教諭　佐々木　俊介　氏 |
| 8 | 31 | 県学習状況調査の分析・考察 |
| 10 | 19 | 特別支援学級授業公開<br>授業者　教諭　夏坂　美保子　教諭　山下　由美子　講師　湊　美穂<br>特別な支援を要する児童の対応について<br>講師　こども支援センター主任指導主事　小堀　祐二　氏 |

## ６　研究の成果

(1) 手本となる映像資料や前時の振り返りを活用したり、児童の思考を揺さぶる発問を工夫したりすることにより、児童はよく考え、解決すべき問いを見付けることができた。また、問いを共有させることにより、仲間と協力し、課題を解決しながら運動を楽しむ姿が見られた。

(2) 観点を与えて振り返らせたり、１単位時間の中で随時振り返る場面を設定したりすることにより、自己の変容をより実感させることができた。また、ワークシートやノートを活用し、教師がフィードバックを行うことにより、次時への意欲を高めさせることができた。

(3) １人１台端末を効果的に活用して児童に自分の動きを確認・修正させることが、運動技能の向上や協働的な学びにつながることが分かった。

## ７　研究の課題

(1) 考えを発言する児童が限られており、それぞれの考えを全体で共有できているとは言い難い。どの児童も自分の考えを言語化できるような手立てが必要である。

(2) １人１台端末の活用方法についての検証が不十分だった。普段の授業から積極的に端末を使用し、指導者側が様々な場面で活用できるようにしておくことが必要である。

（記入者　外舘　季和）

江南小

# 主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子の育成

## ～各教科における思考を促すしかけや授業展開を通して～

（１年計画の１年次）

校長　　笹川　力

### １　研究主題について

本校では、「強い子になろう」を教育目標に掲げ、児童の「生きる力」を育んでいくという理念を共有している。「生きる力」とは、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の３つの要素の調和である。

昨年度は３年計画の３年次として、「主体的に課題に向かい　ともに学び合う子の育成」をめざし、主に「発問」と「対話」の深め方の研究に取り組んだ。児童の思考につながる「しかけ」や思考を促すような「発問」を設定することにより、根拠を探ったり、予想とのずれから深く考えたりするなど、主体的に課題に取り組む態度が見られた。また、対話に必然性をもたせるために、ペアで課題解決に取り組ませた結果、間違いへの気付きや自分の考えに対する自信につながり、全体の場でも進んで発言する児童が多くなった。教師が「対話」の目的と視点を明確にするために問い返しをしたことは、児童から多様な考えが引き出され、個々の考えの深まりや広がりにつながった。

いくつかの成果があげられた中で、思考を伴う課題解決に消極的な児童や自分の考えを分かりやすく説明したり正しく書いたりすることが苦手な児童が見られるという課題が出されていた。そのため今年度は、これまでの成果を生かしつつ、主体的に課題に向かうための授業展開と表現意欲を高める活動方法を探っていき、「確かな学力」の育成を図りたいと考え、本主題を設定した。

### ２　研究のねらい

各教科の授業において、主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子を育てるための指導の在り方を授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

各教科の授業において、思考を促すような「しかけ」や授業展開を工夫したり、表現意欲を高める活動方法を探ったりしていくことで、主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子を育てることができると考える。

### ４　研究内容

(1) 児童が主体的に課題に向かうための工夫

・思考を促すような「しかけ」や「授業展開」の工夫

(2) 自分の考えを表現するための工夫

・自分の考えをもち、表現したいという意欲を高めるための活動の在り方

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究授業研究等

| 月 | 日 | 授業研究・教材研究等 |
|---|---|---|
| ９ | ２１ | 第１回授業研究（１学年　算数）<br>題材名　「ながさくらべ」<br>１年１組　授業者　教諭　三上　育子 |
| １１ | １６ | 第２回授業研究（５学年　算数）<br>題材名　「単位量あたりの大きさ」<br>５年１組　授業者　教諭　小坂　みどり |
| １１ | ２５ | 小・中ジョイントスクール推進事業　授業公開（全学年） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内　　容　　等 |
|---|---|---|
| ５ | ２６ | 児童理解研修会「のびゆく大いちょう」についての共通理解 |
| ６ | ２２ | １人１台端末（Chromebook）の活用について<br>講師　葛西　優作　（本校　視聴覚主任） |
| ７ | １３ | 算数における問題解決的な授業展開について<br>講師　峯　明紀　（本校　拠点校指導教員） |
| ８ | ２４ | 問題解決的な学習を取り入れた授業づくり<br>講師　教育指導課　主任指導主事　福田　秀貴 |
| １０ | １９ | 救命救急法講習会<br>講師　八戸消防署　根城分遣所　職員 |
| ２ | ２２ | CRT 学力テスト分析（各学年） |

## ６　研究の成果

(1) 教材（問題）の提示の仕方や発問を工夫したり、課題解決の見通しをもたせたりした。その成果として、自力で課題に取り組む、分からないことを質問する、教師や友達の説明を聞いて理解するなど、主体的に課題へ向かう態度が向上した。

(2) 一人一人に教材を配付したり、ワークシートを工夫したりすることで、自分の考えを進んで友達に伝えようとする児童が増えた。

(3) 日常的に書く活動を取り入れ、自分の言葉で考えを書かせることで、進んで発表したり、友達の発言に感想や質問を述べたりする児童が増え、表現力の向上につながった。

## ７　研究の課題

(1) 友達や全体で考えを伝え合った後、児童自らが自分の考えと比較しながらよりよい考えに気づくための児童への働きかけの工夫について探っていく必要がある。

(2) 学力・学習意欲の差が大きくなってきているため、個人差を考慮した学習指導の在り方を探っていく必要がある。

（記入者　池田　美幸）

田面木小

# 進んで伝え合い、主体的に学ぶ子の育成

（３年計画の１年次）

校長　高山　一雄

## １　研究主題について

本校では、教育目標の「よく聞き考える子」及び、努力目標の「よく聞き、しっかり考えて課題に取り組む」を受け、相手の考えを聞き、自分の考えを深めることのできる児童の育成を目指している。

昨年度までは、主題を『自分の考えを進んで表現する子の育成』とし、全教科全領域で課題に意欲的に取り組ませるための授業づくりや、自分の考えやその根拠について表現する意欲を高めるための授業づくりを研究した。その結果、学習題材へ様々な「しかけ」を取り入れながら工夫して課題設定に取り組んだことで、児童の意欲を全体的に高めることができた。また、「書くこと」と「話すこと」を組み合わせながら、どちらかの形で全員が考えをもつための手立てを工夫したことにより、児童の表現する意欲や力を向上させることができた。一方で、自分の考えを表現するだけではなく、相手の考えを聞きながら、解決に向けて伝え合う力がまだ足りないという課題が挙げられた。

そこで、今年度はこれまで培ってきた表現する力を生かしながら、さらに自分の考えを積極的に伝え合うための授業づくりを、全教科全領域で研究することにした。また、学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組み、振り返って次につなげるという主体的な学びについても研究を進めていく。具体的には、学習課題を設定する場面では、引き続き「しかけづくり」を取り入れ、児童に揺さぶりをかけたり葛藤させたりしながら、意欲的に課題に取り組むことができるようにさせる。そして、児童が自分の考えと友だちの考えを比較しながら聞いたり話したりできるための場の設定や支援について研究する。

以上のような理由から、今年度は児童の伝え合う意欲を高め、全ての児童が主体的に学ぶことができるような授業づくりを目指していくことにした。

## ２　研究のねらい

課題に意欲的に取り組み、自分の考えを進んで伝え合いながら主体的に学ぶことができる児童を育てるための指導のあり方を明らかにする。

## ３　研究仮説

思考の対立や葛藤、疑問をもたせるための課題設定や発問を工夫し、自分の考えを表現し合うための場の設定や支援を工夫することによって、児童が意欲的に課題解決に向かい、進んで伝え合う力が高められると考える。

## ４　研究内容

(1) 児童に思考の対立や葛藤、疑問をもたせ、意欲的に解決しようとする学習課題を設定するための、学習材の「しかけ」や、発問の工夫はどうあればよいか、実践を通して明らかにする。

(2) 課題を解決するための話合いの場面や課題についてまとめる場面で、児童が自分の考えと友だちの考えを比べながら、話したり聞いたりすることができるための場の設定や支援はどうあればよいか、実践を通して明らかにする。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|
| ５ | ２６ | 提案授業　　第６学年　社会科「縄文のむらから弥生のくにへ」<br>授業者　　教諭　　鎌田　裕子 |
| ６ | ２４ | 第１回授業研究　　第５学年　家庭科「整理・整とんで快適に」<br>授業者　　教諭　　山下　淳 |
| １０ | １９ | 第２回授業研究（要請訪問）第３学年　国語科「宿泊学習で持って行きたいもの」<br>授業者　　教諭　　清水　咲良<br>助言者　八戸市教育委員会教育指導課　　福田　秀貴　主任指導主事 |
| １１ | ９ | 第３回授業研究（要請訪問）第１学年　道徳「はしのうえのおおかみ」<br>授業者　　教諭　　近藤　純子<br>助言者　八戸市教育委員会教育指導課　　大野　勉　主任指導主事 |
| １２ | ７ | 第４回授業研究　あすなろ２組　自立活動「こんな時、なんていう？～困ったときのお願いの仕方～」<br>授業者　　講師　　野邊地　宏大 |
| １１ | ２４ | 中学年ブロック参観授業　　第３学年　音楽科「まほうのチャチャチャ」<br>授業者　　教諭　　荒井　美佳 |
| １１ | ３１ | 特別支援ブロック参観授業　あすなろ１組　自立活動「自分のことを知ろう」<br>授業者　　教諭　　田村　久美子 |
| １２ | １ | 低学年ブロック参観授業　　第２学年　算数科「三角形と四角形」<br>授業者　　教諭　　坂本　明希子 |
| １２ | １４ | 中学年ブロック参観授業　　第３学年　道徳「同じ意見じゃないと友達じゃないの？」<br>授業者　　教諭　　宮永　杏菜 |
| １２ | ２１ | 特別支援ブロック参観授業　おおぞら学級　自立活動「こんな時、なんていう？～困ったときのお願いの仕方～」<br>授業者　　講師　　越後　順子 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 5 | 2 | １人１台端末の使用方法について　　研修主任　　鎌田　裕子 |
| 6 | 8 | 人間関係づくり　　講師　青森県総合学校教育センター<br>教育相談課　　根城　亮輔　指導主事 |
| 8 | ２３ | 授業での１人１台端末の活用と演習　　研修主任　　鎌田　裕子 |
| １１ | ３０ | ＳＯＳの出し方教育　　講師　青森県総合学校教育センター<br>教育相談課　　佐藤　幸広　指導主事 |

## ６　研究の成果

(1) 学習課題設定のための「しかけ」では、様々な方法を駆使して児童の思考を促したり揺さぶりをかけたりすることができた。それによって、児童が積極的に課題に取り組むことはもちろん、自ら課題を考えたり自力で解決したいという思いをもったりすることができるようになった。

(2) 考えを伝え合う場の設定と支援では、事前に自分の考えを書くことやペアで確認すること、少人数で検討することが有効であった。意見を共有することで児童に安心感が生まれ、発表の回数が増え自信をもって発言できるようになるなどの成果が見られた。また、児童から出された意見を視覚化することで、より活発な話合いにつなげることもできた。

## ７　研究の課題

児童の学習意欲を高めるために、学習課題の設定場面では「しかけ」から「課題設定」までの流れについて、児童の思考に寄り添いながら発問を吟味することについてさらに研究を深めていくことが必要だと思われる。また、自分の考えと相手の考えを比べながら聞く態度を身に付けさせるためにも、伝え合った内容や自分の意見の変容などを振り返る場の設定や工夫をすることについても今後の課題として取り上げていきたい。　　（記入者　鎌田　裕子）

# ともに学び合い、考えを深める子どもの育成

（３年計画の３年次）

校長名　　宍戸　義彦

## １　研究主題について

今年度、本校では「生き生きと輝く子」～思いやりのある子、すすんで勉強する子、体をきたえる子～を教育目標と努力目標に掲げ、それを具現化するために種々の教育活動を展開している。教育目標具現化のためには、基礎的な学習ルールを徹底させ、授業においてユニバーサルデザインの視点を取り入れ、児童の学習への意欲や主体性を高めることが大切であると考える。

昨年度、本校では、「ともに学び合い、考えを深める子どもの育成」という研究主題のもと、主にしかけやコーディネートなどの指導方法のあり方について研究した。教科を問わず、児童が課題解決したいと思えるしかけの工夫を授業で実践し、検証してきた。研究の成果として、しかけの工夫により、児童の課題解決への意欲が高まり、児童が問いや解決への見通しをもち、課題解決に向かうことができた。また、話合いの場面でヒントを言わせる、話合う内容を焦点化する、発問の工夫をするなど、教師がコーディネートを工夫することにより、児童の考えを深めることができた。書く活動を効果的に取り入れることにより、考えをもたせる手立てとして有効であることも検証された。さらに、「話す・聞く」表を教室に掲示したことは、普段の授業における話合いの指標となり、児童にとって共通理解しやすく、定期的な評価及び指導の改善を図ることができた。一方、課題として、全員が話合いに参加し、課題解決に向かうようにするために教師は、安心して学べる学級づくり、板書の工夫（視覚化）等を含めたファシリテーターになる必要があることが挙げられた。また、書く活動を工夫して取り入れることで、教師が児童の考えを把握していくことも大切であるとの意見も出された。

そこで、今年度は、「子どもが問いをもつしかけの工夫」「ファシリテーション・スキルを用いて、子どもの考えをつなぎながら話し合わせる工夫」について研究していく。教科を問わず、これらの工夫を実践することで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができると考える。

## ２　研究のねらい

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成を目指して、しかけやファシリテーション・スキルなどの指導方法のあり方を授業実践を通して明らかにする。

## ３　研究仮説

子どもが問いをもつしかけの工夫をしたり、ファシリテーション・スキルを用いて、子どもの考えをつなぎながら話し合わせる工夫をしたりすることで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができる。

## ４　研究内容

(1) 子どもが問いをもつしかけの工夫（授業の導入場面）

(2) ファシリテーション・スキルを用いて、子どもの考えをつなぎながら話し合わせる工夫（話合いの場面）

留意点・・・上記(1)(2)を進める上で次の点にも留意する。

ア　自分の考えを書く活動を取り入れること

イ　実態に応じて「話す・聞く」表を活用すること

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授業研究 |
|---|---|---|
| ４ | ２７ | 研究仮説・研究内容・研究方法、校内研修年間計画、指導案形式についての共通理解 |
| ６ | ２９ | 第１回授業研究（６学年）授業者　三田史子教諭　国語「せんねんまんねん」 |
| ９ | ２１ | 第２回授業研究（要請訪問、４学年）授業者　寺澤麻美教諭　算数「割合」<br>（八戸市教育委員会　教育指導課副参事兼主任指導主事　日向端　聖　様） |
| １１ | ９ | 第３回授業研究（１学年）授業者　赤石彩教諭　国語「じどう車くらべ」 |
| ２ | ２２ | 今年度の研究のまとめ・来年度に向けての共通理解 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ６ | １ | ・一人一台端末活用研修（本校　川村　祐輝　教諭） |
| ６ | １５ | ・体育科における問題解決的な授業づくり<br>（八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　竹井　亮　様） |
| ６ | ２２ | ・特別支援教育（スクールカウンセラー　石岡　れい子　様） |
| ７ | ６ | ・Q-U 分析（こども支援センター　原　寿　様） |
| ８ | １９ | ・青森県小学校教育課程研究集会（資料研修） |
| ８ | ３１ | ・青森県学習状況調査採点及び分析 |
| １１ | ３０ | ・特別支援教育（本校　特別支援学級担任） |
| １ | １２ | ・国語科における問題解決的な授業づくり<br>（八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　福田　秀貴　様）<br>・個別のケースから支援のあり方を共有する<br>（こども支援センター　三浦　祐子　様、上澤　司　様、中川　由香利　様） |

## ６　研究の成果

(1) 導入場面等において教師がしかけを工夫したことにより、子どもの思考に沿って問いが生まれ、課題解決に向けて意欲的に取り組む姿が見られた。また、自身の考えについて立場を表明させることで、子ども達の考えを焦点化させ、考え方を広げることができた。

(2) 互いに認め合う雰囲気の中で、教師の共感的・受容的な態度、つぶやきを拾う、問い返す、適切な復唱などのファシリテーション・スキルを用いることで、子どもの考えをつなぎながら話し合わせることができた。

(3) 書く活動を取り入れることにより、子どもの思考を整理したり、まとめたりすることができた。

(4) 「話す・聞く」表を指標にすることで、子ども達は共感しながら話を聞いたり、立場をはっきりさせて話したりすることができるようになってきた。

## ７　研究の課題

(1) 教師が教えたいことを中心に授業を行うのではなく、今後もしかけにより子どもが問いをもち、その問いを解決していく、問題解決的能力を高めていく授業を行うことが大切である。

(2) 教師や子ども同士の関わりの中で、子どもに参加感や達成感を味わわせるファシリテーション・スキルを今後も教師は高めていく必要がある。

(3) ファシリテーション・スキルの検証がより明確になるように、教師は学習する子どもの視点に立ち、子どもの姿の変容を見ていく授業研究を行っていく必要がある。

(4) 「話す・聞く」表の内容が、使いこなせなかったり、学年によっては難しかったりしたため、その都度、見直しが必要である。　（記入者　寺澤麻美）

城北小

# 自分の考えをもち、主体的に学ぶ子の育成

## ～学ぶ意欲を持続させるための手立ての工夫～

（３年計画の３年次）

校長　　高　谷　　信　行

### １　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「思いやりのある子」「考えを表す子」「きたえる子」の徳・知・体の柱を掲げ、「学ぶ意欲」と「豊かな心」の育成を目指している。この目標の具現化のためには、課題意識をもって主体的に学習に取り組み、他者と関わり合いながら協働的に学習を進め、自分の考えを深めていくことが必要になると考えた。

(2) 研究の経過から

昨年度は、魅力的な教材、よい発問などによって、児童に疑問や違和感、憧れ、興味などを抱かせ、「解決したい」「明らかにしたい」と思う「必要感のある課題設定」につなげる工夫を授業に盛り込んだ。また、児童を最後まで粘り強く学びに向かわせることができるよう、学習の進め方や学びのゴールをイメージさせる見通し、自分の学びを見つめさせる振り返りのさせ方についても研究してきた。その結果、友達の考えとのずれ、既習とのずれが生じ、それを解決するために考える必要感や問題を解きたい、実験をやってみたいという意欲をもたせることができた。加えて、課題を解決するための見通しをもたせたり、ワークシートや表などを工夫して予想されるつまずきに対して支援したりしたことによって、自信をもって課題に取り組ませることができた。しかし、児童を最後まで意欲的に課題に向かわせるためには、解決への見通しをもたせることが有効であると明らかになったものの、教師が積極的に支援をして見通しをもたせることが多かった。

そこで、今年度は児童の思考に寄り添い、適切に支援しながら、児童が課題の解決方法を見出していけるような指導方法について研究を進めてきた。ワークシートや表の工夫、実際に操作してみるなど、段階的に手立てを講じることによって、児童のやる気を持続させる工夫をした。また、子ども達に疑問や違和感、憧れ、興味などを抱かせ、「解決したい」「明らかにしたい」と思う「必要感のある課題設定」についても引き続き吟味し、子ども一人一人の問いにつなげられるよう実践を重ねた。

### ２　研究のねらい

自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育てるための指導の在り方を、授業実践を通して明らかにしていく。

### ３　研究仮説

課題設定や見通しのもたせ方、振り返りなどを工夫することによって、自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育成することができる

### ４　研究内容

○自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育成するための効果的な指導の在り方

・課題設定の場面で課題を解決するための必要感や児童に問いをもたせる工夫

・児童の思考に寄り添い、解決できそうだと見通しをもたせる工夫

### ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・題材名・授業者・講師・授業の概要 |
|---|---|---|
| ７ | ２０ | ５学年　算数：「合同な図形」　　教諭　馬場　知里 |
| | | 課題を提示してすぐと、ある程度話し合ってからの２回にわたって立場の表明を |

| | | |
|---|---|---|
| | | 行うことによって、友達とのずれが生まれ、内角の和を求める必要感をもたせることができた。また、既習事項をふりかえりながら操作方法を全体で確認したことで、本時の活動の見通しにつながった。 |
| ９ | ７ | 中学年　国語：「アップとルーズで伝える」　　教諭　遠藤　彩華 |
| | | あらかじめ抜いてある２つの文章を提示し、どちらに入るのか問うことによって、自然と叙述に目が向き、子どもたちの解決したい意欲が高まった。また、文章カードをベン図の上に載せたり、ワークシートの上に載せたりと、自分の使いやすいように操作をさせることが、解決のヒントにつながり、自分の考えを整理することに役立った。 |
| ９ | ２１ | 低学年　国語：「馬のおもちゃの作り方」　　教諭　坂松　夢咲 |
| | | 〈作り方〉ではない写真を１枚入れることで、本文に目が向き、必要感をもって重要な言葉や文を探し、意欲を持続させることができた。また、自力解決に入る前に文章中の写真を例に学級全体で確認したことによって、見通しをもって活動に取り組むことができた。 |
| １０ | １９ | ６学年　国語：「やまなし」　　教諭　山崎　孝太 |
| | | 児童に題名を考えさせたことで、自分と宮沢賢治の考えの違いから、作者の思いを考えようとするきっかけをもたせることができた。また、５月と１２月を対比させ、似ているところを見つけさせたことで、教師側でねらっていた「命」という主題に迫るキーワードに気付かせることができた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 一　般　研　修 |
|---|---|---|
| ５ | １９ | 個別な配慮を要する児童の理解及びいじめ対応に関わる研修<br>担当：本校教諭　熊谷　恵美子　　小笠原　真一 |
| ５ | ２７ | 鉄棒運動～全員参加できる運動の素地について～<br>講師：白山台小学校教諭　小向　一樹　先生 |
| ６ | ２２ | 問題解決的な授業づくりについて<br>講師：八戸市教育委員会　教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事 |
| １２ | １４ | 救急講習、校内での体制<br>担当：本校養護教諭　向田　菜都子 |

## ６　研究の成果

(1) 教材へのしかけや発問を工夫し、課題に対する興味を抱かせた後、ネームプレートや挙手などで立場の表明をさせたことにより、友達とのずれや自分とのずれが生じ、一人一人に問いを意識させ、必要感をもたせて課題解決に向かわせることにつながった。また、導入で課題意識をもたせたことで、その後の学習過程においても意欲を持続させ、学びに向かわせることができた。

(2) ワークシートや思考ツールなどを工夫することで、子どもたちの思考を整理し、ねらいを焦点化することができた。また、様々な手立てとして実際の操作や文章へのしかけ、全体でやり方を確認するなどを段階的に講じた。それによって、自信をもって課題に取り組み、子どもの思考を活性化させることができた。

## ７　研究の課題

(1) 問題解決に向かう必要感・切実感をより高めるためには、立場の表明を複数回行い、考えを焦点化することが必要であると明らかになった。しかし、考えを広げたり深めたりする発問については検討していく必要がある。

(2) 児童の思考に寄り添うには、児童一人一人に応じた工夫や手立てが必要である。また、教師が子どもの思考を促すことで、対話が生まれ、解決の見通しをもつことへとつながるため、今後も引き続き研究していく必要がある。

（記入者　　馬場　知里）

# 主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

## ～思いや考えを伝え、学び合う学習活動を通して～（３年計画の３年次）

校長名　　古　戸　美　登　子

### １　研究主題について

本校の教育目標は「たくましく生きる子」である。めざす児童像である「夢や志の実現に向かって学び続ける人間性豊かな子ども」の育成に向けて教育活動に取り組んでいる。

この具現のためには、児童が主体的、創造的に学習に取り組む資質や能力、態度を育てるとともに、積極的に他者と関わりをもち、学び合いながら問題を解決しようとする意欲を高めていく必要がある。

３年にわたり、国語科を中心に、本校における主体的に学び合う子どもの姿について共通理解を図るとともに、児童に問いをもたせるための発問、学びを広げ深めるための学び合いのさせ方、活用につなげるための振り返りについて、授業研究に取り組んできた。

その結果、

(1)　判断のずれを生みだす発問をすることにより、叙述にしっかりと目を向けて考えるようになってきた。それに伴って、どの言葉や文章に着目して考えたのか、根拠をもって説明したり書いたりする児童が増え、 課題に対して児童の主体的に学ぶ意欲が高まった。

(2)　振り返りの際、ワークシートを活用して分かったことを明確化させたり、児童に活用場面を想定させたりすることで、次の学習への意欲につながった。

一方で

(1)　意見交流に留めず、児童同士がより深い学び合いにつながるような工夫が必要である。

(2)　問いを正確に読み取らせたり、自分の考えを簡潔に書かせたり表現させたりするための工夫が必要である。

(3)　国語科で学んだことを生かして他の文章を読んだり自分の表現に生かして書いたり話したりすることができるようにする必要がある。

という課題が挙げられた。

これらの成果と課題を踏まえ、今年度も、児童が主体的に学び合い、互いの考えを広げ深める授業づくりを目指すとともに、他教科でも学んだことを生かせることができる児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

### ２　研究のねらい

主体的・対話的で深い学びを実現する授業のあり方を、国語科における授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

児童同士が思いや考えを伝え、学び合う学習活動を工夫することによって、主体的・対話的で深い学びを実現することができる。

### ４　研究内容

(1) 習得と活用を意識した授業のしかけ

ア　思考の深め方の工夫（判断のずれを生みだす発問の工夫）

イ　学び合いの工夫

ウ　身に付けさせたい内容（言語活動）の明確化と活用場面の設定

## ５　研究の経過

(1) 授業仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・題材名・授業者 |
|---|---|---|
| ７ | １ | 第１回授業研究（６学年）（要請訪問）<br>国語「『鳥獣戯画』を読む　日本の文化を発信しよう」<br>教諭　米谷　理沙 |
| １１ | ２５ | 第２回授業研究（１学年）<br>国語「じどう車くらべ」<br>教諭　磯谷　佳奈子 |

(2) 一般研修等

| 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|
| ６ | ２９ | 外国語活動デジタル教科書の活用について<br>講師　教育指導課副参事　日向端　聖　先生 |
| ７ | １９ | デジタル教科書を活用した提案授業参観<br>授業者　秋田大学教育文化学部付属小学校<br>副校長　京野　真樹　先生 |
| ８ | ２２ | ソーシャルトレーニング<br>講師　八戸市子ども支援センター<br>副参事兼主任指導主事　小林　真由美　先生 |
| ８ | ２３ | 障害者スポーツ体験（ボッチャ）<br>講師　Hachinohe　Club　古舘　幸治　さん |
| ９ | ２８ | 家庭・地域との連携～SWOT 分析<br>講師　本校教諭　三浦　匠 |
| １１ | １５ | 「考える」「議論する」道徳の授業について<br>講師　八戸市立桔梗野小学校<br>校長　吉田　朝子　先生 |
| １２ | １ | 特別支援学級における個別の教育支援計画・指導計画の作成と活用について<br>講師　本校教諭　粟津　綾子 |

## ６　研究の成果

(1) 判断のずれを生み出す発問をしたり効果的な導入の仕掛けをしたりすることで、主体的に問題を解決しようとする意欲が高まった。

(2) 立場を明確にすることで、自分なりの考えをもって深く考えるようになった。

(3) 活用場面を設定することで、今までの学習を生かしながら自分の力で問題を解決することができるようになってきた。また、単元以外でも活用して学習を進めることができるようになった。

## ７　研究の課題

(1) 自分の考えをもって互いの考えを交流することはできるようになったが、それを受けて自分なりに考えをより深め広げたり、相手の考えについて意見を述べたりできるようにする必要がある。

(2) イメージはできるが、それを言語化することを苦手に思う児童が多いため、表現力を身に付けさせることが必要である。

（記入者 金田　光子）

# 自分のこととして課題解決する子の育成

## ～解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫～（２年計画の１年次）

校　長　　長倉　一志

### １　研究主題について

本校では、教育目標である「かしこく　やさしく　たくましく」の具現化のために、昨年度は「自分のこととして課題解決する子の育成～見通しと振り返りを大切にした授業を通して～」という主題を掲げ、ブロックごとに算数科の授業研究を行い、研究を進めた。その結果、授業の流れをシステム化することで、児童が見通しをもって取り組み、安心して活動することができるようになってきた。また、選択肢や文章など学年に応じた振り返りを行い、できるようになったことを確認することで、わかったことやできたことを実感できるようにもなってきた。しかし、児童の実態として、粘り強く取り組むことが苦手で、基礎的・基本的な知識・技能の定着が弱く、自分の考えをもてない、自分の考えがあっても自信をもてず話せないことが課題として残った。学力諸検査等においても、知識・技能の結果は高いとは言えず、「身に付いた」という実感をもてない、主体的に学習に取り組む態度も弱い児童がみられた。

そこで、今年度は、解決の見通しをもたせる場や振り返りをさせる場の工夫をしていきたいと考えた。解決の見通しをもたせる場面では、自分の考えをもたせる場を工夫したり、児童の気付きや思考を生かした解決の見通しの共有の仕方を工夫したりする。具体的には、①「なぜ・どこに違いがあるのだろうか」という思考のズレ等に着目させることで、問いをもたせ、本時のめあてを明確にする。②「この考えを使ったらできそうだ」という手がかりを見つけ出させ、児童の気付きをつなぎながら解決の見通しをもたせ、主体的・対話的に課題解決できるようにする。また、振り返りでは、導入段階を前時の学習を振り返る場、展開段階をこれまでの学習を振り返る場、終末段階を本時の学習を振り返る場と位置付け、日常の授業実践を行うことで、数学的な見方・考え方の育成につながる児童の思考を積極的に価値付けていく。このように、解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫をすることで、児童は安心感や自信をもって課題を解決できるようになり、「自分のこととして課題解決する子の育成」に迫ることができると考える。

今年度の学校目標は「レッツ　トライ！　自信をもって行動する力を伸ばす」である。基礎的・基本的な知識・技能の定着に努め、学習における意欲の向上を図り、学力全体の底上げをしていきたい。

### ２　研究のねらい

安心感や自信をもって、自分のこととして課題解決する子の育成をするために、解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫をすることが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

(1) 解決の見通しをもたせる場面では、自分の考えをもたせる場や児童の気付きや思考を生かした解決の見通しの共有の仕方を工夫することで、主体的に取り組むことができると考える。

(2) 振り返りの場面では、前時までの学習や生活経験、既習事項を想起させたり、できるようになったことや身に付いたことの確認をしたりする場を工夫することで、学習内容の習得や思考の価値付けを実感することができると考える。

### ４　研究内容

(1) 授業の充実

ア　問題解決的な学習を取り入れた授業づくり

イ　特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり

ウ　１人１台端末を活用した授業づくり

(2) 基礎的・基本的な知識・技能と学習規律の定着

ア　パワーアップ週間・パワーアップテストの実施等による知識・技能の定着

イ　「ねぎしっ子スタンダード」を活用した学習規律の育成

ウ　朝自習や自学ノートを活用した自分で学ぶ力の育成

## ５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等 |
|---|---|---|
| ６ | ２２ | 第１回　授業研究（要請訪問）<br>３学年「ぼうグラフ」　授業者　教諭　相馬　七海<br><br>講師　総合教育センター副所長兼主任指導主事<br>松橋　祐哉先生 |
| １１ | １０ | 第２回授業研究<br>６学年「図形の拡大と縮小」　授業者　教諭　中川原　慧美 |
| １２ | ８ | 第３回授業研究<br>２学年「かけ算（２）」　授業者　教諭　佐藤　直子 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ５ | １６ | 「嘔吐物処理の仕方や熱中症対策等について」<br>講師　本校養護教諭　中山　夏子 |
| ８ | ２３ | 要請訪問<br>「１人１台端末を活用した授業について」<br>講師　総合教育センター主任指導主事<br>石井　一二三先生 |
| ９ | ２８ | 「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて」<br>講師　本校教諭　中岫　美奈子<br>沼澤　純加<br>髙橋　稔 |

## ６　研究の成果

(1) 課題解決の手がかりとなりそうなことを児童の気付きなどから確かめ、解決の見通しをもたせてから自力解決をすることによって、児童が意欲的に学習に取り組むようになってきた。

(2) 前時の振り返りを生かして本時との違いを見付けるなどし、本時のめあてを明確にしてから取り組むというパターン化した学習の流れを行うことによって、見通しをもって取り組み、安心して学習に取り組むようになってきた。

(3) 導入段階を前時の学習を振り返る場、展開段階をこれまでの学習を振り返る場、終末段階を本時の学習を振り返る場といった振り返りの捉え方の幅を広げた授業づくりをすることで、学びの確認を必要な時にすることができた。

## ７　研究の課題

(1) 解決の見通しをどこまでもたせればよいのかという課題が残ったため、児童が解決の見通しをもった姿や解決の見通しをもたせる場面の共通理解をしていきたい。

(2) 振り返りについて統一したものが必要という意見があったため、振り返りを書かせる際の内容項目、単元における振り返りの場面の設定等、振り返りのもち方の共有をしていきたい。



（記入者　岩城　裕美子）

日計ヶ丘小

# 主体的に学び合う子の育成

## ～ 対話力を高める指導の工夫 ～　（３年計画の３年次）

校長　　楢木　慎一

### １　研究主題について

本校では、教育目標として「共に学び　共に輝く　日計ヶ丘の子」、努力目標「めあてをもって学び合う」の具現化のため、昨年度は、「主体的に学び合う子の育成」を目指し、思考ツールを用いて、「筋道立てて説明させる手立ての工夫」、「必要な情報を集めさせる指導の工夫」について研究を進めてきた。

その結果、学習内容に合わせた思考ツールを使わせることで、自分の考えが視覚化され、筋道立てて説明することができた。さらに、書くことで、共有化、操作化が可能となり、対話場面で活用することができた。また、思考ツールを使い、聞き取る内容を焦点化することで、対話にとって必要な情報を集めることができた。しかし、課題解決するための対話力はまだ不十分であった。聞き取った情報を課題解決に生かすことができないことが原因として考えられる。

これらの成果と課題から、対話力を「対話する力」から「対話で学ぶ力」に高める必要があることが明らかとなった。そこで、対話の土台となる話す、聞く力に加え、対話で得た情報を基に考える力を高めるために、思考を促す思考ツールを用いることによって、仲間と意見を交流し、協働で課題解決に向かうことができると考えた。このように、対話力を高める指導の工夫により、課題解決において対話が効果的であるという経験を積み重ねることが、主体的に学び合う子の育成につながると考え、本主題及び副題を設定した。

### ２　研究のねらい

主体的に学び合う子を育てるためには、思考ツールを活用し、課題解決するために対話が成立すること、対話で学ぶことが有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

対話を支援したり、対話を整理したりするために思考ツールの活用を工夫することにより、課題解決のために対話を効果的に進めることができ、主体的に学び合う子を育てることができる。

### ４　研究内容

(1) 思考ツールを用いた対話のさせ方の工夫

ア　対話を成立させる手立ての工夫

イ　対話を整理させる手立ての工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・教科・題材名・授業者 |
|---|---|---|
| 6 | 15 | 第１回公開授業　３年理科「チョウを育てよう」<br>４年理科「電流のはたらき」　授業者　教諭　齋藤　孝志<br>教諭　階上　明子 |
| 7 | 6 | 第２回公開授業　２年国語科「あったらいいな、こんなもの」<br>授業者　教諭　山村　美香子 |
| 9 | 7 | 第３回公開授業　５年社会科「これからの食料生産とわたしたち」<br>６年社会科「今に伝わる室町文化」授業者　教諭　清水　紀昭 |
| 11 | 16 | 第４回公開授業　１年生活科「じぶんのいちにちをみつめよう」<br>授業者　教諭　吉田　悦子 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容 | 講師 |
|---|---|---|---|
| 4 | 27 | 緊急時の対応 | 本校養護助教諭　斉藤　利香 |
| 6 | 29 | 日計ヶ丘の歴史 | 元根岸公民館<br>館長　小笠原　八十美 |
| 8 | 17 | ともに成長する子育て | ＮＰＯ法人はちのへ未来ネット<br>代表　平間　恵美 |
| 8 | 31 | ＮＲＴの分析・考察 | |

## ６　研究の成果

(1) 思考ツールによって互いの考えを共有化することができ、対話に活用することができた。

(2) 同じ型の思考ツールを繰り返し使うことで、学習の見通しをもつことができ、主体的に対話による課題解決に向かうことができた。

(3) 思考ツールを使うことで、考えの視覚化、操作化、焦点化が可能になり、対話を整理することができた。また、振り返りの時間を設けることで、思考ツールを使う良さ、対話の良さを実感させることができた。

## ７　研究の課題

(1) 主体的に学び合うための手段としての対話であり、思考ツールである。学びの手段として児童自身が選択できるようにするためには、様々な考え方に合わせた思考ツールを使う経験が必要となる。

(2) 対話を支援するために思考ツールを用いる際に、学習内容に合わせた形にすることで、汎用性が失われてしまった。具体的な場面ではなく、考え方（比較、分類、関連など）に合わせて使える思考ツールのメリットを生かす指導法について研修していく必要がある。

（記入者　清水紀昭）

是川小

# 主体的で対話的な授業づくり

## ～つながる意識をもたせる働きかけの工夫～（３年計画の３年次）

校長　新山　聡

### １　研究主題について

本校では、教育目標「学ぶことの喜びと確かな力をもつ是川の子」、努力目標「考えを表現する子」を掲げ、主体的に学習に取り組む子供を育てることを目指している。そのために必要なのは、児童が「学びたい、話し合いたい」という意欲をもって学んでいける授業づくりをすることである。対話を通して学ぶ楽しさを感じさせることにより、友達と共に学び合い、高め合うことができると考え、本研究主題を設定した。

昨年度までに、「主体的で対話的な授業づくり」という研究主題のもと、課題解決の必要感をもたせる発問や題材の提示の工夫を行い、児童が自分の考えをもって議論ができるよう促すことに取り組んできた。その成果は以下のとおりである。

〇児童が身に付けるべき力を明確にした上で、児童に考えさせたいことを中心とした授業づくりを行った。考えさせたいことが明確になったことで、導入の工夫や児童をゆさぶる発問等の適切な手立てを講じることにつながり、考えをもたせる授業づくりについて理解を深めることができた。

〇主体的に議論する姿について共通理解し、日常の指導の中で対話する力を高める指導を行った。その成果や課題を短いサイクルで検証し共有することを重ねた。そのような教師の指導の工夫により、児童が自分の考えをもって議論できる力を育むことにつながった。その一方で、話合いの場面では「自分の意見を主張することに意識が向いてしまうことが多く、他者の意見をうけて自らの学びを深め、建設的な話合いを行おうとする態度が十分に身に付いているとは言えない」という課題が残された。

そこで今年度は、他者の意見を聞いてその意図を理解しようとしたり、共通点をさがし自分の考えとつなげて話したりできる授業づくりを行っていく。話合いを通して、全体で課題を解決する楽しさを感じさせることにより、主体的な学びにつながると考え、副題を「つながる意識をもたせる働きかけの工夫」と設定した。なおその際には、昨年度までの研究の成果である以下の３点を生かした授業づくりを行う。

・教材の特性及び系統性、児童の実態についての深い理解をもとに、ねらいと適切な手立てを工夫する。
・児童に身に付けさせたいことを「考えたいこと」として児童に提示し、導入の工夫や思考を促す発問など、児童が考えたいことを中心にした授業づくりを行う。
・児童が自ら対話できるよう促す教師の働きかけについて、教師が日常の授業の中で研究し、短い間隔で共有し検証することを重ね、さらに指導に生かす。

これらのことによって、児童が自分の考えをもち、主体的に伝えたり、受けとめたりして議論できる学びの力を身に付けることができると考える。

### ２　研究のねらい

主体的で対話的な学びの実現に向けた指導の在り方について、児童が話合いを通して全体で課題を解決する力を育むために、授業づくりにおいて働きかけを工夫し、児童が他者の意見と自分の考えをつなげて話合う意識をもたせることを、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

各教科等での授業及び日常の指導の中で、他者の意見と自分の考えをつなげて話し合う力を育成することを意識した日常の指導を行うことによって、主体的で対話的な学びを実現することができると考える。

(1) 教材の特性（価値）及び系統性や児童の実態、学習内容から、児童が身に付けるべき（育てるべき）学びの力を明確にし、児童に課題解決の必要感及び自分の考えをもたせる手立てと、児童の思考を促す発問を吟味する。

(2) 各教科等での授業及び日常の指導の中で、他者の意見と自分の考えをつなげて話し合う力を育成することを意識した指導を行う。

### ４　研究内容

(1) 系統性（上下の学年とのつながり、学年内での同じ価値内容での児童の学び）をもとに教材を理解し、適切な授業のねらいとそのための手立てを明確にする。

(2) 児童に身に付けさせたいことを「考えたいこと」として児童に提示し、導入の工夫や思考を促す発問など、児童が考えたいことを中心にした授業づくりを行う。
(3) 児童一人一人に、課題に対して自分の考えをもたせることができるよう、目的を明確にした中心的発問の吟味や、児童の思考をゆさぶる補助発問を吟味する。
(4) 児童が他者の考えを聞き、つなげて話し合うことができるよう、教師の働きかけの工夫をする。(板書、ファシリテーションなど)

## 5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

ア　提案授業

| 月 | 日 | 題材名及び授業者 | 本時の目標 |
|---|---|---|---|
| 11 | 1 | ６年１組　社会<br>「キリスト教の禁止と鎖国」<br>〈授業者〉教諭　溝江翔<br><br>講師：八戸市教育委員会教育指導課<br>主任指導主事　大野勉　氏 | 幕府による政策について、幕府とキリシタン両方の立場に立って考える活動を通して、武士による政治が安定したことを理解することができる。 |

イ　つながる意識をもたせる話合い相談会

| 月 | 日 | 題材名および授業者 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | ６年１組　算数　「分数×分数」　〈授業者〉　教諭　釜石優子 |
| 9 | 7 | ４年１組　道徳　「学級新聞作り」　〈授業者〉　教諭　下川美智子 |
| | | ３年１組　道徳　「学級ルールブックをつくろう」<br>〈授業者〉　教諭　大沢泰尚 |
| 9 | 21 | ５年１組　算数　「約数と公約数」　〈授業者〉　教諭　井沼志穂 |
| | | ２年１組　国語　「動物園の獣医」　〈授業者〉　教諭　松村典佳 |
| 9 | 28 | １年１組　算数　「ながさくらべ」　〈授業者〉　教諭　野里るみ子 |
| | | わかば・さくら　自立活動　「話題に沿って話そう」<br>〈授業者〉　講師　山下千生、　教諭　溝江翔 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | ファシリテーションについての勉強会　(講師　是川小学校　校長　新山聡) |
| 6 | 22 | 詩の指導研修会　(講師　小中野中学校　校長　佐々木宏恵　氏) |
| 8 | 18 | 絵を描く会審査研修会（講師　前江南小学校　教諭　川村真弓　氏） |
| 8 | 23 | 是川縄文遺跡文化についての研修会<br>(講師　是川縄文館副参事　小久保拓也　氏) |
| 8 | 31 | 県学習状況調査の採点と分析 |
| 11 | 21 | 是川中学校区ジョイントスクール全体研修会にて授業参観 |
| 11 | 30 | 一人一台端末活用相談会<br>(講師　総合教育センター主任指導主事　石井一二三　氏) |

## 6　研究の成果

(1) 児童が身に付けるべき学びの力を明確にし、問題解決的学習が成立するような授業づくりを行った。特に、児童が解決しなければならないことを児童自らが見つけられるような資料提示や発問などの工夫により、児童は最後まで問題の解決への必要感をもって取り組んだ。さらに、自分の考えを友達の考えとつなげていくことにもつながっていった。
(2) 他者の意見と自分の考えをつなげて話し合う力を高める指導を行った。提案授業および相談会の積み重ねにより、教師の働きかけの工夫として、構造的な板書を含めたファシリテーションが有効であることが分かった。その結果、比較、類推、言い換え、付け足し、仮定など様々に児童同士の考えがつながるようになった。つなげて話すことへの児童の意識が高まった。

## 7　研究の課題

(1) 自分で考えずに友達の考えが出されるのを待っている児童もあり、自力解決の姿勢や力が十分に育っているとは言えない。その原因の一つとして、児童の自信のなさが挙げられる。児童に自信をもたせられるような指導の研究が必要である。
(2) 児童の「つなげて話す」ことへの意識の高まりが、実際に授業で「つながる話合い」になるよう、ファシリテーションを中心とした教師の働きかけの工夫の研究を継続していく必要がある。

(記入者　釜石優子)

三条小

# 主体的に学ぶ子供の育成

## ～問いをもたせる授業づくりを通して～

（１年計画１年次）

校長　　在家　正行

### １　研究主題について

本校では、教育目標「自分をのばす」の達成に向け、教育活動全体を通して、自ら進んで自分の資質や能力を伸ばす児童の育成を目指している。

昨年度の教育課程編成会議において「指示されたことや与えられた課題に対しては、素直に、真面目に取り組むことができるよさをもっているが、自ら課題に気付き、解決に向けて、挑戦したり、粘り強く取り組んだりすることに課題がある」という児童の実態が確認された。換言すれば、「主体的に学ぶこと」に課題があるということである。

昨年度は、同様の児童の実態に対し、「聴き合い高め合う」という観点で学級活動を中心に課題解決に臨み、学級活動においては一定の成果を上げることができた。しかし、他の教科等の場面において先のような実態にあり、改善の必要がある。

そこで、今年度は、「主体的に学ぶ」ということを課題にして、頭・心・体つくりの側面から児童の資質や能力を伸ばし、全人的な発達・成長を実現したいと考え、学校目標を「主体的に学ぶ子供の育成」と設定し、頭つくりの重点施策「自分の『問い』をもたせる学びの推進」とした。

本研究を頭つくりの重点施策を具現するための取組と位置付け、研究主題を設定した。

### ２　研究のねらい

子供が自分の問いをもって学ぶことができるように授業をデザインすることにより、主体的に学ぶ力が育つことを、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

自分の問いをもって取り組めるように課題設定を工夫したり、自己の変容を捉える視点を明確にして振り返りをさせたりすれば、主体的に学ぶ子供を育てることができる。

### ４　研究内容

(1) 問いをもたせる授業過程

ア 身に付けさせたいことの明確化

その単元で、その時間で何を身に付けさせたいのかを明確にする。

イ 問いを共有できるような教師のはたらきかけ

問題解決の必要感・切実感を伴った問いとして共有させる。

ウ 問題解決の必要感をもった学習課題の設定

解決すべきことを明確化・焦点化する。

(2) 自分の学びの振り返り

ア 振り返りの視点

自己の変容を捉える視点を明確にし、学びの成果を実感させ、よさや自分の成長を自覚させる。

イ 振り返りの活用

自己の変容から次の意欲につなげたり、振り返りから生まれた新しい問いを次時に活用したりする。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 学年・授業者　等 |
|---|---|---|
| ６ | ２９ | 第１回授業研究【社会】　授業者　４年２組　教諭　大西潤子<br>題材名「ごみのしょりと利用」 |
| ９ | ２８ | 第２回授業研究【理科】　授業者　理科専科　教諭　古川博規<br>題材名「水溶液の性質とはたらき」 |
| １０ | ２４ | 第３回授業研究【算数】（要請訪問）<br>授業者　２年２組　教諭　當麻玖実<br>助言者　八戸市総合教育センター　副所長　松橋祐哉<br>題材名「かけ算（１）いくつ分とかけ算」 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要　等 |
|---|---|---|
| ５ | ２５ | アセス検査に関する研修　講師　三条小学校　教諭　相馬昌文 |
| ８ | １９ | 生徒指導　問題行動等への対応について（要請訪問）<br>講師　教育指導課　青少年グループ　石田純也　主任指導主事 |
| １１ | １８ | １人１台端末活用・情報モラルに関する研修（要請訪問）<br>講師　八戸市総合教育センター　石井一二三　主任指導主事 |

## ６　研究の成果

(1)　「資料提示のタイミングの工夫」「対比する２つの問題提示」「予想を立てさせてからめあてをもたせる発問」等、教材提示や発問の工夫をすることによって、必要感のある問いが生まれ、その時間内で学習を明確にすることができた。また、実験や動画等の教材提示の工夫によって、児童が課題を自分のこととして捉え、知りたい・学びたいという意欲をもたせることにつながった。

(2)　学びの振り返りの視点を各学年や教科等で焦点化したことによって、児童が学習の成果や自己の成長を実感するとともに、次時への意欲や新たな学習課題をもつことに有効であった。また、友達のよさに目を向けた振り返りは、児童同士の交流を深め、みんなで学習する楽しさや学習意欲の向上につながった。

## ７　研究の課題

(1) 児童が必要感や切実感をもって問題解決に向かい、共有した学習課題を主体的に解決させるために、一人一人が自分の立場を表明する等、自分の考えをしっかりともてるような手立てを講じる必要がある。

(2)　意欲的に伝え合ったり、発達段階に応じて適切に表現したりすることができるようになるために、発問や言語活動を中心に据えた学習過程を工夫する必要がある。

(3)　振り返りが次の学習に生かされるように、「前時の振り返りを次時のめあてにつなげること」「前時の学習で分からなかったことが本時を通して分かったのかを確認すること」を大事にしたい。また、今後は、系統性をもたせるために全校で共通した振り返りの視点についても考えていきたい。

（記入者　西村　悦子）

西園小

# 学びに向かう力の育成

## ～「対話」「見通し」「振り返り」の学習過程を大切にした授業づくり～

（３年計画の３年次）

校長　　古　川　祐　行

### １　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「めあてをもって生き生きと学ぶ子に」、努力目標に「進んで楽しく学ぶ」を掲げ、教育活動に取り組んでいる。今年度は学校目標を「粘り強く挑戦する　西園っ子」とした。その具現化のために、課題解決に向けて共に考え、学習活動を振り返ることで身に付けた力を自覚したり、新たな課題を設定したりできる「学びに向かう子」の育成を目指している。

(2) これまでの研究経過から

本校では一昨年度から、研究主題を「学びに向かう力の育成」と設定した。「学びに向かう力」を、「他者との関わりの中で、自分の考えを広げたり深めたりする力」「見通しをもって学習に取り組む力」「学習活動を振り返って次につなげる力」ととらえ、授業実践に取り組んだ。

その結果、見通しをもたせることで課題が焦点化され、課題に向かう必要感をもつことができたことや、振り返りの項目を精選して提示したことで、学習した内容を意識させたり次時への意欲付けが図られたりしたことが成果として挙げられた。しかし、コロナ禍により対話の場を思うように授業に組み込むことができなかったため、十分な研究はできず結果を得ることができなかった。

そこで、今年度は、自分の考えを広げたり深めたりする対話の場、認め合う場を学習過程に位置付けることを重点とし、研究を展開していく。また、昨年度までの成果を生かし、児童が自ら課題を発見し、問題解決に向かうための「見通し」をもたせる場、身に付けた力や自己の学び方を意識させ、学ぶ意欲を喚起する「振り返り」の場の設定も取り入れて研究実践を積み重ねることで、学びに向かう力が育つと考えられる。

### ２　研究のねらい

学習に対する見通しをもたせ、対話や振り返りを学習過程に位置付けた指導を工夫することで確かな学力の定着を図り、学びに向かう力を育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

「対話」「見通し」「振り返り」を意識した授業実践を行うことにより、児童一人一人の課題意識を喚起し、学ぶことのよさや意義を意識させることで、学びに向かう力を育成することができる。

### ４　研究内容

研究のねらいを達成するために、支持的雰囲気の学級づくりを基盤に、次の３つの内容について授業実践を通して明らかにする。

(1) 他者との関わりの中で、自分の考えを広げたり深めたりするための対話の場の工夫
(2) 見通しをもって学習に取り組むための教材のしかけや発問の工夫
(3) 学習活動を振り返るための視点の与え方の工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名 | 概要 |
|---|---|---|---|
| 6 | 29 | 第１回授業研究（５学年　理科）<br>授業者　教諭　金入　照泰<br>題材名　魚のたんじょう | 前時までに作成した観察カードを活用し、見通しをもって本時の学習に取り組むことができた。課題が焦点化されたことで個々のつぶやきが増え、全体への対話につながった。 |
| 9 | 7 | 第２回授業研究（３学年　社会科）<br>授業者　教諭　岩間　章吾<br>題材名　スーパーマーケットのよいところ | 導入で、チラシの提示や実際のスーパーケットの名前を用いたクイズをしたことにより、一人一人に考えをもたせることができた。また、全員に立場を表明させたことで主体的に対話することができた。 |
| 11 | 9 | 三条中学校区　ジョイントスクール推進事業<br>授業公開（会場：西園小学校） | 本校の研究仮説に基づいた授業を、全学級公開した。 |
| 11 | 16 | 第３回授業研究(要請訪問　３学年　国語科)<br>授業者　教諭　鮫ノ口　佳織<br>題材名　すがたをかえる大豆<br>助言者　福田　秀貴　主任指導主事 | 導入時の発問により筆者の考えとのずれが生まれ、主体的に考えることができた。また、多様な対話の場を設けたことで、自分の考えを広げたり深めたりすることができた。 |
| 12 | 21 | 第４回授業研究（１学年　国語科）<br>授業者　教諭　新田　千紘<br>題材名　ともだちのこと　しらせよう | ゲストティーチャーの活用により、相手に興味をもち質問したいという意欲をもつことができた。話型の提示により、自信をもって対話することができた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 研修内容 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | 特別支援教育研修会　　（講師　子ども支援センター　川野輪　美穂　指導主事） |
| 7 | 20 | ＱＵに関する研修会　　（講師　子ども支援センター　原　寿　先生） |
| 8 | 19 | プログラミング・ＩＣＴ教育に関する研修会<br>（講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事） |
| 11<br>～<br>12 | 29<br>～<br>5 | 特別支援学級授業公開　　本校教諭　いちょう学級　杉澤　敬子<br>ゆりのき学級　木村　真由美 |

## ６　研究の成果

(1) 様々な形態での対話の場の設定や話型の提示等の工夫により、伝え合うよさを感じ、自分の考えを自信をもって伝えたり考えを深めたりすることができた。

(2) 思考のずれや必要感を生む発問、自分の立場を明確にする場面を意図的に設定する等の工夫により、課題を自分事としてとらえ、めあてやまとめを自分なりの言葉で考えることができた。

(3) 「振り返りのポイント」を継続的に活用することで、自分の思いをしっかり書けるようになるとともに、「分かった、できた」を実感し学びに向かう力をつけることができた。

## ７　研究の課題

(1) 課題意識をもたせるしかけや発問によって対話の必要感をもたせ、自分の考えを広げたり深めたりできるように研究を継続していく必要がある。

(2) 学びの自覚につながるような、振り返りの方法を考えていく必要がある。

（記入者　太田　麻木）

明治小

# 主体的に学び、考えを深め合う子の育成

## ～よりよい対話のある授業を通して～　（３年計画の１年次）

校長　　八嶋　俊次

### １　研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「よく考え学習する子、思いやりをもつ子、体をきたえる子」を掲げ、教育活動を展開している。また、今年度の学校目標を「主体的に学ぶ子どもの育成」とした。

本校の児童は、明るく素直で、学習意欲の高い児童が多く、与えられた課題や指示されたことには前向きに取り組んでいる。一方、基礎学力の個人差が大きいことや話を正しく聞き取る力、話す力が不足している点、また、児童の主体性が十分ではない点に課題がある。そこで、児童が学び方を身に付け、人とつながりながら協働的に学ぶ授業づくりを研究していく必要があると考えた。

昨年度までは、問題解決の場において児童の思考や言語活動を促すための発問や板書を工夫し、ともに深め合う力を育てる学習指導の充実・改善を図ってきた。それにより、話合いの過程で自らの学びを見つめ直し、修正したり新たな考えを発見したりすることが、ともに深め合う力の育成につながることが分かった。しかし、目指す児童の姿である主体的対話的な関わり合いが十分になされず、一部の児童の対話で完結してしまい、うまく周囲とつながれないまま授業時間を終えてしまった子がいることや受け身に偏りがちでアウトプットできない児童がいたことも事実である。

そこで、今年度は昨年度までの研究の成果の上に、協働的学びの実現に向け、よりよい対話のある授業を通して、主体的に学び考えを深め合う子の育成を図っていくこととした。授業の中で学び方を駆使しながら、友達や教師とつながる中で個々の児童が考えを深めていくことができるような授業づくりを進めていきたい。教科としては、国語、社会、理科、算数、生活に広げて研究することとした。

### ２　研究のねらい

児童の「考えを深め合う力」を育てるための効果的な指導の工夫を授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

問題・教材との対話、他者との対話、自分との対話のある授業をすることにより、児童の「考えを深め合う力」を育むことができる。

### ４　研究内容

(1) 知的好奇心を高め、思考が動き出す動機づけから、問いを共有する場へつなげる工夫をする
　（問題・教材との対話）
(2) 学習方略を身につけさせるための単元構成や展開の工夫（他者との対話・自分との対話）
(3) 振り返りの設定（自分との対話）

### ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者等 | 概要 |
|---|---|---|---|
| 6 | ２２ | ４学年授業研究<br>電流のはたらき<br>授業者　大嶌　禎子 | 車を後退させる失敗を演示し、「回路の中はどうなっていたのか」」という発問をすることにより、図を介した対話を促すことができた。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 6 | ２９ | いちょう学級公開授業<br>ルールを守って楽しく活動しよう<br>授業者　大下　陽子 | ルールを守らない例を挙げ「どんなことを守ったら楽しくできるか」という発問をすることにより、お互いを認め合う対話を促すことができた。 |
| 9 | ２８ | ５学年公開授業<br>ふりこのきまり<br>授業者　井畑　八千代 | ブランコの動画を見て、「揺れ方がちがうのは何と関係しているのか」と発問することにより、経験をもとに考え、図や絵を介した対話を促すことができた。 |
| 9 | ２９ | ３学年公開授業<br>重さ<br>授業者　中村　好秀 | シーソーの絵を提示し、「一番重いわけを説明できるか」と発問することにより、絵カードに書いたコメントをもとに順序立てて説明し合わせることができた。 |
| １１ | 2 | ２学年授業研究<br>三角形と四角形<br>授業者　下館　眞梨 | 図形の見せ方や順序を工夫して提示し、「三角形や四角形と言えるわけを説明する」という課題を設定することにより、図やメモを介した対話を促すことができた。 |
| １１ | 9 | １学年公開授業<br>かたちづくり<br>授業者　沼舘　優子 | 色板の数を指定した上で「影絵の形を作ろう」という課題を設定することにより、具体物を操作しながらの対話を促すことができた。 |
| １１ | ２４ | ６学年授業研究<br>てこのはたらき<br>授業者　田村　享太 | ドライバーがてこを利用しているという事実を提示し、「どのようなてこの仕組みになっているか」と発問することにより、書き込みを介した対話を促すことができた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 5 | １８ | 「学習方略とは何か　なぜ大切なのか」<br>講師：広島大学大学院准教授　深谷達史先生 |
| 6 | １５ | 「地域を学ぶ」　　講師：北山博秋氏 |
| 7 | ２９ | ICT 活用　立命館小学校教諭　正頭英和先生（視聴覚教育研究会夏期講習会講師） |
| 8 | ２２ | ストレスマネジメント～ストレスとうまくつき合う方法～<br>講師：青森県総合学校教育センター　教育相談課　工藤直子先生 |
| １１ | 9 | 問題解決的学習における学習方略の効果的な活用について<br>講師：広島大学大学院准教授　深谷達史先生 |
| 1 | １０ | JS 講演　「いじめ・不登校の根っこにあるもの」　SC　北山勝則先生 |

## ６　研究の成果

(1) 知的好奇心を高め、思考が動き出す動機づけとして、児童の興味関心を引くもの、ある程度の抵抗感があるものを提示することによって、「主体的に学ぶ」意欲の高まりが見られた。また、児童のつぶやきを丁寧に拾うことで、問いの共有につながることが分かった。

(2) 学習内容、学習活動に適した学習方略を活用させたり、個人、グループ、全体と段階を踏ませたりしながら自分や他者との対話を促すことにより、考えを深め合うことになると分かった。

## ７　研究の課題

(1) 問題・教材との対話をさせるのに、何を提示して、何を考えさせるか、また全体の場でどのように考えを共有させるかについてさらに研究を深めていく必要がある。

(2) 学習方略を可視化したり、学習方略の有効性を実感させたりする授業づくりを通して、児童自身が学習方略を活用する力を育成したい。

（記入者　大嶌　禎子）

桔梗野小

# 関わり合い、考えを深め、解決する子の育成

## ～主体的に学び合う活動の工夫を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　吉田　朝子

### １　研究主題について

(1) 学校目標具現化の立場から

本校の今年度の学校目標は、「自分を大切に　友だちも大切にする子の育成」である。主体的に問題解決に取り組むためには、問いに向かって自分なりの考えをもつことが重要となる。自分の考えや立場を明確にさせることは、「自分を大切に」することにつながる。また、学び合いの場面で対話的活動を設定し、関わり合いながら考えを深めさせるには、「友だちを大切に」する態度の育成が不可欠である。よって、本主題に取り組むことは、学校目標の具現に資するものである。

(2) 研究の経過から

これまで、「関わり合い、考えを深め、解決する子の育成～主体的に学び合う活動の工夫を通して～」という研究主題で取り組んできた。導入段階では身近で興味のわく問題の提示やICTの活用をすることで、児童が自分のこととして課題を捉えて主体的に学習課題に取り組む姿が見られた。さらに、個の考えをもって対話に臨むことで目的意識が高まり、関わり合いの中で伝えたり表現したりという活動が円滑に進むようになった。形態を変えたり、繰り返し意見交流を行ったりすることで、活発な対話的活動が持続するようになり、関わり合いから思考力や問題解決力を高めることができた。

このように、学び合いに対する児童の意欲と問題解決力は向上したものの、問題解決における個々の迫り方にはばらつきがあり、思考のこだわりに対する整理、思考の共有化、転換などは、これからも手立てを工夫して再構築する必要がある。

そこで、今年度は３年計画の２年次として、昨年度までの算数科における研究成果を生かしつつ、教科の枠を取り払いすべての教科・領域に実践を広げ、対話的活動から思考を深めて問題解決への迫り方を共有する効果的な指導のあり方について研究を進める。また、すべての通常学級において研究主題へ向けて授業を公開することによって、目的意識をもって問題解決に向かう授業づくりに全校的に取り組んでいく。充実した対話的活動への取組のもと、目的意識をもって問題解決に向かう目指す児童像に迫っていきたい。

### ２　研究のねらい

関わり合いの中から、考えを広げたり深めたりして、主体的に学ぶ児童を育てるための指導の在り方を授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

教師の働きかけや発問を工夫して、関わり合いの中から考えを深める授業を日常化することにより、問題解決に向かおうとする児童を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 主体的に問題解決に向かう指導の在り方。

ア　導入場面で、問いをもたせる課題（問題）提示の工夫。

イ　問題解決へ向かうための対話的活動の工夫。

(2) 学びのわざの継続による主体的に学ぼうとする態度の育成。

(3) 学習用語などの掲示による、学習の手がかりになるような環境の整備。

## ５　研究の経過

⑴ 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者等 |
|---|---|---|
| ５ | １１ | 授業公開①算数　　３年１組　　教諭　國分　裕子 |
| ６ | ８ | 授業公開②国語　　５年１組　　教頭　淡路　秀一 |
| ６ | １４ | 授業公開③道徳　　４年１組　　教諭　田島　結希子 |
| ６ | ２９ | 第１回授業研究　（要請訪問）４年２組　道徳　　授業者　教諭　長谷山　有也 |
| ７ | ２０ | 授業公開④自立　　楓学級　　教諭　柴田　英子　　桔梗学級　　教諭　高井　美紀子 |
| ７ | ２２ | 小教研授業発表⑤特活　　５年１組　　教諭　吉田　千春 |
| ９ | １２ | 授業公開⑥算数　　３年２組　　教諭　吉谷　恵理子 |
| ９ | ２１ | 授業公開⑦国語　　１年２組　　教諭　角田　歩美 |
| １０ | ２６ | 第２回授業研究　（小教研授業発表）２年１組　道徳　　授業者　教諭　澤田　実希 |
| １１ | ２ | 第２回授業研究の成果と課題について、動画視聴、校内での協議会 |
| １１ | ９ | 授業公開⑧体育　　５年２組　　教諭　　金枝　成弥 |
| １１ | １４ | 授業公開⑨社会　　６年１組　　教諭　　桑田　勝護 |
| １１ | ３０ | 授業公開⑩算数　　１年１組　　教諭　　長谷部　幸恵 |

⑵ 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ４ | ２７ | 特別な配慮を要する児童の理解　　担当：本校教諭　高井　美紀子 |
| ５ | １１ | 「１人１台端末活用」の研修　講師：総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事 |
| ６ | ８ | 「救急時の手当てと対応」ＡＥＤ、一次救命処置、応急手当てについて　担当：本校養護教諭　井上　佳林 |
| ６ | ２２ | 「生徒指導上の重要事項」　　担当：本校教諭　桑田　勝護 |
| ７ | ２２ | 幼保小こ連携推進事業　こもれびのもり幼稚園参観 |
| ８ | ２３ | ＩＣＴに関する研修　　担当：本校教諭　桑田　勝護　　吉谷　恵理子 |
| ８ | ３１ | 県学習状況調査の分析・考察 |
| ９ | １４ | 「特別支援に関する研修」　　講師：旭ヶ丘小学校　中奥　尚子　校長先生 |
| １１ | ３０ | 幼保小こ連携推進事業　桔梗野保育園参観 |

## ６　研究の成果

⑴ 具体的な問いや視覚に訴える問題提示により、問いを意識させ主体的に問題解決に向かわせることができた。対話的活動では形態を工夫することで、自信をもちながら他者の意見を取り入れ、さらに全体での問題解決力の向上につながった。

⑵ 理由をつけて話す場面では、教師が力をつけたい部分を意識して声がけしたことにより、考えを整理しながら話すことができるようになった。振り返りでは、学習内容により「書く」「話す」を適切に取り入れることで、児童が継続的に学びの積み重ねを行い主体的な態度が育成された。

⑶ 全校で学習環境を整えて既習事項を提示したことにより、問題解決の手立てや振り返りの確認になった。また、「正しい言葉を正確に」という意識が高まり、聞き方やテストの答え方に良い影響が見られた。

## ７　研究の課題

⑴ 問いをもたせるための時間の比重や、児童の問いの確認が難しいため、問いのバリエーションを充実させていかなければならない。話すことへのためらいなど個人差も考慮しながら、自力解決と対話的活動の時間配分を柔軟に変える対応が必要である。また、学年に応じた話し方の提示を行い、教師間で共通理解して学習を進めていく必要がある。

⑵ 学びのわざ３のうち、振り返りと、理由をつけて考えを話すことは向上したものの、家庭学習については、主体的な姿勢を捉えるには難しい部分があった。家庭環境も関わることであるため、家庭学習ではない学びのわざを考えていく必要がある。

⑶ 掲示物の量が多過ぎると、どれを見てよいのか分からなくなる児童もいるため、掲示内容の取捨選択、精選を適宜行っていかなければならない。また、学力の定着や新たなインプットを考えると提示期間や教科、提示場所なども考慮していく必要がある。

（記入者　田島　結希子）

轟木小

# 主体的に学び合う力の育成

## ～複式・少人数における問題解決の力を育成する授業実践を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　堤　　司

### １　研究主題について

本校では、教育目標である「いきいき学びあう子」「なかよくふれあう子」「ほん気できたえあう子」の具現化のために、昨年度から「主体的に学び合う力の育成」を研究主題とし、解決の見通しをもたせるための課題提示の工夫と ICT の活用について研究を進めてきた。その結果、児童は前時との違いに気付いたり、自ら予想をもったりし、自力解決の意欲を高めることができた。

しかし、本校は複式・少人数であるため、多様な考えを出し合ったり触れたりすることが難しい。そのため、他者とかかわり合ったり、伝え合ったりしながら問題解決していこうとする力や進んで表現しようとする主体的な態度はまだ十分とは言えない。また、個人差が大きいため、「やってみたい」「できそうだ」という、問題解決への意欲を持続させる手立てを工夫する必要があることも課題として挙げられた。

そこで、今年度は問題解決への意欲と見通しをもたせるとともに、それが持続したり深まったりする教師の手立てについて研究を進めていくことで、「主体的に学び合う力の育成」を目指していきたいと考えた。なお、昨年度の研究の成果を生かし、ICT を活用した授業を通して研究を進めていく。

### ２　研究のねらい

自分の考えをもち、進んで問題解決するための効果的な指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

問題解決に向かう意欲と見通しが持続する手立てを工夫することにより、主体的に学び合う力を育てることができる。

### ４　研究内容

(1)　問題解決への意欲と見通しをもち、主体的に取り組むための工夫

ア　自分の考えをもち、伝える場の工夫

イ　ICT の効果的な活用

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名 |
|---|---|---|
| ６ | １５ | 第１回授業研究（４・５学年）　授業者　教諭　高島　庸<br>社会　４年「ダムの働き」　５年「あたたかい気候にあった農業」 |
| ６ | ２９ | 第２回授業研究（６学年）　授業者　教諭　中川　健郎<br>国語　６年「私たちにできること」 |
| ９ | ２１ | 第３回授業研究（１学年）　授業者　教諭　山田　訓子<br>生活　１年「きれいにさいてね　たねをとろう」 |
| ９ | ３０ | 八戸市教育委員会教育指導課・総合教育センター訪問 |
| １０ | １９ | 第４回授業研究（２・３学年）　授業者　教諭　木村頼子<br>算数　２年「かけられる数とかける数」　３年「もようづくり」 |

(2)　一般研修

| 月 | 日 | 内容　・　講師・概要等 |
|---|---|---|
| ４ | ２８ | タブレットに関する研修<br>講師　本校教諭　中川　健郎 |
| ５ | ２５ | 「図画工作に関する研修」<br>講師　本校校長　堤　司 |
| １２ | ７ | 特別支援教育について<br>「特別な支援を要する児童の対応の仕方～つなぐ支援　Quality Of Life～」<br>講師　青森県立八戸盲学校　教諭　三浦　亜紀先生 |
| ２ | ８ | 県学習状況調査結果の考察<br>本校教諭　中川　健郎 |

## ６　研究の成果

(1) 問題提示の工夫や内容の焦点化など、自分の考えをもつ手立てをそれぞれの児童に応じて講じることで、課題解決の意欲や見通しにつなげ、一人一人に自分の考えをもたせることができた。

(2)　ＩＣＴを活用することで、調べた情報を並び替えながら整理したり、自分たちで互いの考えを比較しながらまとめたりすることができる場面が増えた。

## ７　研究の課題

(1) 自分の考えを伝え合うだけでなく、互いの考えを比較したり統合したりしながら考えを深め合うためには、話し合いたくなるような必要感や切実感のある問題提示の工夫、めあての焦点化を図る必要がある。

(2) 教科や活動内容によっては、ＩＣＴを使わない方が効果的な場面もあった。今後は、ＩＣＴを活用するよさを生かせる活用場面を考えていきたい。

（記入者　高島　庸）

# 進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成
## ～一人一人が考えをもち、表現できる授業づくり～

（２年計画の１年次）

校長　　安田　俊彦

### １　研究主題について

本校では、教育目標「夢や志をもち、共に高め合う児童の育成」を掲げ、それを受けて努力目標を「考える子・やさしい子・すこやかな子」としている。また、めざす児童像を「主体的に学び合い考えを深める子・素直な心をもち自他を大切にする子・健康な生活を送り心身ともにたくましい子」とし、知育・徳育・体育の各部会が具体策を提案し、職員全体の共通理解の下、知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図っている。

昨年度は、主体的な伝え合い・学び合いを支える手立や工夫として、算数科において、発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示することに取り組んだ。また、３年間継続して導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりに取り組んできた。

その結果、児童に疑問や課題への意欲をもたせ、必要感をもって課題に取り組ませることができたことが成果として挙げられた。話型などの提示は、話すことが苦手な児童にとっては有効な手立てとなり、進んで伝えようとする意欲へとつながった。また、単元ごとに話合いの根拠になる材料を蓄積し、それを使って説明する時間を設定することで、進んで伝え合う力が育ってきた。

しかし、課題把握の場面でのつまずきや自力解決での個人差により、伝え合いに時間が多くかかって学び合いがうまく進まないという実態が明らかになった。個に応じた指導を、よりよい学び合いにつなげられるよう研究を深めていく必要性が挙げられた。

そこで今年度は、昨年度までの研究を踏まえながら、一人一人が意見や考えをもち、表現できる授業づくりに取り組むこととした。これまで取り組んできた導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続することによって、本校の課題を解決していく。また、昨年度、研修で取り組んできた１人１台端末活用の授業における効果的な活用についても実践を重ねていきたい。授業研究での成果を日常の授業実践に生かし、進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成に努めていきたい。

### ２　研究のねらい

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子を育成するための学習指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

導入・課題設定の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続し、一人一人が意見や考えをもち、表現できる授業づくりについて研究を進めることによって、「進んで伝え合い、共に学び合う子」の育成につながることを検証する。

### ４　研究内容

(1) 主体的に学習に向かわせるための必要感のある課題設定の工夫
　ア　発問や事象提示の工夫
　イ　見通し、解決に向けた場の工夫
　ウ　振り返る場の設定（仲間との対話、自分との対話）

(2) 一人一人が意見や考えをもち、表現するための工夫
　　（特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり）
　ア　気付きや思考の根拠をもたせる活動の設定
　イ　伝え合うための手立てや共感的な態度で学び合う場の工夫
　ウ　効果的な１人１台端末の活用

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名 |
|---|---|---|
| ７ | １３ | 第１回授業研究（２学年）授業者　根城　悠紀子　「図を使って考えよう（１）」 |
| ９ | １５ | 第２回授業研究（５学年）授業者　中野渡　大樹　「整数」 |
| １１ | １１ | 教育指導課・総合教育センター訪問　全学級授業 |
| １１ | １８ | 小・中ジョイントスクール推進事業　授業公開 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ６ | １<br>１５ | 救急法Ⅰ<br>救急法Ⅱ　講師：エスプロモ株式会社<br>館長　下田　尋通　氏 |
| ６ | ２９ | 気になる子へのアドバイス　講師：八戸学院短期大学部　幼児保育科<br>教授　野口　和也　氏 |
| ８ | ３１ | 県学力状況調査の分析・考察 |
| ９ | ５ | 道徳科における指導と評価の一体化　講師：教育指導課<br>主任指導主事　大野　勉　氏 |

## ６　研究の成果

(1) 子どもたちの身近なことに関連付けたり、取り組みやすい内容に問題を変えたりすることで、必要感や問題意識をもち、意欲的に取り組む姿が見られた。また、学習のポイントをしぼり思考にずれを生じさせ、「なぜ」を大切にする授業を心がけたことは、主体的に学習に向かわせることにつながった。

(2) 共感的な態度で学び合う場の工夫を継続したことで、発表時に発表者に体を向けたり、反応したりする児童が増えた。友達から学ぼうという姿勢が見られた。また、ペアや少人数で話す場を設定することで、発表が苦手な児童を参加させることができ、共に学び合う姿に近づいてきた。

(3) ネームプレートの活用やジャムボードなど、一人一人に意見や考えをもたせるための効果的だった工夫を職員間で共有した。その中で、各学級の実態に合った取組を行い、考えを表現する力が育ってきた。

## ７　研究の課題

(1) 進んで考えを伝えたいという意欲が高まってきたと同時に、考えを整理して話すことができず、まとまりのない伝え方になってしまうという実態が明らかになった。今後は、さらに相手意識をもたせるなど、伝え方についても研究を深めていく必要がある。

(2) 一人一人が意見や考えをもち、表現するための工夫として、１人１台端末の活用にも取り組んできた。有効な部分がある一方、予定より時間がかかったり、めあてが達成できなかったりするという課題が挙げられた。普段から扱いや使い方に慣れさせる必要性を感じた。さらに有効に活用するために、情報交換や研修を継続していく必要がある。

（　記入者　　石塚　里佳　）

多賀台小

# 自分の考えをもち、進んで表現する子の育成

## ～児童の思考に寄り添う授業づくりを通して～

（３年計画の２年次）

校長　　竹　花　剛　二

### １　研究主題について

本校では、教育目標として「心豊かに　たくましく」、努力目標として「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「体をきたえる子」を掲げ、物事を自分事として捉えたり、相手の立場になって考えたりすることができる児童、物事を関連付けて考えることができる児童の育成を目指している。

昨年度は、「問いを引き出す学習課題の設定」「主体的・協働的に課題を解決させる働きかけ」「自己の変容に気付かせる振り返りの工夫」についての研究を進めてきた。問いを引き出す課題の提示や発問の工夫をすることにより、児童は意欲的に課題に向かい主体的に学習に取り組むことができるようになってきた。また、自分なりの考えをもたせ、自分の考えを他者と比較しながら話し合う場面を設定し、解決に向かわせることができた。しかし、考えを広げたり深めたりするような活動をするための指導者の働きかけには課題が残った。また、単元を通した振り返りや１人１台端末を活用した振り返り等を通して、振り返りの有効性は実感できたが、自己の変容に気付かせるまでには至らなかった。

そこで、これらの成果と課題から、今年度は、「児童の思考過程を大切にした授業づくり」を土台とし、さらに児童の思考に寄り添った授業づくりの研究を進めていく。まずは、児童が思考したくなる学習課題を設定する。児童の実態や事前テストの結果などを基に、児童が自分事として課題を捉え、必要感や切実感をもつことができる課題を提示したい。次に、深い学びにつながる対話の工夫をする。児童の様子を観察し、多様な考えを引き出すためのしかけや思考を深める発問など、その状態に合わせた適切な働きかけをすることによって、深い学びが実現できると考える。そして、自己の学びを確かめる振り返りを積み重ねることにより、児童に「わかった！できた！身についた！」を実感させたいと考える。

### ２　研究のねらい

児童が問題を解決する際に、児童の思考に寄り添うことを意識した授業づくりを行うことが、自分の考えをもち、進んで表現する子の育成に有効であるということを授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

児童の思考に寄り添う授業づくりのため，児童が思考したくなる学習課題を設定し、多様な考えを引き出すためのしかけや思考を深める発問など、深い学びにつながる対話の工夫をした授業を展開する。そして、児童が自己の学びを確かめる振り返りを積み重ねることにより、自分の考えをもち、進んで表現する子を育成できる。

### ４　研究内容

(1) 児童が思考したくなる学習課題の設定
(2) 深い学びにつながる対話の工夫
　ア　多様な考えを引き出すためのしかけ
　イ　思考を深める発問
(3) 自己の学びを確かめる振り返り

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師 |
|---|---|---|
| 6 | 3 | 教育指導課・総合教育センター訪問（計画訪問）<br>第１回授業研究（３学年）永澤　舞梨　国語「まいごのかぎ」<br>講師：八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　福田　秀貴　氏 |
| 9 | 28 | 授業公開（２学年）児玉　友絵　国語「どうぶつ園のじゅうい」 |
| 11 | 8 | 授業公開（６学年）吉田　彰子　道徳「ブランコ乗りとピエロ」 |
| 11 | 16 | 第２回授業研究（５学年）福士　貴人　算数「単位量当たりの大きさ」<br>講師：三八教育事務所　教育課　指導主事　前川原　泉音　氏 |
| 11 | 21 | 授業公開（４学年）類家　直人　国語「プラタナスの木」 |
| 11 | 29 | 授業公開（１学年）佐々木　禅　算数「ものとひとのかず」 |
| 12 | 7 | 授業公開（Ｔ・Ｔ）河原木　直美　６年算数「場合の数の調べ方」 |
| 12 | 8 | 授業公開（すずかけ）寺下　真彩子　算数「割合」（５年）<br>授業公開（わかば）伊藤　直子　算数「そろばん」（5年）「□を使った式」（6年）<br>講師：八戸市教育委員会　八戸市こども支援センター<br>特別支援教育アドバイザー　上澤　司　氏<br>指導主事　三浦　祐子　氏 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 6 | 15 | 学力検査（ＣＲＴ）の分析・考察 |
| 7 | 6 | 救急救命講習<br>講師：日本赤十字社水上安全法指導員　南郷屋内運動場　館長　下田　尋通　氏 |
| 7 | 20 | 教育課程研修 |
| 8 | 19 | 特別な支援を要する子への手立て<br>講師：八戸市教育委員会　こども支援センター　指導主事　三浦　祐子　氏 |
| 8 | 31 | 県学習状況調査の採点・分析・考察 |
| 9 | 7 | １人１台端末の活用<br>講師：本校教諭　吉田　彰子　　福士　貴人 |
| 9 | 21 | 器械運動についての研修<br>講師：本校教諭　類家　直人 |
| 12 | 7 | 全国学力・学習状況調査の分析・考察 |

## ６　研究の成果

(1) 児童が思考したくなるような学習課題設定を行うことにより、解決の必然性や意欲を引き出すことができた。また自分の立場を明らかにすることで、自分事として課題を捉える児童が増え、主体的に学習に取り組むことができるようになってきた。

(2) 多様な考えを引き出すために話合いの形態を工夫したり、問い返しやゆさぶりなど思考を深めるための発問をしたりするなどの対話の工夫をすることにより問題解決に向かわせることができた。

(3) １人１台端末を活用することで、課題を把握したり考えを共有したりする場面において、特に意欲的に学習に向かわせることができた。

## ７　研究の課題

(1) 児童同士の対話を通して深い学びにつながるよう、話合いの視点を明確にしたり、伝え合う方法を更に工夫したりしていく必要がある。

(2) 自分事として課題を捉える児童が増えてきているが、その課題意識を最後まで持続させ、「わかった！できた！身についた」が実感できるような授業づくりをしていく必要がある。

（記入者　児玉　友絵）

豊崎小

# 主体的に学びに向かう子の育成

## ～思いや考えを表現し、学び合う学習活動を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　久保　　亨

### １　研究主題について

本校では、教育目標として「たくましく生きる子」を、知の努力目標として「自分の考えをもち、学び合う子」を掲げている。また、今年度は学校目標を「学びに向かう力を伸ばす」と設定し取り組んでいる。その具現化のため、一昨年度から研究主題を「主体的に学びに向かう子の育成」、昨年度から副題を「児童が自ら取り組む働きかけの工夫を通して」として、授業のみの関わりだけではなく、普段から児童が自分で考え、行動する習慣がつくことを大切にしながら、研究を進めてきた。

昨年度は、児童の思考の流れに即しながら、興味・関心を高めたり、考える必要感がある課題提示や発問の工夫を継続して行ってきたことで、主体的に課題解決に向かう姿が見られた。また、ねらいを明確にした、教師や児童同士の関わりを通して、内容や形態、思考の可視化に取り組んだことで、自分の考えをもち、学びに向かう力の育成につながった。そして、日常において児童が自ら取り組む働きかけの研究と実践を積み重ね、共有することで、児童が自分の考えを大切にし、行動に移せる力の向上が見られてきた。

しかし、課題として、指示や提案をされてから動くのではなく、児童が自ら考え、行動に移せる力をより発揮できるようにしていく必要があること、自分の考えをもち、より学ぶことを楽しめるよう、課題設定の在り方や単元の見通し、児童に応じた友達との関わり方や教師の支援の仕方等について、さらに研究していく必要があることが挙げられた。

そこで、今年度は、一人一人が自分の考えをそれぞれに表現することができるようにするための授業づくりについて、さらに研究を深めることにした。そして副題を「思いや考えを表現し、学び合う学習活動を通して」と変更し、児童が主体的に考え、友達と学び合う中で自分の考えを広げることによって互いの学びを深めさせていきたいと考え、本主題を設定した。

自分の考えをもち、主体的に学びに向かう「たくましく生きる子」を目指して、研究を進めていきたい。

### ２　研究のねらい

主体的に学びに向かう子の育成のためには、児童が思いや考えを表現し、学び合う学習活動を行うことが有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

児童が思いや考えをそれぞれに表現しながら、学び合う学習活動を推進することによって、進んで課題を発見して粘り強く解決に取り組んだり、友達とよりよい考えや方法を求めたりするなど、主体的に学びに向かうことができる。

### ４　研究内容

(1) 自分の考えをもち、深める手立ての工夫
(2) 知的好奇心を高め、考える必要感がある課題提示や発問の工夫
(3) 学びを深め、次への意欲を高める振り返りの工夫
(4) 児童が自ら取り組む日常的な働きかけの研究と実践

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名 |
|---|---|---|
| ６ | １７ | 教育指導課・総合教育センター訪問<br>第１回授業研究　５学年　道徳　「手品師」<br>授業者　松生　章乃　（要請訪問）<br>指導助言：八戸市教育委員会　教育指導課　大野　勉主任指導主事 |
| ９ | ２０ | 第２回授業公開　６学年　国語　「やまなし」<br>授業者　花田　貴光 |
| １０ | ２５ | 第３回授業公開　２学年　国語　「どうぶつ園のじゅうい」<br>授業者　福田　智恵子 |
| １１ | １６ | 第４回授業研究　１学年　図画工作　「おもいをつたえよう」<br>授業者　濵田　真弓 |
| １１ | ２９ | 第５回授業公開　３学年　算数　「分数」<br>４学年　算数　「小数のかけ算やわり算」<br>授業者　木村　允一 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ５ | ２５ | 一人一台端末活用法<br>講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事 |
| ８ | ２３ | 一人一台端末活用法<br>講師　八戸市旭ヶ丘小学校　佐々木　俊介　教諭 |

## ６　研究の成果

(1) 考える必要感がある課題提示や発問の工夫によって、児童は主体的に取り組むことを授業を通して学ぶことができた。また、課題意識をもたせるために、視覚化の工夫、考えたくなる発問について研修を深めることができた。
(2) 本時の内容に関わる既習事項の掲示、前時の学習内容の想起、教具や図の掲示等を意図的に行うことは、問題解決の見通しをもつことができ、主体的に学びに向かうことに効果的だった。
(3) まず自分の考えをもち、立場をはっきりさせ、さらに友達と意見交流をすることは、表現したいという意欲を高めることに効果的だった。
(4) それぞれの学年で発達の段階に応じた振り返りができた。「わかった」「次にやりたい」「疑問」などを書くことで、児童は自分の到達度に気付き、教師は本時の定着度を図る手立てとなった。

## ７　研究の課題

(1) 考える必要感のある課題提示や発問の工夫をすることにより、児童に考えをもたせることはできたが、知的好奇心を高めたり考えを深めたりすることにつながったかどうかを検証する方法を考える必要がある。
(2) 発達の段階を考慮した、振り返りの系統表を作成するなどし、次への意欲を高めるための振り返りとしていく必要がある。
(3) 少人数学級や複式学級における、効果的な学習の進め方について研修をしていく必要がある。

（記入者　松生　章乃）

新井田小

# 主体的・対話的で深い学びのできる子の育成

## ～問題解決的な授業展開を通して～

（３年計画の３年次）

校長　成田　明彦

### １　研究主題について

本校では、教育目標に「夢に向かい　考え　行動する子」、努力目標に「考えぬく　なかよく　がんばりぬく」、学校目標に「元気、やる気・根気、思いやりいっぱいの新井田っ子に～自分を高め、一体感のある学校に～」を掲げている。

昨年度まで、児童の思考に沿った学習問題「問い」を生み出す工夫、その問いを共有し課題解決の「見通し」をもたせる工夫について研修を進めてきた。問いを生み出す場面では、教材を工夫したり、発問・指示を工夫したりしたことで、思考のずれが生まれ、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に課題解決に取り組む児童の姿が見られた。また、既習事項を効果的に活用したことで、問いの焦点化を図ることができた。見通しをもたせる場面では、様々な手立てを講じたことで、自力解決が難しい低位の子達が、安心して学習に取り組む姿が見られた。その一方で、見通し待ちをする子が出てきてしまったり、ヒントを与えすぎで教師主導の授業になってしまったりという課題があがった。

課題はあるものの、問題解決的な学習を進めてきたことで、主体的に学習に取り組む姿勢が身についてきている。そこで、今年度も研究主題及び副題を継続し、昨年度までの研究成果を生かしつつ、対話的な学習に取り組ませながら、問題解決的な学習の充実・改善を図っていくこととした。日常の授業実践の中で、目指す児童像の育成につなげていきたい。

### ２　研究主題のねらい

主体的・対話的に学ぶ子の育成のために、問題解決的な授業展開をどのように工夫していけばよいかを、国語科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

問題解決的な授業展開の中で「学習課題を生み出す工夫」や「児童の思いや考えを広げ深める場の工夫」等を行うことで、自分の考えをもち、主体的・対話的に学ぶ子を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 児童の思考に沿った学習課題「問い」を生み出す工夫

ア　児童の興味関心を高める教材を工夫する。

イ　発問・指示を工夫する。

ウ　既習事項を活用する。

(2) 児童の思いや考えを広げ深める場の工夫

ア　目的を明確にした交流の場を設ける。

イ　児童の思考過程を可視化（見える化）する。

ウ　発問・指示を工夫する。

エ　相手意識を育てる話し方を指導する。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者等 | 全体研修等 |
|---|---|---|---|
| 6 | ２３ | 初任者研修示範授業研修（２年）<br>国語「あったらいいなこんなもの」<br>授業者　教諭　横沢深雪 | 「質問・答え」を付箋に書いて分類し、対話を可視化することで、質問をして相手の考えを引き出すという能動的な聞き方を学習した。 |
| 6 | ２３ | 初任者研修示範授業研修（４年）<br>道徳「～命の大切さ～<br>五百人からもらった命」<br>授業者　教諭　月舘久美子 | 「患者を救ったのは誰か」について自分の考えをもとに、子ども達による板書で、内容を分類した。板書をもとに、類似点・共通点・相違点に気付かせ、価値について深く考えさせた。 |
| 6 | ２３ | 初任者研修示範授業研修（６年）<br>算数「分数÷分数」<br>授業者　教諭　石村飛生 | わり算の性質や面積図等を用いて、分数÷分数の計算について説明し合うことを通して、理解を深めさせた。 |
| 7 | １３ | 授業研究（３年）<br>算数「あまりのあるわり算のしかた」<br>授業者　教諭　外崎直子 | 数図ブロックや図などの具体物の操作を通して、図と式が一致することを実感させ、あまりのとらえ方と計算の仕方を学習した。 |
| 9 | ２８ | 授業研究（１年）<br>国語「やくそく」<br>授業者　教諭　鮫ノ口絢香 | ペープサートを活用し、表情の変化を視覚化することで、登場人物の気持ちや他者との関わりの理解を深めさせた。 |
| １２ | １４ | 授業研究（５年）<br>算数「割合」<br>授業者　教諭　昆春見 | 問題の文脈理解に対して関係図を、数量の大きさを表すために線分図を用いることで、割合の意味の理解につなげた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 研修内容 | 講師 |
|---|---|---|---|
| 5 | ２５ | 生徒指導面における共通理解と不登校児童について<br>特別支援教育について（授業参観・講話） | 本校教諭　　昆春見<br>本校教諭　　城井田暁子 |
| 6 | 1 | 特別に支援を必要とする児童生徒への支援 | 青森県総合学校教育センター<br>指導主事　　辻村義樹 |
| 8 | ２２ | 人間関係づくり（構成的グループエンカウンター） | 青森県総合学校教育センター<br>指導主事　　千葉玲奈 |
| １１ | 2 | メディア機器の使用による健康被害と<br>メディアコントロールについて | 子どものネットリスク教育研究会<br>青森大学客員教授　　大谷良光<br>森田養護学校教諭　　菅原貴子 |
| 1 | １１ | メディア機器使用によるトラブルについて | 青森県警察本部生活安全部<br>被害少年対策管　長利真至氏 |
| 2 | 8 | 学年研修報告会 | 各学年の授業者 |

## ６　研究の成果

(1) 「問いを生み出す工夫」では、「既習事項とのずれ」や「友だちの考えとのずれ」などのずれを授業の中で引き出したことで、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に取り組む児童が増えた。

(2) 「児童の思いや考えを広げ深める場の工夫」では、児童の思考過程を可視化したり、目的を明確にした交流の場を設けたりしたことで、課題解決に向けて、協働的に取り組む児童が見られた。

## ７　研究の課題

(1) 課題解決への見通しが甘かったり、問いの共有が不十分だったりすることで、課題解決に至らない児童が見られた。特に、低位の子に対するアプローチの仕方に課題が残った。

(2) 交流の場では、様々な意見を出すことで考えの広がりを感じることはできていたが、考えの深まりにまでいたらないことが多かった。「自力解決の場」「交流の場」「共有の場」での達成状況を見取り、児童の実態や反応に合わせて、柔軟に授業を進めていく必要がある。

（記入者　　横沢　深雪）

旭ヶ丘小

# 関わり合いながら　深く考える子の育成

## ～対話的な授業づくりを通して～

（２年計画の２年次）

校長名　　中奥　尚子

### １　研究主題について

(1) 主題設定の理由

本校は教育目標を「生き生きと　心も体もたくましく」と定め、子どもの明るい声が響き、学力・思いやりの心・体力・生活力を確実に育てる学校を目指している。教育目標、これまでの研究経過と、「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点を踏まえ、研究主題を「関わり合いながら深く考える子の育成」と設定した。

昨年度は授業の導入の工夫に取り組んだ。「～しよう」という課せられた問題ではなく、「～はどうすればよいか」といった、児童の思考を表した学習問題を意識し、授業研究を通して児童のもつ問いの共有を図り、対話的な授業づくりに努めた。今年度は、授業づくりの視点を４つに整理し焦点を絞って授業改善に取り組んだ。児童がより課題意識を持ち、自分の考えを表現することを通して、対話によって問題を解決しようとすることができるよう、授業展開の工夫を行った。また、変容を実感できる振り返りを通して、自分や仲間を肯定し、学び合おうとする態度を高める支援の方法について研究を進めた。

(2) これまでの研究内容の推移

ア　令和３年度の実践研究の成果から

①「問いの共有～自力試行～学び合い～振り返り」というプロセスを共通理解し、授業研究・個人研修によって多様な教科・領域の中で問題解決的な学習を進めることで、本校の目指す「関わり合いながら深く考える子の育成」に迫ることができた。特に、「自己内対話」「教材との対話」を進めるため、「思考のズレ」を起こすような学習問題の設定を全校で意識して進めることができた。そのことが子どもたちの追究意欲につながり、思考しようとする態度、考えの変容を自覚した振り返りに表れるようになった。

②１人１台端末についての研修を重点的に行うことによって、ストリームや Jamboard の活用など、学年の発達段階に応じた日常的な活用がなされるようになった。

イ　令和２年度の課題から

①子どもたち一人一人の考えを引き出し、考えを再構築させるための発問や問い返しの仕方など、対話を進めていくための教師の役割について継続して検討していく必要がある。

②１人１台端末の活用など、どうすればＩＣＴを効果的に使用できるのか、教師が授業の中で活用方法を選択・判断し、資質・能力を身に付けさせるための研修をさらに推進していく必要がある。

### ２　研究のねらい

問題や他者との関わりの中で子どもたちが思考し、学びを深めるための授業の在り方や指導方法について授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

児童の追究意欲を喚起する課題を設定し、対話を通して解決しようと取り組ませることにより、深く思考する力を伸ばすことができると考える。

### ４　研究内容

(1) 研究仮説を検証するための４つの視点について、日常の授業の中での実践を通して明らかにする。

ア　視点１：子どもたちの解いてみたいという願いと教科・教材の目標を踏まえた学習課題になっているか。

イ　視点２：思考力・判断力・表現力につながる言語活動を意識した授業になっているか。
ウ　視点３：対話による子どもたちの思考の過程を大切にする授業の流れになっているか。
エ　視点４：子どもたちが考えの変容や深まりを実感できる振り返りとなっているか。

(2) 「課題把握（見通し)、自力試行、学び合い、振り返り」の学習段階を元にした、主体的に課題を解決する学習の充実を図る。

(3) 個人の成果と課題の共有による、全体での学びを推進する。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師 |
|---|---|---|
| 6 | 22 | 授業研究　５学年　乙山百恵　特別活動「サブリーダーとしての自分の役割」<br>講師：八戸市総合教育センター　所長　河村雅庸　氏 |
| 7 | 13 | 授業研究　４学年　井畑英夫　体育科「マット運動」<br>講師：本校　教頭　中村雅人 |
| 9 | 2 | 要請訪問　１学年　花田杏野　特別活動「あいさつをレベルアップさせよう」<br>講師：八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　中村美穂　氏 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 研　修　内　容・講　師 |
|---|---|---|
| 5 | 2 | 通常の学級における支援が必要な児童への支援について　本校　教諭　工藤巨幸 |
| 6 | 1 | ＰＰＲについて　立教大学　教授　大石幸二　氏 |
| 6 | 22 | 特別活動について・八戸市総合教育センター　所長　河村雅庸　氏 |
| 7 | 6 | 掲示物から見る児童の傾向と具体的支援　立教大学　教授　大石幸二　氏 |
| 7 | 21 | 教育課程説明会での学びの共有　本校　教諭　佐々木俊介 |
| 8 | 19 | ソーシャルスキルトレーニングについて　八戸市立第二中学校　教諭　佐藤佳子　氏 |
| 9 | 13 | 能動的な聴き方と児童理解　立教大学　教授　大石幸二　氏 |
| 9 | 21 | １人１台端末の活用について①<br>八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井一二三　氏 |
| 11 | 2 | １人１台端末の活用について②　本校　教諭　佐々木俊介 |
| 12 | 7 | Q-U、PPR から見る現状と支援の充実に向けて　立教大学　教授　大石幸二　氏 |

## ６　研究の成果

(1) ４つの視点（学習課題の設定・言語活動・対話・振り返り）を基にした授業づくりを行ったことで、児童自身の「考えたい、解決したい」という強い課題意識のもと、友達や教師、資料と様々な形で関わりながら、学習問題について深く考えさせることができた。これにより、本校の目指す「関わり合いながら深く考える子の育成」に迫ることができた。日常的に授業改善に取り組んだことで、授業づくりに対する教師の意識が向上し、そのことが子どもたちの追究意欲につながり、思考しようとする態度、考えの変容を自覚した振り返りに表れるようになった。

(2) 特別支援的な視点での児童理解に関する研修を重点的に行うことによって、児童理解に基づいた効果的な支援がなされるようになった。

## ７　研究の課題

(1) 児童は意欲をもち課題解決に向かっていたが、自分の考えを書いたり、話したりする技能が十分に身に付いておらず、対話による学びの深まりが難しい傾向が見られた。言語能力を含めた、学習の基盤となる能力の育成を図りながら、主体的に課題に向かう態度を身に付けさせる指導の在り方について検討していく必要がある。

(2) よりよい自分を目指し粘り強く取り組む態度を身に付けさせるため、自分や仲間の成長を認められる振り返りや、体力の向上についての研修を推進していく必要がある。（記入者　佐々木俊介）

南郷小

# 主体的に学び合う児童の育成
## ～話す意欲を高める対話活動を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　乗松　朋博

### １　研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「すすんで学習する子（知）」を掲げ、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指している。また、学校目標を「学び合い、認め合い、高め合う子の育成」とし、学ぶ楽しさや喜びを感じることを通して、基礎学力の定着と主体的に学ぶ力や表現力を身に付けさせることを目標としている。

昨年度まで取り組んできた算数科の授業実践を通して、児童が見通しをもって課題解決に取り組み「わかった」「できそうだ」という学習意欲を引き出す授業づくりの工夫を図ることができた。一方で、問題解決に対して児童に必要感をもたせたり、「自分の考えを伝えたい」「他の考え方を知りたい(聞きたい)」という思いをもたせた交流活動に広げたりすることができなかったという課題が残った。

また、令和３年度のＣＲＴ学力検査の国語科における大領域「話す･聞く」に関する問題の得点率を見ると、全国平均を上回っているものの「書くこと」「読むこと」の領域よりも低く、自分の考えを「分かりやすく」伝える力や「相手が伝えたいことを的確に」聞き取る力が十分に身に付いていないことが分かった。このことについては、教科指導に限らず、日常生活においても本校の大きな課題となっている。

そこで、今年度は、解決したいという意欲をもって主体的に考えを交流する力を育成したいと考え、本主題・副題を設定した。まず、授業の導入から課題設定までの場面において、発問や教材提示等のしかけをしたり、考えや立場の相違を可視化したりするなど、教師の働きかけを工夫することで、問題解決の必要感・切実感をもたせたい。更に、考えを交流する対話的な活動の在り方を工夫することで、児童の話す意欲を喚起したい。このように、児童が自覚的に問いを共有し、考えを伝えたいという意欲や、話して伝える楽しさを実感することで、主体的に学ぶ児童を育成できると考える。

### ２　研究のねらい

児童が興味・関心、見通しをもって主体的に学び、対話的な活動を通して考えを広げたり深めたりするための授業づくりの在り方について、国語科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

学習課題の設定の仕方や話す意欲を喚起する対話活動を工夫することで、主体的・対話的に学び合う児童を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 問題解決的な授業づくりの工夫

ア　導入での働きかけの工夫（発問や活動指示、教材や問題の提示、教材にしかけ等）

イ　立場の表明（立場の相違の可視化・顕在化）

ウ　問いの共有（追究したい、解決したいと思わせる学習課題の設定）

(2) 話す意欲を高めるための対話活動の在り方の工夫

ア　「学び合うための学習ルール」を基本とした話し方や聞き方・話し合い方の習慣化。

イ　学習場面に応じた対話活動の内容や形態の工夫。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・授業の概要 |
|---|---|---|
| ６ | ２９ | 第１回授業研究（３学年）<br>授業者：教諭　工藤　真子<br>単元名　登場人物のへんかに気をつけて読み、感想を書こう<br>「まいごのかぎ」<br>（授業の概要）<br>導入で中心人物りいこの表情をマークで可視化し、表情の変化について発問したことで児童全員が意思表示をでき、課題を共有することができた。また、りいこの気持ちの変化について、３人組で短冊を用いて交流したことが、発言することへの抵抗感を取り除き、話す意欲を高めることにつながった。 |
| ７ | １３ | 第２回授業研究（２学年）<br>授業者：教諭　上柿　拓子<br>単元名　お話を読んで、かんそうを書こう「スイミー」<br>（授業の概要）<br>ばらばらに提示した挿絵を正しく並べ替えたり、吹き出しの内容を考えたりする活動を通して、登場人物の変化に気付くことができた。スイミーの気持ちを一文で表したものを交流する際に、聞く観点を与えたこと、３人組から全体へと形態を広げたことで話す意欲が高まった。 |
| １１ | ９ | 第３回授業研究（５学年）<br>授業者：教諭　久保沢　達哉<br>単元名　資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう<br>「固有種が教えてくれること」<br>（授業の概要）<br>資料を除いた本文のみを音読し、本時で初めて資料を提示したことが効果的であった。ばらばらに提示したことで、資料の必要性を実感し、文章と照応させる活動に意欲的に取り組むことができた。対話活動をする際に、交流のねらいと手順を明確にすることで､児童が目的意識をもって話し合うことができた。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師 |
|---|---|---|
| ４ | ２７ | 特別な支援を要する児童の共通理解のための研修 |
| ５ | ２５ | 出前講座　国語科における授業づくりについての研修　　講師　福田秀貴先生 |
| ６ | １５ | 図工科　描画に関する研修　　講師　川村真弓先生 |
| ８ | １９ | 出前講座　国語科における授業づくりについての研修　　講師　福田秀貴先生 |
| ９ | １４ | 音楽科　器楽の指導に関する研修　　講師　新井山雅行先生 |
| １１ | ２ | 特別支援教育に関する研修(あおぞら学級、わかくさ学級 授業公開) |
| ２ | １５ | 生活科・総合的な学習の年間指導計画についての研修 |

## ６　研究の成果

(1) 導入において、学習課題の設定や提示の仕方を工夫したことにより、思考のズレが生まれ、児童が「考えたい」という意欲をもって生き生きと学習に取り組むことができた。

(2) 個人で考えをもつ際に、赤白帽子やネームプレート、表情マーク、短冊等を活用し、立場や主張を可視化したことで、友達の考えとの共通点や相違点を考えながら安心感をもって活動することができた。

(3) 対話活動のルールを明確にし、ペアや３人組での対話活動の内容や方法を工夫することで、自分の考えを相手に伝えようとする意識が高まり、分かりやすい話し方で表現することができる児童が増えてきた。

## ７　研究の課題

(1) 対話活動において、考えを伝え合って共有することにとどまっていることが多い。相手の話を聞いてつなげる､広げるなど､日常的に話す･聞くスキルの基礎を作る取組を行うことで、考えを深められる児童の育成を目指していきたい。　　（記入者　上柿　拓子）

島守小

# 主体的に学び合う子どもの育成

（３年計画の３年次）

校長　日山　寿康

## １　研究主題について

昨年度は、研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」として研究実践を通して研究を進め、次のような成果が得られた。

① 導入時や終末時などの間接指導にあたる時間を中心に、どの学年でも学習リーダーの指示のもと、一人一台端末を利用する授業に取り組んできた。その結果、一人一人のペースに合わせて習熟の時間を確保することにつながり、基礎・基本の定着が図られた。

② 振り返る場面で、授業中の児童の様子や習熟の時間をもとに振り返る視点を与えて書かせるようにした。その結果、わかったこと、わからなかったことだけではなく、本時の学習を理由づけながら振り返るようになり、次の学習へ向けて意欲を高める児童が見られるようになった。

一方、課題として次のようなことが挙げられた。

① 複式の授業において個人差に対応した学習指導を進めるために、学習リーダー以外の児童にも見通しをもって授業に取り組ませるなど、リーダーの育成とともにリーダー以外の児童の学び方についても共通理解し、取り組んでいく必要がある。

② 深い学びに向けて、児童一人一人の振り返りの内容を充実させるために、つまずきの原因や、見方、考え方の違いを共有していく場が求められる。そのために、複式であっても児童の考えの変化に気づけるような同時間接指導の導入など授業展開の工夫を図る必要がある。

そこで、今年度は昨年度の研究を受け、主体的な学びをより深い次の学びにつなげていくための授業展開の工夫やリーダー学習の進め方、振り返りの生かし方について研究していく。昨年度、間接指導時における学習の進め方や振り返りの観点を「島守スタンダード」という形にまとめた。今年度はこの「島守スタンダード」に則り、発達段階に応じて、単式、複式どちらの学級形態であっても児童が主体的に学習を進める方法を身に付けさせていく。そして、児童が主体的に学習を進めたり、振り返りをしたりする中で教師は考えのよさやつまずきのポイントなどを見とどり､授業展開に組み込んでいく。こうすることで、子どもの学習に対する主体性が育まれると考える。しかし、児童が主体的に学びに取り組んでいくためには、基礎・基本の学力が必要不可欠である。そこで、今年度も一人一台端末を活用し、それぞれの児童の習熟に合わせた確かな学力の定着を目指す。

以上のことから、本主題を設定した。

## ２　研究のねらい

学びを深め、次の学びへと意欲を高めるとともに、基礎・基本を確実に定着させる学習指導のあり方を算数科の授業実践を通して明らかにする。

## ３　研究仮説

学びを深め、次の学びへと意欲を高める「島守スタンダード」に則った効果的な学習の進め方や振り返りの仕方を身に付けさせ、基礎・基本の確実な定着を図る一人一台端末の活用をすることにより、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

## ４　研究内容

(1) 個に応じた基礎・基本の確実な定着を図る学習指導のあり方

ア　学習リーダー、フォロワーの育成

イ　一人一台端末の活用

(2) 学びを深め、次の学びへの意欲を高めるための手立ての工夫
ア　同時間接指導を取り入れた授業展開
イ　問題解決的な学習を進めるための教師のはたらきかけ
ウ　振り返りの内容の充実と活用

## 5　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授業の概要 |
|---|---|---|
| ５ | ２７ | 第１回授業研究<br>第３・４学年　授業者：大山　美江<br>題材名　３学年『１０倍した数、１０でわった数』　４学年『億と兆』 |
| ７ | １３ | 第２回授業研究<br>第２学年　授業者：佐々木　耕造<br>題材名　２学年『１００をこえる数　１０がいくつ』 |
| １０ | ５ | 小学校教育研究会　複式教育研究会発表（第３回授業研究）<br>第３・４学年　授業者：大山　美江<br>題材名　３学年『何倍でしょう』４学年『面積の求め方のくふう』<br>第５・６学年　授業者：田名部　純一<br>題材名　５学年『三角形の面積』６学年『比を使った問題～比の一方の量を求める～』 |
| １１ | １６ | 第４回授業研究<br>第１学年　授業者：須藤　有祐美<br>題材名　１学年『ひきざん（２）』 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ５ | ２５ | 交通安全講話<br>講師　島守駐在所　所長　若林　太一様 |
| ６ | ８ | 特別活動に関する研修<br>講師　島守小学校教頭　髙橋　裕介先生 |
| ８ | ３１ | 一人一台端末活用研修<br>講師　総合教育センター主任指導主事　石井　一二三先生 |

## 6　研究の成果

(1) ３年間の研究成果を「島守スタンダード」にまとめ、振り返りの仕方や授業の進め方について共通理解を図り全校で取り組んだ結果、複式学級、単式学級どちらでも発達段階に応じて学習リーダーを全員が経験することができた。また、振り返りを記入することで自分の学びを客観的に見ようとする習慣が定着してきた。

(2) 同時間接指導を取り入れたことにより、児童が自力で課題に向き合う時間を確保するとともに、教師が子どものつまずきに気づいて個別指導にあたることができたため、どの児童も意欲をもって次の練り合いの活動に関わっていくことができた。

## 7　今後の課題

(1) 課題設定の場面だけではなく、児童が終末時まで問題解決に向けて深く考えていくことができるような手立てや発問、板書の工夫を図る必要がある。

(2) 振り返りを書くことはできるようになっているが、その内容に個人差が出たり、次の授業に生かし切れていなかったりする側面が見られるようになってきた。内容の充実をさらに図るためにも、相手の考えをしっかりと聞き、その考えを解釈し自分の考えと比べることで、相手と自分との相違点や類似点を考えたり、自分の考えの変容を意識したりできるような授業展開の工夫が必要である。

（記入者　須藤　有祐美）

令和４年度

# 中学校

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １ | 第　一 | ８ | 白　銀 | １５ | 北　稜 | ２２ | 東 |
| ２ | 第　二 | ９ | 白銀南 | １６ | 是　川 | ２３ | 中　沢 |
| ３ | 第　三 | １０ | 鮫 | １７ | 三　条 | ２４ | 島　守 |
| ４ | 長　者 | １１ | 南　浜 | １８ | 明　治 | | |
| ５ | 小中野 | １２ | 根　城 | １９ | 市　川 | | |
| ６ | 江　陽 | １３ | 白山台 | ２０ | 豊　崎 | | |
| ７ | 湊 | １４ | 下　長 | ２１ | 大　館 | | |

# 主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成

## ～言語活動の充実を図る工夫を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　佐々木　敏文

### １　研究主題について

昨年度の研究の成果として、次のようなことが挙げられる。

○学び合いや話合い活動の場面を取り入れることで、自ら学ぶ姿勢を育成したり、自分の考えを深めさせたりすることができている。

○振り返りの時間を設けることで、生徒の学習目標への到達状況を把握したり、また、生徒に自らの進歩や課題に気付かせたりすることができている。

○ジョイントスクール全体会を行うことはできていなかったが、共通事項を確認し、「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり」に取り組むことができている。

研究の課題として、次のようなことが挙げられる。

●１人１台端末をペア・グループ活動に効果的に活用し、それを「深い学びを実現する生徒の育成」につなげていきたい。

●生徒が自ら課題を探究し、自分の言葉で表現する力を高める課題設定を工夫していきたい。更に、生徒が自分の変容を感じられる振り返りや評価の在り方を探っていきたい。

●言語活動充実のために、１人１台端末を活用して互いの意見を交換できる学習形態の工夫を行っていきたい。そして、それを対話的な学びの高まりにつなげたい。

一昨年度より設定した研究主題のもと、「主体的・対話的で深い学び」、「言語活動の充実」を目指しての取組を実践してきた。成果も見出せているが、各教科、領域とも２年間の取組から、実践方法に改善や研究継続が必要であると認識している。八戸市の学校教育指導の方針と重点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に一層迫っていくために、今年度も昨年度の研究主題を継続することとした。

身に付けた知識を関連付けながら、より深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることで、「深い学びを実現する生徒の育成」につなげていきたい。

### ２　研究のねらい

言語活動の充実を図りながら、「まとめ振り返る学習」、「協働して課題を解決する学習」を設定し、その実践を通して、生徒の主体的・対話的で深い学びを実現することにつながることを明確にする。

### ３　研究仮説

１人１台端末を活用し、情報収集したものをまとめる活動や互いの意見交換により、コミュニケーション力を高めるような言語活動を充実させることで、物事を多面的・多角的に捉えることができ、深い学びにつなげることができる。

### ４　研究内容

⑴ １人１台端末を活用し、学習したことをまとめたり振り返ったりすることで、次の学習につなげていく工夫をする。

⑵ 生徒同士の協働により、問題解決をする場面の設定を工夫する。

⑶ 知識を相互に関連付けて、理解を深める課題設定の工夫をする。

## ５　研究の経過

⑴ 研究仮設に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等 |
|---|---|---|
| ６ | １～３０ | 授業参観月間①　研究仮設に関わる視点をまとめた「授業参観シート」をもとに授業を参観した。 |
| ８ | ２２ | 第1回授業研究（授業参観月間をもとにした話合い）<br>「授業参観シート」をもとに協議と発表を行った。 |
| １１ | １ | 第2回授業研究（要請訪問）保健体育科研究授業（校内研修⑦）<br>１学年　授業者　阿部隆大　　題材名　球技　バドミントン<br>助言者　八戸市総合教育センター　石井利正先生<br>導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫（発問・しかけ）、１人１台端末を活用する工夫についてを視点とした授業研究を行った。 |
| １１ | ４～３０ | 授業参観月間②　６月と同じ内容で授業を参観した。 |
| １ | １１ | 第3回授業研究（授業参観月間をもとにした話合い）<br>「授業参観シート」をもとに再度協議と発表を行った。 |

⑵　一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ４ | ４ | 校内研修①研究主題と研修計画について<br>研究主題と研究計画について共通理解を図った。また、「観点別評価」と「学習の手引き：学習の仕方」について確認や検討を各教科で行った。 |
| ４ | ５ | 校内研修②教科ごとの経営方針と年間計画作成について |
| ５ | ２５ | 校内研修③一般研修「指導と評価の一体化（総論、各教科）学びに向かう力（主体的に学習に取り組む態度）の育成について」講師　八戸市教育委員会　日向端聖先生 |
| ７ | ２９ | 校内研修④学習指導案作成について・研究の進め方<br>校内研修とのかかわりを意識した学習指導案の作成についての確認を行った。 |
| ８ | ９ | 校内研修⑤一般研修「１人１台端末の活用（Jamboard の授業活用）」<br>講師　八戸市総合教育センター　石井一二三先生 |
| ８ | １９ | JS 研修会　講演「義務教育９年間をつなぐ学校版スクリーニングについて」<br>講師　八戸市スクールソーシャルワーカー　髙野康一氏 |
| ８ | ２２ | 校内研修⑥各教科で行った NRT 分析の共通理解 |
| １ | １１ | 校内研修⑧今年度の振り返りと来年度の校内研修主題について |
| １ | ２５ | 校内研修⑨全体会・領域部会・教科部会 |

## ６　研究の成果

⑴　１人１台端末を活用する研修を通して、調べるだけでなく、「まとめ振り返る学習」や友達と話し合って意見交流するなどの学習方法を知り、工夫することができた。「深い学びを実現する生徒の育成」をする手だてについて授業を行う際に試行錯誤することができた。

⑵　学び合いや話合い活動の場面を多く取り入れることで、生徒同士が「協働して課題を解決する学習」を取り入れ、コミュニケーション能力を高めることができた。

⑶　「生徒の主体性」について意識し、生徒の主体性を高めるにはどのような授業の流れが大切なのか、教師の「しかけ」について工夫した授業を行うことができた。

## ７　研究の課題

⑴　ＪＳ研修会で各校の課題として挙げられた、「個々の思考や小集団での話合い活動では活発に意見交換できるが、集団の場で発表できる力が不足している」という点である。集団が大きくなるにつれてその傾向が強まるため、発表のルール作りや話し方のスキル、考えを表現するための語彙力などの「言語活動の充実を図る工夫」に、更に力を入れていきたい。

⑵　生徒の主体性を高めることを意識した授業を研究し、生徒が自ら課題を探究し、自分の言葉で表現する力を高める課題設定を工夫していきたい。

（記入者　蛭田美奈子）

第二中

# 思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫

## ～特別支援教育の視点を生かして～　（３年計画の１年次）

校長　管　宏

### １　研究主題について

昨年度は、「見通しをもち、主体的に学ぶ生徒の育成」を研究主題、「特別支援教育の視点を生かして」を副題として、全職員が「授業のユニバーサルデザイン」の内容を共通理解し、研修・実践を行った。その結果として、どの教科でも安心して授業に臨み、基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けて取り組ませることができた。また、グループ学習やペア学習等での話合い活動に積極的に取り組ませることで、個々の意見がグループや学級の中で共有され、理解が深まり、課題解決に向けて主体的に学ぶ生徒が育成されるのではないかと考えたが、コロナ禍で話合い活動を自粛せざるを得ない状況であったため、一人一台端末を活用しながら、課題解決に向けて主体的に学ぶ生徒の育成を目指し、研修を進めた。学力調査等の結果から、思考力・判断力・表現力に課題があると思われる。そこで今年度は、生徒自ら考え、得た情報を適切に判断し、説明できるよう、各教科で思考力・判断力・表現力を高めるため、授業デザインの工夫に取組み、研修を進めていきたい。さらに、一人一台端末の活用については道半ばであるため、効果的な活用の仕方をさらに研修していきたいと考え研究主題を設定した。

### ２　研究のねらい

各教科・領域の特性を生かしながら、特別支援教育の視点を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることによって、主体的に学ぼうとする意欲が高まり、思考力・判断力・表現力が高まることにつながることを明らかにする。

### ３　研究仮説

授業における適切な支援を「①見やすい板書・構造化された板書、②ねらいや授業の見通しの明確化、③目で見てわかる手がかりの活用」の三つに絞ることにより、全職員が共有し、実践してきた。これまでの取組を継続して授業の実践研究を続けるとともに、今年度はさらに、生徒自らが探究し、互いの考えを伝え合う活動等を取り入れながら、デジタル教科書や ICT 機器を活用することによって、思考力・判断力・表現力を高めることができる。

### ４　研究内容

(1)　「授業のユニバーサルデザイン」について研修し、具体的な取組について共通理解をする。

(2)　ICT 機器の活用を通した授業実践と、互いの実践について学び合うための授業参観や研究協議を行う。

(3)　生徒理解や授業改善のために、外部講師（八戸学院短期大学野口和也氏）をお招きし、研修する。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授　業　・全　体　会　等 |
|---|---|---|
| ７ | ４～ | 授業参観週間 |
| １０ | １３ | 教育指導課・センター計画訪問 |
| 各学期 | | 思考力、判断力、表現力を高める授業の実践<br>ユニバーサルデザインの授業実践 |
| １１ | １３ | 初任者研修　教科研究授業（保健体育）　授業者　根城将貴教諭<br>「バレーボール」 |
| １ | ２７ | 初任者研修　道徳研究授業　授業者　根城将貴教諭<br>「親友」　〈内容項目 B-（８）友情、信頼〉 |
| ２ | １５ | まとめと次年度の方針 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ４ | ２ | 校内研修　「思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫」の共通理解 |
| ７<br>９<br>９ | ２０<br>６<br>２８ | 校内研修（スクリーニングと生徒理解）<br>「特別支援教育の視点での専門家によるスクリーニングと担当教員への指導・助言」<br>講師：八戸学院大学短期大学部　教授　野口　和也　氏 |
| ８ | ２２ | 校内研修　「特別な支援を必要とする子どもたちへの指導について」<br>講師：佐藤佳子教諭 |
| １０ | １３ | 校内研修　「一人一台端末の活用について」<br>講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏 |

## ６　研究の成果

(1) 授業のユニバーサルデザイン

今年度は、校内研究主題「思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫」～特別支援教育の視点を生かして～の１年次として授業実践に取り組んだ。各教科で思考力・判断力・表現力について確認し、それぞれの力を伸ばすための手立てを考え実践した。また、デジタル教科書、ICT 機器を授業で活用し、授業のユニバーサルデザイン化を工夫した。

(2) 一人一台端末の活用を通した授業実践

出前講座「一人一台端末の活用」ではスプレットシートやジャムボードの活用場面や活用方法を研修した。また、実物投影機やデジタル教科書を合わせて使う方法など、より実践的な活用方法を学び、授業実践に取り組むことができた。さらに、家庭学習としてｅライブラリーを利用したり、様々なアンケートにも使用されたりと、効果的なタブレット活用の可能性が確認できた。

(3) 特別支援教育の視点を生かした生徒理解や授業改善

夏休みの研修では、特別な支援を要する生徒の特性を理解し、授業のユニバーサルデザインにどのようにつなげていくかについて、理解を深めることができた。さらに、八戸学院大学短期大学部の野口先生をお招きし、生徒の授業や学級での様子を参観していただき、今後の指導方法や関わり方について具体的にアドバイスをいただいたことで、生徒理解や授業改善に生かすことができた。

## ７　研究の課題

(1) 各教科で思考力・判断力・表現力とは何か、それぞれの力を高めるための手立てはどのようなものかを考え実践したが、思考力・判断力・表現力を高めるためには、土台となる基礎学力の定着が必要となる。基礎学力の定着を図りつつ、思考力等を高めるための手立てを加えていかなければならないと考えられる。

(2) 今年度、授業配信が日常的に行われるようになってきたが、黒板全面を一度に写すことができないため、授業がスムーズに流れないことがあった。場面の切り替えを円滑に行えるような機器の準備が必要である。また、タブレット端末の家庭への持ち帰りが実施され、生徒にとってタブレットの活用は日常的なものとなっているが、使用・管理の仕方について約束事が徹底されず、家庭や休み時間の使い方や、授業中の使用についてモラルの欠如が見られ、今後の指導方法に課題が残った。

(3) 「ユニバーサルデザイン」の内容から、十分に取り組めなかった内容項目にも力を入れていく必要がある。特別支援教育に対する意識をさらに向上させ、支援を必要とする生徒の困り感に寄り添いながら、授業改善・生徒理解を深めていきたい。さらに、つまずきへの支援を工夫する一方で、理解が早い生徒への知的好奇心を満たす手立ても考えていく必要がある。

（記入者　奥寺美都子）

第三中

# 意欲的に学び、友と高めあう生徒の育成

## ～「共有化」を意識した授業づくりを通して～

（３年計画の３年次）

校長　　前田　篤志

### １　研究主題について

一昨年度より「共有化を意識した授業づくり」を重点施策に掲げて取り組み、コロナ禍において、どのように生徒同士のやりとりをしたり、伝え合ったりする場面を設定するかについて、授業での実践を通し模索してきた。

昨年度の研究の成果からは、一人一台端末を使用して「端末の基本的な操作方法やリモート研修の行い方について知ることができた」という意見が多かった。この研修を通して、授業で一人一台端末を使用する機会が確実に増加した。一方、生徒の意見を共有する場面での使用は限定的であったため、一人一台端末を使用しての意見の共有化について研修を進めることが必要である。

本校生徒は、素直でまじめな生徒が多く、授業での学習態度はおおむね良好である。教師の説明を聞いたり、与えられた課題に取り組んだりするなどの受動的な学習には集中して取り組める生徒が多い反面、自分の意見を話すなど表現することが苦手な生徒も少なくない。

これらの現状を踏まえて、今年度の学校目標を「互いに認め合い高め合う生徒の育成」とし、重点施策を「＜共有化を意識した授業づくり＞友と学ぶ喜びをもって学習に取り組み、将来の目標に向かって努力する生徒」と設定した。自分の考えや分かったことについて仲間と交流する場面を意図的に設定することで、学びが深まるだけでなく、学習内容の一層の定着が期待される。さらには、探求的な学びや諸活動への意欲につなげていきたいと考え、上記主題を設定した。

### ２　研究のねらい

「共有化」を意識した場面を授業に意図的に取り入れる研究を通して、意欲的に学び、友と高め合う生徒の育成を図る。

### ３　研究仮説

(1) これまでの「焦点化・視覚化」の取組を全員で継続することで、「わかった！できた！身についた！」を実感させる授業づくりが進み、生徒一人一人が興味をもって主体的に授業に臨むようになる。

(2) 「共有化」を意識した場面を授業に取り入れることで、学びが深まるとともに学習内容の一層の定着が図られ、さらに探求的な学びへとつなげることができる。

### ４　研究内容

(1) 授業づくりの共通の取組として以下のことを職員間で共通理解する。

ア　本時のねらいを焦点化し、それを黒板の決まった場所に生徒に明示することにより、生徒が学習の見通しをもてるようにする。

イ　課題解決や振り返りの場面において、話合い活動等の「共有化」を意識した活動を取り入れる。

(2) 授業参観月間を設定して教員が互いの授業を公開し合い、「共有化」を有効に取り入れる授業改善を行う。

(3) 教科部会を設定してＮＲＴの結果分析を行い、復習や授業改善を行う。

(4) 一人一台端末を「伝え合う、共有化」の手段として活用できるよう、研修の場を設ける。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等 |
|---|---|---|
| 10 | 4 | 中学校教育研究会（教科）授業公開<br>社会　授業者　教諭　鈴木博　「個人の尊重と日本国憲法」<br>理科　授業者　教諭　佐々木昌彦　「光の世界」<br>音楽　授業者　教諭　佐藤紀子<br>「物語の進行と曲想の変化を関わらせながら聴き味わおう」 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 4 | 4 | 第１回校内研修　兼　特別支援教育推進委員会<br>①　校長から　・指導の優先順位　・ティチャーとコーディネーター<br>・自立と依存　・中学校の役割<br>②　今年度の校内研修の進め方<br>③特別支援教育全体計画（特別支援学級・通級指導・校内体制など）<br>④新年度に向けての情報交換（特別支援生徒・保健関係） |
| 4 | 21 | 第２回校内研修<br>通常学級における、配慮を必要とする生徒についての情報交換 |
| 5 | 19 | 第３回校内研修「一人一台端末を活用して『生徒の意見を共有する方法』」<br>八戸市総合教育センター　石井一二三　主任指導主事<br>一般研修等支援（出前講座） |
| 8 | 18 | 第４回校内研修「New ３観点！主体的に学習に取り組む態度どう評価する？」<br>八戸市立白銀南中学校　教諭　葛西良子　氏 |
| 1 | 11 | 第５回校内研修『情報モラルについて』<br>八戸市総合教育センター　石井一二三　主任指導主事<br>一般研修等支援（出前講座） |

## ６　研究の成果

一人一台端末の活用については、今年度は「生徒の意見を共有する方法」について研修を行った。中学校教育研究会の授業発表においても、それぞれの研究授業で一人一台端末を活用して生徒の意見を共有する場を設定するなど、研修の内容が授業に活かされた。

また研修を通して、教師側の一人一台端末を使用することへの抵抗感が少なくなったことで、端末を利用して授業を組み立てたり、欠席者や不登校傾向の生徒に向けた配信授業が日常的に行われたりと、一人一台端末を授業で使用することが常態化してきた。

## ７　研究の課題

(1) 一人一台端末の不適切な使用や、ネットトラブルなどの課題に対し、１月に行った情報モラルの研修は効果的だった。年度初めの計画から、情報モラルについて扱う場面を設定するなど、学校全体として取り組んでいく必要がある。

(2) ＮＲＴの結果分析から、各教科で学力の二極化が大きいことが課題である。下位層の基礎・基本の定着に向けて、学習意欲を高められるような授業の取組の工夫が必要である。

（記入者　馬渡　史成）

長者中

# 主体的に学び、自己の生き方を探究する生徒の育成

## ～進路や将来設計に結び付く「学ぶ意義」を踏まえた授業づくり～

（３年計画の３年次）

校長　蔦　川　　誠

### １　研究主題について

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等による社会の急速な変化のもと、今を生きる中学生は、これから厳しい挑戦の時代をたくましく生きることが求められている。本校では、変化の激しい時代を生きるために、キャリア教育の視点を生かし、基礎的・汎用的能力の育成を意識することが重要であると考えた。基礎的・汎用的能力の育成が学習意欲の向上及び学習習慣の定着につながり、思考力・判断力・表現力の育成を図ることができると考え、本主題を設定した。

本研究を進めるにあたっては、次の２点を重点項目に掲げた。

１点目は、キャリア教育の視点を授業に生かし、「学ぶ意義」を理解させる取組を行うことである。

(1) 教職員・生徒がともに基礎的・汎用的能力の意識を高める工夫。
　「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」
　「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」
(2) 日常と学習内容を結び付けるなど、受検以外の学ぶ意義を意識させる授業展開。
(3) 自己理解をもとに、生徒それぞれの学ぶ意義を考えさせる場の設定。
(4) 学ぶ意義の理解につながる日常的な自己管理とキャリアプランニングの場の設定。

２点目は、生徒の主体性と対話的な学習及び思考力・判断力・表現力の育成を支援するために、特別支援教育の視点を取り入れることである。

(1) 「焦点化」…「何を学ぶか」を明確化する工夫。
(2) 「視覚化」…「どのように学ぶか」を明確化する工夫。
(3) 「共有化」…「何ができるようになるか」を集団として共有する場面の工夫。

これらを意識した授業づくりの推進は、生徒の授業における「学ぶ意義」の喚起と理解につながった。しかし、授業における「学ぶ意義」の喚起と理解が、学習習慣の定着・向上に結び付いているかは不透明だったため、昨年度は、キャリア教育の視点（学ぶ意義）と特別支援教育の視点（焦点化・視覚化・共有化）に基づく授業改善を継続しつつ、生徒が家庭でも学習を頑張ろうと思える授業の工夫に取り組んだが、生徒の変容はあまり見られなかった。そこで、今年度は、昨年度の取組に加え、授業内容と家庭学習の課題との関連を強めることで、学習意欲の向上を図る。

### ２　研究のねらい

授業を中心とした教育活動にキャリア教育と特別支援教育の視点を取り入れた授業展開を工夫することを、教員が共通理解のもと同一歩調で実践する。それによる生徒一人一人の学習意欲、学習習慣、思考力・判断力・表現力に関する変容を明らかにする。

### ３　研究仮説

授業を中心とした教育活動にキャリア教育と特別支援教育の視点を取り入れ、自己の生き方を意識した「学ぶ意義」を考えさせ、理解させることにより、生徒一人一人が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 研究協議と発表の機会を設けるために、３人１組のグループによる相互公開授業を実施する。
(2) 授業改善と生徒の変容の状況把握をするために、生徒・教員によるアンケートを実施する。
(3) 学習委員会を活用し、課題を生徒自身のものとして、主体的に解決させる活動を取り入れる。
(4) 日常的な自己管理能力を育成するために、生活記録ノート「私のあゆみ」を活用する。
(5) 基礎的・汎用的能力を育成するために、キャリア・パスポートを活用する。
(6) 外部講師を招いての講演会を実施し、「学ぶ意義」について考えさせる機会をつくる。
(7) 授業内容との関連を深く図った家庭学習の課題について教師間での理解を深める。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 授業研究 | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| ４ | ５ | | 全体会（研究の方向性の共通理解）<br>教科・領域部会<br>全体会（具体的な取組の共通理解） |
| ５ | ６<br>９<br>２５ | 授業研究　授業者：庄内 | <br>全体会（指導案作成に関する伝達講習）<br>全体会（NRT 分析） |
| ６ | <br>２４ | <br>授業研究（要請訪問）　授業者：野田頭 | 教科内指導案検討会（国語科） |
| ７ | | | 研修部会（アンケートの集計・分析） |
| ８ | １９<br>２２ | | 全体会（１学期の成果と課題）<br>学年部会（QU 考察） |
| ９ | ２７ | 授業研究　授業者：小山内 | |
| １０ | １７ | 授業研究（初任研）授業者：大久保 | |
| １１ | ４<br>２８ | 教育指導課・総合教育センター計画訪問<br>授業公開　授業者：須藤 | 教科・領域部会（成果と課題） |
| １２ | | | 研修部会（アンケートの集計・分析） |
| １ | １１<br>１９<br>２３<br>２５<br>３０ | <br>授業公開　授業者：作山<br>授業公開　授業者：鈴木<br><br>授業公開　授業者：館 | 学年部会（QU 考察）<br><br><br>全体会（まとめ・次年度に向けて） |
| ２ | <br><br>１６ | 授業公開　授業者：三浦留、慶長、立場、佐々木、三浦直、沼岡、蹴揚<br>授業研究（初任研）　授業者：大久保 | |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容･講師･概要等 |
|---|---|---|
| ５ | １９ | 生徒理解研修 |
| ８ | ２０ | 「１人１台端末」の活用に関する一般研修<br>（講師　八戸市総合教育センター主任指導主事　石井一二三氏） |
| １ | １０ | 消火器の使い方及びアレルギー対応研修 |

## ６　研究の成果

(1) 今年度は、初任者にも配慮しながら、できる限り同じ教科で３人１組を作り、キャリア教育と特別支援教育の視点を生かした授業実践についての相互公開授業を実施した。また、視点表を改良したことで、より生徒の変容に着目した授業参観ができるようになった。

(2) アンケートの実施により、教師の授業改善や生徒の変容の状況を把握できた。

(3) 学習委員会の取組により、「学習の約束」に対する意識が高まった。

(4) 外部講師を招いての講演会は生徒にとってよい刺激になった。

## ７　研究の課題

(1) 早めの計画・実施により効果的な実践研究を進めたいが、行事と日々の業務に追われて教員に余裕がなく、公開授業がどうしても後半に集中してしまう。

(2) 生活記録ノート「私のあゆみ」でタイムマネジメント能力を付けさせる取組を続けているが、教師の意識に温度差があり、指導が徹底されないため、定着しない。来年度も根気強く共通理解を図り、指導を続けていく。また、「私のあゆみ」に掲載した「各教科学習の意義」についても、年度始めに説明しただけでは忘れてしまうため、機会がある度に各教科で話題することを継続する。

(3) 家庭学習習慣は家庭環境とも関連があるため、すぐに身に付くものではないが、授業内容に深く関わる課題を出すことで課題に取り組む必然性をもたせる取組を来年度も継続し、家庭学習習慣の定着につなげたい。

（記入者　立場　里香）

小中野中

# 課題解決に向け、主体的に授業に取り組む生徒の育成

## ～身に付けた知識・技能を生かし、協働的に活動する学習を通して～（３年計画の３年次）

校長　　佐々木　宏恵

### １　研究主題について

本校生徒の実態として、ここ数年「学習意欲・学力の差の拡大」が課題として挙げられたため、言語活動を意識した学び合い、ユニバーサルデザインを意識した板書、家庭学習ノート（こなノート）等の取組を行ってきた。昨年度は、一人一台端末活用研修を生かし、授業でも各教科において場面に応じて端末を使用することで、生徒が主体的に授業に取り組む場面が増え、身に付けた知識を活かして意見を出し合い、協力して調べる、教えあうなど、協働的に活動する場面も見られた。また、自己評価シートや撮影した動画の振り返りなど生徒自身で授業目標に対しての振り返りをすることで、各々の学習に対する意識の高まりも感じた。一方で、受身的で学習に集中できていない生徒や、家庭学習との両立を図れず学習に対して苦手意識をもっている生徒も見られる。放課後等を活用し、学年や教科においてサポートしてきたが「主体的に」という点においてまだ不十分である。以上のことから生徒全員が主体的に学習に取り組めるような授業を目指し、研究や研修を重ね、学年、学校全体で対策をたてる必要がある。

今年度は、課題解決に向けて生徒自身に見通しや目標をもたせることに加え、その活動に対する振り返りをワークシートや端末を活用し、自分自身が学習過程を振り返られるようにすることとした。自らの学びを振り返ることで、身に付けた知識・技能を整理する場を設け、さらには次時への学習目標へとつなげていきたい。学びの継続を意識した家庭学習の在り方を再確認し、朝自習や各教科のコンテストの実施等を行うことで、さらなる学習内容の定着を図りたい。また、生徒が「必要感や切実感をもって」課題解決に向かえるよう、導入から課題設定までの教師の働きかけを工夫し、生徒が主体的に学べる環境を整え、生徒一人一人が生き生きと活動できる授業を確立していきたい。

### ２　研究のねらい

課題解決に向けて、生徒に必要感や切実感をもたせる導入を工夫し、見通しをもたせたり、身に付けた知識・技能を想起させたりするなど、主体的に課題に取り組ませる。また振り返りの場面を設定し、自分自身で学習内容を再確認させることで、生徒のさらなる学習意欲の向上に努める。

### ３　研究仮説

(1) 各教科及び学級活動、総合的な学習の時間において、課題解決のために生徒に目標や見通しをもたせ、自分の言葉でまとめたり、振り返りの場面を設定することで、達成感や成就感を味わい、学習意欲の向上が図られるであろう。

(2) ユニバーサルデザインを意識した板書、ワークシート、端末の利用を工夫し、学びの過程を生徒自身が理解することにより、学習内容の定着及び学力の向上が図れるであろう。

## ４　研究内容

(1)　「わかった・できた・身に付いた」を実感できる授業の工夫（授業力の向上）

ア　主体的に学習課題に向かわせるための工夫

①課題に対して目標をもたせる　興味や関心・見通し・自分と結び付ける。

②自分の言葉で振り返らせる。

(2) ユニバーサルデザインを意識したワークシート・板書・端末活用

ア　ワークシート　思考の仕方・スキルの定着化・家庭学習との連携

イ　板書・端末　　授業のポイントの視覚化

(3) 学校図書館を活用した授業の設定

(4) お互いの指導技術を学ぶ機会の設定

(5) 諸検査の結果を生かす授業の工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授業研究　全体会等 |
|---|---|---|
| 4 | 8 | 第１回校内研究　全体会 研究についての共通理解 |
| 5 | 1 | 授業参観研修（チーム別　～2 月） |
| 8 | 18 | 第２回校内研究 ｈｙｐｅｒ―ＱＵの結果分析、授業の振り返り（グループ別） |
| 9 | 1 | ローテーション道徳（～12 月） |
| 9 | 27 | 教育指導課・総合教育センター学校訪問　第３回校内研究（授業研究）保健体育　授業者　教諭　日向　祐弥 |
| 1 | 6 | 第６回校内研究全体会(伝達講習会・研究実践、成果と課題、次年度の話し合い、Q-U 分析等) |

(2) 一般研修

| | | |
|---|---|---|
| 4 | 25 | 生徒に関する情報交換（生徒指導・健康面など） |
| 7 | 14 | 心のケア研修　講師　八戸学院大学短期大学部　幼児保育学科教授　野口和也　先生 |
| 8 | 18 | 道徳授業研究 |
| 11 | 24 | 第４回校内研究 小６による授業参観及び中学校の授業体験 |
| 12 | 14 | 第５回校内研究（授業研究）道徳　授業者　講師　中嶋　翔大 |

## ６　研究の成果

(1) 各教科において、教師側が課題の提示方法を工夫し授業を行うことで、生徒が見通しをもって主体的に授業に取り組む場面が増えた。

(2)　授業の振り返りを端末等を活用し継続的に取り組ませた結果、生徒自身が学びの過程や成長を確認することができ、次時の学習意欲へつなげることができた。

## ７　研究の課題

(1) 話合い活動が一部の生徒のみになる場合も多く、全体で意見を交換し合い学びを深めることができなかった。教科の特性にかかわらず生徒全員が参加できる体制を整える必要がある。

(2) 個人差があり、身に付けた知識・技能を生かし主体的に授業に臨む生徒と答えを待つ受動的な生徒がいる。個々が課題意識をもち授業に臨めるよう、さらなる授業改善が求められる。

（記入者　土川　真紀子）

江陽中

# 自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成
## ～対話的・協働的活動を通して～

（３年計画の３年次）

校長　富　樫　克　輝

### １　研究主題について

本校では平成 27 年度～ 29 年度まで八戸市学校保健会研究指定校として「ピアサポート活動」に取り組んだ。これは、先生や親には言いづらいことやちょっとした悩みや心配事がある時に、生徒同士という「気がねのない仲間」が相談にのったり、サポートしたりする温かい関係づくりを推進する取組だった。そして、この土壌を足がかりに一昨年度からは、主体的に考え、発言する態度や意識を引き出すために、授業におけるコミュニケーション能力の向上を目指して研究に取り組んできた。グループ活動などの共有場面を効果的に設定することで、自分の考えを積極的に発表しようとする生徒が増えてくると考えて研究を進めてきた。しかし、コロナ禍においては協働作業の場面で制限されることが多く、対話する機会が減り、生徒が互いの学びを共有しながら深い学び合いにもっていく授業形態にすることが難しくなった。話合い活動を通して自分の意見をしっかりと述べること、相手の立場を考え、共感することの大切さを認識し、安心して自分の考えを述べること、仲間の意見を聴き、認め合える集団の形成ができるように、感染対策を取りながらも「ピアサポート活動」の精神に立ち返り、取組を見直していきたい。また、生徒の成長している部分を学力の定着につなげていくためには、授業規律の徹底も大事な要素となってくる。「磨き合い、高め合い、深い意見交換する」ことができるようになるための効果的なＩＣＴの活用も本校の課題である。

以上のことから、コミュニケーション能力の向上による学びの深まりを目指すにあたり、自分の意見が仲間に認められ、更に磨き磨かれる経験を積み重ねることが自信となり、それが共に学び、深め合う態度を強化して、一層の学力の定着・向上につながると考え、研究主題を継続して設定する。

### ２　研究のねらい

「仲間と認め合い、支え合い、高め合う」ピアサポート活動の手法の見直しと学習活動への応用を図り、各教科や各領域において生徒が主体的に自分の考えや意見をもち、共に学び、深め合う学習への意欲を高めるための活動や授業形態などについて実践を通して研究する。

### ３　研究仮説

授業の中で発言の交流、共有場面を効果的に設定することで、「ピアサポート活動」により身に付いた表現力、コミュニケーション能力を発揮できる。その結果、生徒の学習に取り組む姿勢や態度が主体的になり、共に学び、深め合う基本的な学習基盤を身に付けることができる。

### ４　研究内容

(1) 「学習六則」を徹底させる。また、取り組み状況を定期的、継続的に評価し、改善に努める。
(2) 各教科や各領域において、対話的・協働的活動場面を効果的に設定する。
(3) 授業内で、導入から課題設定までの工夫を行う。
(4) 教員間の授業内共通理解項目を設定し、指導技術の向上を図る。（相互参観、ＩＣＴ研修）

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授　業　研　究 | 全　体　会　等 |
|---|---|---|---|
| 4 | 5 | 第１回校内研修<br><br>第２回校内研修 | 今年度の研究についての共通理解<br>研究テーマ及び研修計画について<br>授業配信のポイントの共通理解 |
| 5 | | ＩＣＴ講習 | |
| 6 | | 第３回校内研修<br>相互参観授業 | 指導案の書き方の共通理解 |
| 7 | | 相互参観授業 | |
| 11 | | 相互参観授業 | |
| 2 | | 第６回校内研修 | 研修のまとめ（今年度の成果と課題） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 7 | ２１ | 一般研修等支援「授業の導入から課題設定までの工夫について」<br>八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　福田　秀貴様 |
| 8 | ２２ | 第４回校内研修　PSC 研修(川井範子氏による講話) |
| 12 | | 第５回校内研修　ＩＣＴ講習→職員会議の後などに分けて実施 |

## ６　研究の成果

(1) 学習六則や指導上の共通事項を確認し、１年生では、毎時間、毎日教科担任に授業への取り組み状況を継続的に評価してもらい、改善に努めることができた。PSC 研修では原点に返り、全職員で講話を聞くことにより、授業や行事、日常生活の中での認め合う場面や話し合う場面を意識して設定するようになった。生徒対象の授業アンケート「間違いを気にせずに手をあげたり、意見発表したりできる雰囲気がある。」において昨年度の７７％から８０％に上昇した。また、ＩＣＴ講習は短い時間で分けながら、必要な時に随時行うことができた。

(2) 全校でリーダーの生徒を主体として、PSC 活動を行うことができた。その中で小規模校の強みを生かして、縦の繋がりをもつことができた。地域の方々を交えてのグループでの話合い活動の場で、PSC 活動の取組が発揮されて、生徒のコミュニケーション能力の成長を感じることができた。

## ７　研究の課題

コロナ感染の流行の状況によっては協働作業の場が制限されることが多く、生徒がお互いの知識を共有しながら深い学び合いにもっていく授業形態の設定が難しい時期があった。生徒１人１台端末を使用しての画面内で意見交流をすることで、相手の意見を吸収し、深い学びにつなげていくことを図ったが、１人１台端末の有効な活用法や授業形態については更なる工夫が必要である。

（記入者　小山　牧子）

湊中

# 問題解決的な学習を通しての主体的・対話的で深い学びの研究

## ～まとめ、振り返り場面における評価の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　野田　明広

### １　研究主題について

文部科学省が約 10 年ごとに改訂する「学習指導要領」が昨年度から全面実施され、平成２９年改訂学習指導要領による指導が始まった。新しい学習指導要領では、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力など」「学びに向かう力、人間性など」の三つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育んでいくことを目指し「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を重要視している。

昨年度本校では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、導入段階における課題設定の工夫をテーマとして研究と実践に取り組んできた。生徒の課題意識を高め、自ら考える力や解決しようとする意欲につなげるために教師が導入場面で工夫を凝らし学習課題を設定したことで問題解決的な授業につなげることができた。

本年度は、まとめ・振り返り場面における評価の工夫について研究し、その評価を授業改善及び学習指導に生かしていきたい。

### ２　研究のねらい

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、まとめ・振り返り場面における評価を工夫した授業づくりに取り組むことで、問題解決的な学習の充実を図り、各教科等で目指す生徒の資質・能力の育成を目指す。

### ３　研究仮説

各教科等で、まとめ・振り返り場面の評価について工夫し生徒の振り返りを知れば、自分の授業を見直し生徒への指導に生かすことができる。

### ４　研究内容

(1) 単元で育成を目指す各教科で考える資質・能力を明確化

① 各教科の年間指導計画に単元ごとに 3 観点の評価規準を明記する。

② 各単元で最低 1 時間は問題解決的な授業を行う。

(2) まとめ・振り返り場面における評価の工夫

① 振り返りの観点や評価方法の具体例を提示する。

② まとめ・振り返りの評価の生かし方を探る。

(3) 校内研チェックシートによる教師の自己評価（Plan Do Check Action）

① 月ごとに校内研チェックシートを活用して自己評価を行う。

② 学期に１回、生徒から授業アンケートをとる。

(4) キャリア教育の推進（湊ロード）

① 全校統一で学期ごとに夢・挑戦・感動についてのワークシート（湊ロード）を記入する。

② 学期ごとにワークシートで振り返りをする。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者　等 | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| ４ | ５ | ・今年度にかかわる研究主題の共通理解 | 全体会（共通理解） |
| ４ | ２０ | ・校内研の流れについて | 全体会（共通理解） |
| ７ | １３ | ・指導課訪問に向けて | 全体会（共通理解） |
| ９ | ２８ | ・指導案検討会 | 各教科ごとで話し合い |
| １０ | １１ | ・教育指導課訪問（課題と対策） | 各教科ごとで話し合い |
| １０ | １３ | ・第１回授業研究（理科）要請訪問<br>授業者　教諭　谷地剛朋 | 全体会（共通理解） |
| １ | １６ | ・授業参観週間（～２０日） | 各教科ごと |
| ２ | １ | ・今年度の成果と課題について | 全体会（共通理解） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要　等 |
|---|---|---|
| ５ | １８ | ・講義(まとめ・振り返り場面における評価の工夫について）講師 日向端聖 |
| ７ | １３ | ・NRT 分析/考察 |
| ８ | ２３ | ・小中学校 JS 講演(特別支援教育の視点での授業作り）講師　野口和也 |
| １１ | ２４ | ・講義(e-ライブラリーの活用の仕方について）講師　石井一二三 |

## ６　研究の成果

まとめ・振り返り場面における評価の工夫といっても、はじめはどのように進めていいかよくわからないところがあったが、指導課の先生方の講義を聞いて毎時間であったり単元であったりと様々な場面においての、より具体的な取り組み方を学ぶことができた。生徒に「まとめ」「振り返り」をさせることで生徒の理解度を確認し疑問点を知ることから次の指導に生かすことができた。

## ７　研究の課題

生徒の習熟度をさらに高めていくには家庭学習の定着をはかる必要がある。今年度は e-ライブラリーの活用についても研修できたので、生徒にそれを積極的に活用させたり、自主学習ノートを充実させたりするなどの手立てが必要だ。

（記入者　坂井恵美子）

白銀中

# 主体的に課題を解決する生徒の育成

## ～基礎的・基本的内容の定着に向けて～

（３年計画の１年次）

校長　　高　橋　　健

### １　研究主題について

令和３年度のアンケートより、本校の生徒は、「明るく素直で人懐っこく、授業には意欲的」である。反面、「すぐ諦め学習に対する努力が見られない、家庭学習が定着しない、考えて行動することが苦手、家庭環境が不安定」という面が見られる。そのため、目の前にある課題と向きあい、それを自ら解決していく能力が必要であると考え、上記の研究主題を設定した。これは、本校の教育目標の一つである「向上心にあふれ自ら学ぶ人間」に迫る視点でもある。その主題に迫るために、「気づく・つながる・創り出す」を意識した教育活動を全職員で展開していく。

今年度は、生徒の生活リズムや学習の取り組み方に気づくことで、生徒の実態に合わせて基礎的・基本的な知識及び技能を定着していく。授業では、発問や課題の研究をして、工夫・改善を計測的に実践することで、活用を図る学習に取り組ませたい。そうすることで、主体的に課題に取り組む自信をもたせ、生徒の学力向上及び教師の授業力向上を図っていく。

### ２　研究のねらい

各教科・領域の特性を生かしながら、授業における発問の仕方やICTを活用した課題提示など工夫し、生徒の学びに対する意欲を喚起させる。また、特別支援教育の視点も取り入れた授業を展開し、共通実践を進めていくことで、基礎・基本の定着に繋げていく。

### ３　研究仮説

各教科・学年において、基礎的・基本的な知識及び技能を定着させ、盤石の基礎を築き、その知識を基に、活用を図る学習に取り組ませることで、主体的に課題に取り組む自信をもてると考えられる。

### ４　研究内容

(1)　ア　各教科・領域ごとに、導入における発問の工夫と基礎的・基本的内容の定着に向けての工夫を行い、日々の授業実践を通して検証する。

イ　教科内での教員相互の授業参観（6月・7月・11月、全員参加）の際に、指導案検討や授業研究を通して、指導力の向上に努める。また、教員相互の同僚性を高め、アの方法についての検証を深める。

ウ　授業では、その日学習する課題や目標の可視化を全教員で進めていく。

(2)　研究テーマに沿った内容のアンケートを生徒及び教員に行い、その結果を共有し実践に繋げていく。また、生徒の生活実態についても調べ、学習に向かう生活態度の形成につなげていく。

(3)　一般研修では、授業において一人一台端末を活用していけるよう、それぞれの実践内容を発表し合い、スキルアップを図る。

## ５　研究の経過

(1)　研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 研究内容 | 対象 |
|---|---|---|---|
| ４ | ４ | 校内研修についての共通理解 | 全体会 |
| ５ | １０ | 示範授業に向けての指導案検討 | 教科部会 |
| ５ | ２７ | 校内研に関わるアンケート実施・集計①⇒一人一台端末を利用 | 生徒・教員 |
| ６ | ２ | 初任者研修「示範授業研修」（国・英・数・理・音・美・体・道）<br>◎校内研究テーマに向けての各教科の授業研究（授業参観・1回目） | 教科部会 |
| ７ | ６ | ◎校内研究テーマに向けての各教科の授業研究（授業参観・2回目） | 教科部会 |
| １０ | １３ | 計画訪問・要請訪問に向けての指導案検討 | 教科部会 |
| １１ | ８ | 教育指導課・総合教育センター・こども支援センター中学校訪問<br>◎校内研究テーマに向けての各教科の授業研究（授業参観・3回目） | 教科部会 |
| １１ | ８ | 要請訪問〈研究授業支援〉　1学年　国語　竹内夏子教諭<br>総合教育センター　中村　美穂　主任指導主事 | 全体会 |
| １１ | ２９ | 領域部会（今年度の研究成果と課題） | 領域部会 |
| １１ | ３０ | 教科部会（今年度の研究成果と課題） | 教科部会 |
| １２ | ５ | 校内研に関わるアンケート実施・集計②⇒一人一台端末を利用 | 生徒・教員 |
| １ | ２５ | 本年度の研究のまとめと次年度に向けて | 全体会 |

(2)　一般研修

| 月 | 日 | 内容 |
|---|---|---|
| ５ | ２３ | NRT分析 |
| ８ | １０ | 一人一台端末の活用について　校内勉強会 |

## ６　研究の成果

(1) 各教科の授業参観を行った。示範授業や計画訪問を通して、指導案検討を複数回行うことで、教科への研究を深めることができた。

(2) 授業や各学年における学習コンテストの実施など基礎・基本の定着に力を入れて取り組んだことで、12月のアンケートでは授業の理解に対する項目が向上した。

(3) 授業で実践している一人一台端末の活用の勉強会では、教科だけではなく、朝自習や総合的な活動など、多岐に渡る実践例を報告しあい有意義な時間となった。授業参観のまとめや協議会でも、一人一台端末を活用することができた。

## ７　研究の課題

(1) アンケートを通して、生徒の生活実態について調べたが、学習に向かう態度の形成に繋げていくための具体的な施策をさらに進めていく必要がある。

(2) 同じ教科だけではなく、他の教科での学習の仕方を学び合うことで、生徒一人一人の実態に合わせた学習が進められるよう、学年内での授業参観を進めていきたい。

（記入者　石屋　純子）

白銀南中

# 生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫

## ～必要感をもって問題解決に取り組ませる指導をとおして～

（３年計画の１年次）

校長　沼 上　進 一

### １　研究主題について

本校では昨年度までの３年間「目標をもって、主体的に学ぶ生徒の育成」を校内研究の研究主題とし、課題設定の工夫・振り返りの工夫・キャリア教育の視点との関連を図った授業づくりに取り組んできた。その結果、昨年度の生徒アンケートでは、「その時間の学習目標や、将来どんなことに役立つのかを意識して授業を受けた」、「話合い活動に参加し、積極的に意見を伝え合った」の２つの項目において、４段階評価の３もしくは４を選んだ生徒の割合が全ての学年で概ね 90%に届く値となり、これまでの研究で一定の成果を得られたと考えている。

また、一般研修では、学習指導を支える生徒指導・生徒理解の研修を深めるべく、外部講師を招いた研修を実施した。これらも生徒指導･生徒理解に関する視点を広げる大切な機会となった。

一方で学校評価アンケートの結果から「目標をもち計画的に学習している」ことについては、４段階評価の２または１で回答していた生徒が 20%、教員が 50%という結果であった。これは、生徒にとって、適切な目標設定の仕方とそれを達成するための手立てを学ぶ場面や学びに対する価値や意義を考えたり、学びを振り返ったりする場面が少なかったためではないかと考えられる。

そこで今年度は、生徒が学びに対する「必要感」をもち、「主体的に学習に取り組む」ことにつながる授業づくりを目指し、研究主題を上記のように設定した。また副題は、生徒の興味・関心を喚起できるような課題設定や導入におけるはたらきかけを工夫し、自ら問題を解決しようとする態度につながるよう「必要感」や「問題解決」という文言を取り入れた。生徒にとって「必要感」がある「問題解決」的な学習を授業の核とすることで、生徒の主体性や自己調整力を育むことができるのではないかと考える。

### ２　研究のねらい

問題解決的な学習を取り入れた授業づくりをとおして、生徒に必要感をもたせ、主体的に学ぼうとする意欲や態度を育てる。

### ３　研究仮説

生徒が必要感をもつような課題設定を工夫することや問題解決的な学習を取り入れた授業を行うことで、学びに対する興味・関心を喚起し、生徒の主体的に学ぼうとする態度を育てることができる。

### ４　研究の内容

次に挙げるいずれかの視点に基づき、問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを目指す。

(1) 生徒が自ら問いをもち、課題解決に向かう意欲を喚起するような「必要感」のある課題設定や導入におけるはたらきかけの工夫。

(2) 生徒が自ら課題や問題に向き合い、解決のためによりよい方法を見つけようとする意欲を喚起するような「問題解決」場面の設定。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|
| ４ | ５ | 全体会（研究についての共通理解） |
| ６ | １ | 小中ジョイントスクール推進事業　本校職員による、小学校の授業参観 |
| １０ | ４ | 中教研教科授業公開<br>第２回授業研究　（英語・３学年）　授業者　教諭　葛西　良子<br>（技術・１学年）　授業者　教諭　木村　和光<br>（保体・２学年）　授業者　教諭　大渡　恵子<br>教諭　嶋守健太郎 |
| １１ | ２ | 中教研　領域（視 聴 覚）問題提起者 教諭　木村　和光<br>（キャリア）問題提起者 教諭　川村　　真 |
| １１ | ９ | 小中ジョイントスクール推進事業　小学校職員による、本校の授業参観 |
| １１ | ２５ | 教科部会（今年度の成果と課題） |
| １ | １８ | 全体会（成果と課題、次年度の研究主題について） |

「わかる授業づくりのための５つの視点」のアンケートは月末に実施。

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ４ | ２７ | 配慮を要する生徒に関する情報交換・共通理解 |
| ５ | ２４ | 「１人１台端末に係る研修」講　師　木村　和光　教諭 |
| ７ | ６ | 「『主体的に学習に取り組む態度』どう評価する？」講師　葛西　良子教諭 |
| ７ | ２８ | 学級経営に関する研修「教育相談の視点を活かした学級経営」(QU 分析)<br>講師　こども支援センター　教育相談員　原　　寿　氏 |
| １２ | ７ | 「心のケア研修」講師　八戸学院大学短期大学部　野口　和也　教授 |
| １ | １０ | 学級経営に関する研修「QU 分析を活かした学級への手当ての考察」<br>講師　こども支援センター　教育相談員　原　　寿　氏 |

## ６　研究の成果

(1) 研究主題「生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫」についてアンケートを実施したところ、職員の 70.6%が高評価であった。具体的には、「生徒が興味をもてるような課題提示の仕方や文言の工夫ができた」、「ICT・１人１台端末・視覚的教材の積極的な活用ができた」、「学習の見通しと振り返りの習慣づけができた」、「教え合いや学び合いの時間を設定することで生徒の意欲が向上した」、「場面設定や学習形態を工夫することで活発な活動につながった」、などの回答が挙げられた。

(2) 副題「必要感をもって問題解決に取り組ませる指導をとおして」については、58.8%の職員が高評価であった。「『なぜ～なのか』と理由を考えさせると意見が活発に出た」、「目的・場面・状況を必ず設定して言語活動を行ったことで、主体的な生徒の活動につながった」、などの回答があった。

## ７　研究の課題

主題を受け、各教科において積極的な取組が行われた一方で、授業において「必要感」の捉えについて教員間で共有できていなかったために、具体的な実践まで到達できなかったという反省点もあった。そこで来年度は、授業における「課題設定の工夫」に重点を置いて授業改善に取り組む。生徒が自ら「問い」をもてるような課題設定や、導入部分におけるはたらきかけの工夫を行うことで、生徒の「主体的な学び」の実現を目指すとともに、「支援者」としての教員のあり方についても探究していきたい。

（記入者　関川　昌志）

鮫中

# 生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究
## ～自分の考えを表現する活動を中心として～

（３年計画の２年次）

校長名　　上野　裕治

### １　研究主題について

本校生徒は、「生活をよりよく向上させる意識」、「学ぶ意欲」、「コミュニケーション能力」の低さが課題である。そこで本校では生徒が生活を見直し、学習意欲を高めることができるように、「課題の提出」・「１分前着席」・「授業道具の準備」から成る「学習三原則」を定めており、日頃から教師が声を掛けたり、生徒会や学年プログラム委員会などと連携して達成状況を調べたりしながら、生徒に対し意識づけを図ってきた。また、コミュニケーションの活性化を目指して、各種調査や面談を通じて良好な人間関係づくりに努めるとともに、授業ではグループ活動や対話活動を重点的に取り入れることで、発言しやすい雰囲気づくりを心掛けてきた。特に年間６回の「学級話合い活動」では、自分の意見を表現しようとする生徒が増えてきている。

一方で、特に教科の授業においては自分の考えに自信がもてないことや、考えを伝えるための言語能力が乏しいことから、なかなか意見を表現できない生徒がみられる。さらには基礎・基本の定着が不十分であることから、意見をもつことができない生徒も少なくない。これらの点を改善し、主体的に学ぶ姿勢を育むことが急務である。

そこで、昨年度から３年計画で「自分の考えをもつ」、「自分から表現する」、「互いに深め合う」と段階を設けながら、学びに向かう力を育成する指導の研究を進めることとした。昨年度は授業の導入の工夫や、学び方の指導などの取組を通じて、生徒が授業の中で自分の意見を考え、表現しようとする場面が以前に比べてみられるようになった。

今年度は昨年度までの取組に加え、考えを表現する場面を多く設定することで、生徒全員が考えを「自分から表現する」ことを目指して、実践を行っていきたい。

### ２　研究のねらい

生徒に基礎・基本を定着させるとともに、言語能力の向上を図り、生徒自身の「学びに向かう力」を育成する指導法の確立を目指す。

### ３　研究仮説

授業における導入場面や学習形態の工夫、授業と家庭学習との連携を図る取組を通じて、生徒に基礎・基本を定着させることや、授業などで自分の考えを表現する場を取り入れながら、生徒の言語能力の向上を図ることで、生徒が自信をもって発言したり考えを深め合ったりできるようになり、ひいては主体的に学習に臨むようになるのではないか。

### ４　研究内容

(1) 基礎・基本の定着や考えを表現する場面の設定など、教科の特質に応じた授業改善の推進

(2) 家庭学習の充実につながる「学び方」指導

(3) 特別支援教育の視点や、ＩＣＴの効果的な活用などを土台にした学ぶ環境づくり

(4) 自主的な態度を育てる学級・学年経営の推進

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 5 | 16 | 第１回小・中学校ジョイントスクール推進事業　授業参観研修 |
| 6 | 1 | 教育指導課・センター訪問 |
| 8 | 19 | 第５回校内研（自分の考えを表現する活動の工夫について） |
| 9 | 22 | 第６回校内研（八戸市中学校教育研究会領域等研究協議会について①） |
| 10 | 19 | 第７回校内研（八戸市中学校教育研究会領域等研究協議会について②） |
| 11 | 2 | 中学校教育研究会領域等研究協議会 |
| | 16 | 第８回校内研（授業参観月間について①） |
| | 17 | 授業参観月間（自分の考えを表現する活動、<br>特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり、<br>ICTを効果的に活用した授業づくりについて）（～12／23） |
| | 28 | 第２回小・中学校ジョイントスクール推進事業　授業参観研修 |
| 1 | 18 | 第９回校内研（授業参観月間について②） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 4 | 5 | 第１回校内研（研究主題の共通理解～昨年度までの取組と今年度の方針） |
| | 20 | 第２回校内研（指導案、特別支援の視点を取り入れた授業づくりについて①） |
| 5 | 18 | 第３回校内研（今年度の研究の進め方について①） |
| 6 | 24 | 第４回校内研（今年度の研究の進め方について②） |
| 8 | 19 | 第５回校内研（Chromebookの効果的な活用、三八視聴覚ライブラリーについて） |
| 2 | 15 | 第10回校内研（年間の反省と次年度の研究方針） |

## ６　研究の成果

(1) 学校生活に関する課題を話し合う「学級話合い活動」が、自分の考えをもち、表現することの基盤となっている。今年度は、生徒総会を通じて全校でも話合いを行うことができ、活発な発言が行われた。授業においても教師の働きかけを工夫することにより、生徒が自分の意見を考え、表現しようとする場面が少しずつ増えてきている。

(2) 八戸市中学校教育研究会領域等研究協議会の授業発表を通じて、生徒が意欲的に課題に向き合い、調べたことやそれに対する自分の意見を発表することができた。

## ７　研究の課題

(1) 教科の授業においては、自分の考えを表現できる生徒とそうでない生徒の差が大きい。考えをもち、伝えるためには、その基盤となる知識が必要不可欠である。そのため、考えを表現する活動と並行して、基礎的・基本的事項のより一層の定着を図る方策が必要である。

(2) 昨年度に比べ、授業参観月間への取組の差が教師間で大きかった。全員で学ぶ、研修するという意識の醸成を図っていく必要がある。

（記入者　中野　大輔）

南浜中

# 夢や希望に向かい、主体的に学ぶ生徒の育成

## ～問題発見につながるための導入と個に応じたまとめの工夫～（３年計画の１年次）

校長名　　佐　藤　公　一

### １　研究主題について

本校では校訓に「自主」「協同」を掲げ、主体的に、なおかつ個々の役割や個性を尊重しながら、お互いを高め合える集団づくりに取り組んできた。本校生徒は、小・中学校ともに小規模校で学年を超えて協力し合いながら生活しているため、自然と助け合いの精神が身に付いており、教室内や異学年との人間関係も良好である。授業での教え合いや課題解決に向けた取組など、学びの場面での協調性は高い。

しかし、その反面、ほとんどが小学校からの顔見知りであることから、お互いの能力もよく知り得ており、それが切磋琢磨する気持ちに結びつきにくい要因となっているとも考えられる。

生徒は総じて素直であるが、その素直さゆえに、与えられた仕事に対して責任をもって取り組むことができる傍ら、自主的かつレベルアップした活動や、場に応じた表現については消極的である。そのため、もてる力を発揮しきれていない傾向があり、学習内容の定着も低い。

そこで今年度は、３年計画の１年次と位置づけ、主体的な学びの実践として、授業の導入部に力点を置いた問題解決的な学習と、授業のまとめの段階で「まとめ」または「振り返り」の活動を取り入れることを大きく２本柱とし、つまずきの共有化を図ったり、生徒が自らの課題に気づいたりすることで、自らの学習を調整し、主体的に学ぶ生徒の育成を目指したいと考える。また、継続して「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」の研究を進めることで、よりよい学習環境を実現できると考える。そして、生徒が夢や希望に向かって明確な目標をもち、主体的に学習するための手立てをより具体的に提示することで、生徒一人一人の意欲を高めることをねらいとして本研究主題を設定した。

### ２　研究のねらい

(1) 生徒のもつ疑問や「ズレ」を拾い上げ、ともに学習課題を設定し、問題解決に向かうことが生徒の学習に対する切実感・必要感を強めると考える。また、生徒の疑問を共有することでつまずきの共有化を図ることをねらいとする。

さらには、授業づくりにおいては、教師や生徒によるUDチェックの評価も参考にしなが ら、「様々な指導の工夫や手立て」「個に応じた適切な支援」に重点をおき、進んで学ぶ生徒の育成や基礎学力の向上を目指す。

(2) まとめや振り返りの活動を充実させ、学習者自身が本時のねらいの達成や予習・復習の課を明確にする。学習者自身が振り返ることで学びと評価が一体となり、より主体的な学びが充実する。さらに、指導者が小テストや口頭などで定着度を確認し、個に応じた課題を与えたり、添削指導などを行ったりすることで、生徒はより深く学び、学力向上につなげることを目指す。

### ３　研究仮説

(1) 問題解決的な学習により、自ら疑問を抱き、もちえた仮説が理にかなうかどうか自分で考える過程の中に学習の目的があることに気づくことができる。また、ユニバーサルデザインとキャリア教育の視点も継続して取り入れることで、基礎的・汎用的な能力を高めることにつながり、主体的に学習に取り組むことができる。

(2) まとめの段階で、自分の意見を伝えたり、他人の意見を聞いて自分の意見と比較したりすることで学びが深まるとともに、友人のよさや共に学ぶことのよさに気づくことができ、さらには、課題も明確になる。分からないことに気付くことも大切な学びであり、新たな課題を発見することができれば、自主学習ノートや家庭学習の取組に反映させることができ、次の学習に生きる自己評価となる。また、日常生活とどのように関連するか考えたり、学びの価値や楽しさを実感したりすることにもつながる。

### ４　研究内容

(1) 問題解決的な学習の工夫

生徒が自ら問題を発見し、主体的に問題解決に向かえるよう、授業の導入から課題設定までにおいて教師の働きかけを工夫する。そこで生徒に「ズレ」の問いをもたせることにより、主体的・対話的な学びの実現につなげていく。

流れとしては、問いの意識こそが対話を活性化させ、興味をもつことが学ぶ意欲につながる。また、自分以外の人の意見を聞くことで思考も変容していく。さらに、間違えるとリベンジしたい気持ちにつながり、生徒は自らの知識と経験を駆使して、問題解決に努めようと意欲的に取り組むようになる、ということである。

よって、以上のことを念頭に置きながら、授業の導入部の教師の仕掛けを工夫した授業づくりに取り組みたい。また、学習課題、流れ、まとめについてはユニバーサルデザインの視点を生かして効果的に提示することとする。

(2) まとめの指導の工夫

授業のまとめの段階で、自分の意見を伝えたり、他人の意見を聞き自分の意見と比較したりする機会を設ける。また、学習内容を定着させるために、小テストや振り返りの活動を取り入れる。小テストの解答状況や理解したことを言葉で表すことによって、学習内容のつまずきや定着度を把握する。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 研修予定（学年・授業者・講師等） | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| 4 | １２ | 教科研究主題　共通理解 | 全体会（共通理解） |
| 9 | ２２ | 教育指導課・センター訪問 | 授業参観・協議 |
| １１ | 9 | JS 小学校授業見学(金浜小学校) | 授業参観・研究協議 |
| 2 | ２１ | 今年度研究報告（研修係） | 全体会（成果と課題） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 研修予定内容　(担当等) |
|---|---|---|
| 4 | １３ | 一般研修　「問題発見・解決能力を育成する授業づくり」<br>(八戸市教育委員会教育指導課　福田秀貴 主任指導主事) |
| 5 | １８ | 「命の大切さを学ぶ講話」<br>(県警本部警務部警務課犯罪被害者支援室　心理専門官　冨岡拓身副参事)<br>(県警本部警務部警務課犯罪被害者支援室主任　工藤芙美子巡査部長) |
| 7 | 5 | 「市スポーツ大使ふるさとセミナー」<br>(青森ワッツバスケットボールプレイヤー　野里 惇貴選手) |
| １１ | 1 | 食育講演会「あおもり食命人による調理講座」<br>(八戸プラザホテル取締役 総料理長 須田忠幸さん) |
| １１ | 6 | 創立 70 周年記念教育講演会<br>「命の授業～ドリー夢メーカーと今を生きる～」<br>(講演家　腰塚勇人氏) |
| １１ | ３０ | いのちを育む教育アドバイザー事業「性教育講演会」<br>(西村産婦人科クリニック　梅本実香先生) |
| １２ | １９ | 薬物乱用防止教室「薬の使い方講座」<br>(薬剤師　松山信彦先生) |

## ６　研究の成果

(1) 教師は積極的に生徒たちの気づきやズレなどをすくい上げ、可能な限りではあるが、それらを共有して全体の課題として設定する導入の仕掛けを､授業づくりの柱として取り組んでいる。学習課題が明確化され、課題に対する集中や自分事としての関わりなどの点において向上が見られる。また、これまで学んだ個々の知識が生徒の中でつながり、それが生徒一人一人の問題解決の意欲を喚起・向上させることにつながっている実感がある。

(2) 生徒の学校評価アンケートでは、「授業での学習課題が提示され、まとめや振り返りのある授業」について「そう思う」の A 評価が 50 %、「どちらかといえばそう思う」の B 評価が 30 %で、全体の８割である。

　職員の回答では、A 評価と B 評価を合わせて 100 %であり、授業のほぼ毎時間に、まとめの段階で小テストや振り返りの活動を取り入れ、学んだ内容を再確認している。生徒は自分の言葉で振り返り、自分と他者の意見を比較したり、他者の意見を取り入れたりしながら、学習内容を深めることにつながっている。

## ７　研究の課題

(1) 問題解決型学習の実践では、多くの長所がある一方で課題もある。生徒数が少なく、能力差も大きい中で、学習課題を導き出すにあたり、問題発見能力の高い生徒の発言が全体の課題として取り上げられることが多い。徐々に、自分なりに問題意識をもち、問題解決に向けて取り組める生徒が増えてきた手応えを感じているが、思考の深まりが依然として乏しい。

　また､教師側が課題とめあてを一致させようとすることで発問が狭まってしまうことも多く、仕掛けのバリエーションに苦慮している。成果を実感するには高度な内容でもあり、引き続き研究を重ねていく必要がある。

(2) JS目標学習時間の達成率は１学年75%、２学年29%、３学年10%であり、全校的に学期や学年が進むにつれ減少傾向にある。まとめの活動が、学習の達成感を味わうことや、次時につながる学習意欲と見通しをもつことまでに至っていない。生徒のまとめの活動から成長が見られた生徒を褒めたり、個別の指導を行ったり、効果的な学習方法を具体的にアドバイスしたりするなどして、生徒が学習の調整を図りながら、ねばり強く取り組む力の育成を目指した授業づくりが必要である。

（記入者　小峠佐和子）

根城中

# 主体的に学ぶ生徒の育成

## ～課題設定の工夫と振り返りを通して～

（３年計画の２年次）

校長　　竹　花　和　人

### １　研究主題について

具体的な研究内容を、①問題解決的な授業づくりのための「課題設定」②内言をつなげ、熟考させるための「振り返り」とその活用であるとし、ＩＣＴの活用についても追究することとした。

今年度は、研究目標②を中心に研究し、八戸市中学校教育研究会教科部会の会場校として、国語科と数学科、美術科で校内研究主題に沿った研究授業を行うことで、研究を推進することとした。

### ２　研究のねらい

「しかけ」「思考のズレ」「問題発見」をキーワードに導入や課題設定を工夫した「問題解決的な授業」を実施し、文字言語を用いた適切な「振り返り」とその蓄積、活用によって主体的に学ぶ生徒を育成する。

### ３　研究仮説

教師が「問題解決的な授業」を目指し、授業づくりを行うことによって生徒は興味・関心をもち、自ら学び課題解決に向かうようになる。また、自己の学びについて熟考し、文字言語によって、のちに生かせる振り返りを行うことによって、主体的に学ぶ生徒が育成される。

### ４　研究内容

(1)　「課題設定」の工夫

ア　「思考のズレ」を生み出し、生徒自ら「問題発見」につながるような「しかけ」を工夫し、実践する。

イ　実践したことを教員同士で共有し、互いの取組を振り返り今後の実践に生かす。

(2)　「振り返り」の工夫

ア　「内言」をつなげ、熟考させるための「振り返り」を工夫し、実践する。

イ　ＩＣＴを活用した振り返りについても工夫し、実践する。

(3)　令和４年度八戸市小・中学校教育研究指定校（1 年目）としての取組

ア　安心・安全で「魅力ある学校づくり」における、授業づくり・居場所づくり・絆づくりの視点

・一人一人の特性や様子の見取りと情報共有に応じた指導を目指す。

・導入や課題設定を工夫し、主体的な学びを引き出す授業の実践

イ　特別な配慮を要する生徒への個別支援の視点

・１人１台端末活用による、自己のペースに合わせた課題への取組

・時間割の工夫による、生徒が求める学習活動への参加の保障

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等 |
|---|---|---|
| 10 | 4 | 八戸市中学校教育研究会教科等会場（国語・数学・美術の研究授業）<br>国語授業者：庄内 智子教諭　　指導助言者：佐々木 宏恵 校長（小中野中）<br>数学授業者：向山 裕己教諭　　指導助言者：川村 隆憲 教頭（第一中学校）<br>美術授業者：都谷森 晴教諭　　指導助言者：安田 眞理子 校長（三条中）<br>ＩＣＴを活用し、自分の考えをまとめたり、他の生徒の意見を共有するなど、課題解決の場面で効果的に Chromebook を活用した授業が見られた。数学では学級の到達度や他の生徒の意見を全体で共有したり、授業で発言できなかった生徒のよい考えや疑問点・困り感、理解度等を把握し、見通しをもって、授業改善に挑戦できた。 |
| 11 | 10 | 教育指導課・総合教育センター・こども支援センター訪問<br>生徒から問いを引き出す導入の工夫について、さらに研究が必要であり、それにより、振り返りも生徒にとって、より自分事となり、深まるとの指導助言をいただいた。 |
| 12/1 | 2/28 | 校内授業参観月間　自分の授業を振り返り、新たな指導方法に気づくことができた。 |
| 1 | 10 | 校内研修　今年度の校内研究について、ワークショップ形式による振り返りをとおして、「課題設定の工夫」と「振り返り」について今年度の成果と課題を確認し合った。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容等 |
|---|---|---|
| 5 | 18 | 「Chromebook を活用した振り返りや e‐library の活用等」研修　講師：石井 一二三 主任指導主事（市総合教育センター）　Chromebook を使って、スプレッドシートやスライド、ドキュメント、ジャムボード等を活用した振り返りについて研修を深めた。 |
| 6 | 9 | 講演会「市中体夏季大会で最高のパフォーマンスを発揮するために～ぶれない心の整え方～」講師：夢コーチング RYOMA 塾代表理事　津村 柾広氏（全校生徒と全教職員対象）<br>ルーティンの演習（表情、姿勢、呼吸、言葉、イメージング等）を通してメンタルの整え方について学び、楽しみながら力を発揮する方法について研修を深めた。 |
| 7 | 29 | ①「第１回 アセス（学校環境適応感尺度）の活用について」研修　講師：鈴木 悟 教頭<br>的確な支援のためのアセスメント（見立て）の方法について研修を深めた。<br>②「主体的に学習に取り組む態度の育成とその評価」研修　講師：日向端 聖 副参事（市教委教育指導課）　指導と評価の一体化を目指し、教材や発問でしかけることや生徒の姿を見取ること、日常的に積み重ねることの大切さ等について研修を深めた。 |
| 10 | 26 | 「心のケア研修支援事業」　講師：八戸学院大学短期大学部 幼児保育科 教授 野口 和也氏<br>支援等が必要な生徒の授業参観、参観後の情報交換会の中で、適切な手立てや対応等について指導助言をいただき、研修を深めた。 |
| 1 | 10 | 「第２回 アセス（学校環境適応感尺度）の活用について」研修　講師：鈴木 悟 教頭<br>アセスを活用した支援チャートや具体的なサポートについて研修を深めた。 |

## ６　研究の成果

(1) 振り返りの効果を高めるには、本時のめあてを明確にし、導入の工夫や活動の場」を適切に設定することが有効であることを再確認できた。

(2) 「コーチング」の研修では、講師の津村先生の「明るい表情・笑顔」「プラスの言葉がけ」を体験することで、教師自身の指導を振り返り、生徒にとって意欲をもたせ、主体的な学びを引き出す指導の大切さに気付き、居場所づくりや絆づくりに生かせた。

(3) 「心のケア研修支援事業」では、生徒一人一人の特性や様子の見取り等について、適切な手立てや対応等を具体的に学ぶことができ、授業づくりや個別支援に生かせた。

## ７　研究の課題

(1) 「振り返りの目的」を自己調整学習の視点で再確認して共通理解し、「本時のめあてや学習課題に基づいた振り返りの工夫」等を重視した授業づくりを推進していく必要がある。

(2) 課題提示について、教師から提示するのではなく、生徒がもっと自分事として捉えられるように、生徒から問いを引き出す導入の工夫について、さらに研究していく必要がある。そのことによって、振り返りも生徒にとって、より自分事となり、深まっていく。

（記入者　鎌田　達也）

白山台中

# 主体的に思考・判断・表現する生徒の育成

## ～主体的・対話的な学習につながる評価活動の研究を通して～

（２年計画の２年次）

校長　伊崎　己治

### １　研究主題について

新学習指導要領完全実施により、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められるなか、本校では、昨年度、「主体的に思考・判断・表現する生徒の育成」をテーマに２年間の研究をスタートさせた。昨年度は、対話を通して問いをもち、考えを深め合う学習活動の在り方を模索した。話合いの中から得た気づきを基に思考・判断・表現する学習活動については、一定の成果が得られた。

だが、「生徒自身が課題を見出すしかけの工夫」、「学習用端末の活用のしかた」、「指導と評価の一体化」等に関する有効な手法について、一層の共通理解を図り、教員間で共有できる体制を整えることなどが課題として残った。

今年度は、昨年度の研究を踏まえて、「学習目標に対する評価をどう設定していくか。生徒の主体的に学習に取り組む態度をどう評価していくか。また、評価の結果をどう分析していくか。さらに、次段階の学習課題の与え方や学習活動の設定にどう反映させていくか。」といった点に主眼をおいて、「指導と評価の一体化」について研究を推進した。

### ２　研究のねらい

学習評価、評価結果の分析、それを前提とした学習活動を効果的に連携・循環させて、生徒の学習改善、教師の指導改善を図る。

### ３　研究仮説

学習指導において、目標の達成の度合いを知るための評価を適切に行う。その結果を踏まえて、生徒が自ら問いをもち、他との対話を通して課題を追求する態度を育成するための指導を工夫する。これらを積み重ねることによって生徒の「主体的に思考・判断・表現する力」を高めることができる。

### ４　研究内容

(1) 年間指導計画における長期的な指導と評価の一体化の工夫。
(2) １単位時間の授業、単元指導計画等における短期的な指導と評価の一体化の工夫。
(3) 生徒が問いをもつしかけの工夫。
(4) 「主体的な思考・判断・表現につながる発問・活動指示・教材提示・課題提示」の工夫
(5) 「課題に気づいたり、共有した課題を解決したりするための話合い活動」の設定の工夫。
(6) 「相手を尊重して話し合う態度」、「根拠を明確にした意見の述べ方」等についての共通理解と共通指導、継続的な指導のための学区内小学校との連携
(7) 特別支援教育の視点を踏まえたユニバーサルデザインに基づく授業づくり
(8) ＩＣＴを活用した思考力、発信力、自己表現力の育成

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授業研究（内容） |
|---|---|---|
| 6 | 1 | ・校内研修研究授業（１年国語：要請訪問） |
| 8 | ２９ | ・教育指導課・総合教育センター計画訪問参観授業（教科・領域） |
| 9 | 上旬 | ・授業相互参観週間（教科・領域部会） |
| １１ | 初旬 | ・中堅研前期授業研究　授業者：菰田聖一（理科） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 一般研修（内容） |
|---|---|---|
| 4 | 2 | 校内研修計画についての共通理解（研修主任より） |
| 4 | ２１ | Chromebook の活用法について　（視聴覚担当：木村公昭　教諭） |
| 5 | １８ | 「指導と評価の一体化」について(研修主任より) |
| 6 | 1 | 「指導と評価の一体化」について<br>（総合教育センター主任指導主事中村美穂先生） |
| 8 | 中旬 | 次年度市中教研授業研究発表に向けての準備（国・数・美・特支） |
| 3 | 上旬 | 次年度の校内研修について |

## ６　研究の成果

「主体的・対話的な学習につながる評価活動」の実践的研究の導入として研修主任が研究授業（１年国語）を行い、市総合教育センター主任指導主事 中村美穂先生より指導助言をいただいた。その中で「指導と評価の一体化」についてお話をいただき、「どの資質能力を、どこで評価するのか明確にすること」、「１人１台端末を対比・比較・検討に用いることや協同作業に活用すること」、「問題解決学習にしていくしかけの工夫の必要性」等について認識を深めることができた。それをもとにした日々の研究の集約の場を、教育指導課・総合教育センター計画訪問に設定し、評価を工夫し主体的・対話的な学習の実践を図った授業を展開することができた。

授業における ICT 機器の使用について、授業者がプレゼンテーションソフトを使用して学習活動を進めたり、映像資料を提示したり、生徒同士が意見交換や意見集約に活用したりするなど、その使用が普遍化されてきている。それによって、授業の充実が図られたと言える。

## ７　研究の課題

(1) 前段階の評価結果を分析し、次段階の課題を見つけさせる働きかけを工夫することのさらなる追究。

(2) 生徒の自己評価や相互評価から課題点を見出させ、その解決を図る探究に取り組ませる工夫。

(3) ICT 機器を用いた学習活動の結果を、指導者の学習評価、生徒の自己評価および相互評価に活用する工夫。

(4) 教科部会・領域部会の研究活動時間の確保。また、教科部会・領域部会における単元または指導内容ごとの研究主題に合致した指導の基本形の模索・共有・蓄積、実際の学習指導への反映。

これらの課題解決に向けて、職員一丸となった取り組みを促進していきたい。

（記入者：四戸壮一郎）

# 意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成

## ～生徒が自ら学び考え表現できるための教師のはたらきかけの工夫を通して～

（３年計画の４年次）

校　長　　三　浦　一　純

### １　研究主題について

令和元年度に「意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成～自ら学び考え表現できるための教師のはたらきかけの工夫～」を設定し３年経過したが、新型コロナウイルス感染症の影響により、思うような実践ができていないのが現状である。そのような中、昨年度本校では、研究主題の具現化のため、授業の始めに学習課題(ねらい)を板書等で明示するともに、ねらいに迫るための発問や明確な指示等、導入段階における教師のはたらきかけを意識した授業実践を行った。さらに、学力定着につながる学習活動を設定しその結果を確認する作業を行ったところ、生徒が意欲的に授業に臨み、主体的に活動するようになり、ＮＲＴや国や県が実施する学習状況調査の結果等からも少しずつ効果が表れてきている。

一方、教師のはたらきかけを工夫するためには、ＩＣＴ機器の積極的な活用や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりは必要不可欠であると考える。昨年度本校においてＩＣＴ活用に関する研修会を実施し、各教科においてＩＣＴ機器を用いた授業を実践するとともに、板書やグループ活動の工夫など、特別支援教育の視点を取り入れた授業実践により、教師のはたらきかけの工夫につなげていきたい。

以上のことから、新型コロナウイルス感染症の影響により十分な実践が進まなかったため、引き続き上記の研究主題により取り組むこととし、教師のはたらきかけを工夫することで、生徒が意欲的・主体的・協力的に活動することができるようにするための実践を進めていきたい。

### ２　研究のねらい

生徒が、自ら学び考え表現し、協力して活動できるようにするための効果的な指導として、教師のはたらきかけを工夫をする。これにより、生徒の学習内容の理解が深まるとともに、意見交換や話合いなどを通して「わかった！できた！身についた！」が実感できるようになり、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒が育成できると考える。

### ３　研究仮説

効果的な教師のはたらきかけの工夫をとおした授業において、次の３点を実践することにより、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成ができるものと考える。

(1) 授業の始めに学習課題（ねらい）を、板書等で明示する。
(2) 学習課題(ねらい)が理解されているかを確認するとともに、考えさせるための時間をとる。
(3) 教材教具の精選や学習形態(ＩＣＴ機器の活用など)を工夫した授業実践を行う。

### ４　研究内容

(1) 研究主題に関わる研修を「研修Ａ」、主題以外の研修については「研修Ｂ」として実施する。

①　「研修Ａ」について

ア　研究授業(要請訪問)の実施

授業者　：教諭　三浦　直美　　国語(２年)

イ　授業参観月間の実施（第１回:５～６月、第２回:１０～１１月）

各教科部会で授業を参観し、テーマについての実践を確認する。授業者は参観者からの視点表をもとに、授業を振り返る。教科部会で視点表をまとめ、教科指導に生かす。

②　「研修Ｂ」について

タブレットの活用に関する研修を実施する。各教科で学期１回以上タブレットを使った授業を行う。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく研究授業「研修Ａ」

| 月 | 日 | 内容 | 形態 |
|---|---|---|---|
| ４ | ５（火） | 第１回　校内研修 | 全体会(共通理解) |
| ５～６月 | | 第１回　授業参観月間 | 各教科部会 |
| ５ | ２４(火) | 教育指導課センター(計画)訪問<br>訪問者　教育委員、三八教育事務所、教育指導課、総合教育センター、こども支援センター | 分科会 |
| １０ | １２(火) | 研究授業(要請訪問)<br>２年　授業者　教諭　三浦　直美<br>指導助言　教育指導課　中村　美穂 主任指導主事 | 校内研修(集中授業)<br>リモートによる参観授業<br>研究協議・指導助言は全体会 |
| １０月～１１月 | | 第２回　授業参観月間 | 教科または学年ごと |

(2) 一般研修「研修Ｂ」

| 月 | 日 | 内容 |
|---|---|---|
| ６ | １ | 「一人一台情報端末の活用」<br>講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事<br>内容　①授業での活用事例(スライド・ジャムボード・スブレットシート) ②八戸版 ICT の学びへの活用 |
| ７ | １２ | 「情報モラル研修」<br>講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事<br>内容　① SNS でのなりすまし　②個人情報の取り扱い　③不適切なウェブサイト　④アクセス許可について |

## ６　研究の成果

(1) ５月に行われた教育指導課センター(計画)訪問では、分かる授業を展開するために、①導入段階、②展開段階、③終末段階のいずれかの場面において、「教師のはたらきかけの工夫」を取り入れた授業を行った。明確な指示と発問をすることで、生徒が意欲的に授業に臨んだり、互いの考えを認め合ったり、主体的に活動したりする場面が随所に見られ、学習に効果的であることが分かった。

　１０月に行われた研究授業(要請訪問)では、デジタル教科書を活用し、詩を読んだ後に疑問点や気付いたことを生徒に挙げさせ、全体で確認することで共通理解することができるなど、有効に活用することができた。

(2) ６月に行われた「一人一台端末の活用」では、学校におけるタブレットの有効活用を目指して研修を行った。教師全員が十分に使いこなすことができていないのが現状であり、使い方にはさまざまな方法はあるが、昨年度より多くの教科で１、２学期に１度タブレット端末を使って授業を行うことができた。また、７月に本校生徒と職員を対象に開催された「情報モラル研修」については、情報リテラシーの一つとして、被害にあわないようにすることや、被害を与えないような意識付けを行うことができた。

## ７　研究の課題

(1) 授業において参考となる点や改善点についての意見交換の場となるように、授業を見せ合う期間に幅をもたせた。しかし、新型コロナウィルス感染予防対策や学校行事、研修会などの時期と重なるなど、見せ合う授業の計画が立てづらく予定通りには実施できなかったため、さらに期間に幅をもたせたり、授業参観の仕方を工夫させたりした。

　また、研究授業(要請訪問)の学習課題を設定する場面において、生徒に考えさせた学習課題を教師がまとめていたため、生徒にまとめさせて全体及びグループに分けて考えさせると、より思考が深まると考えられる。

(2) 昨年度に比べ、大型ＴＶやモニターなどの整備が進んでいる。今後も、ＩＣＴ機器が授業の中でどのようにして活用できるのか、効果的な使用方法はあるか等について研究していきたい。また、ＩＣＴ機器のセキュリティやマナーの研修も引き続き進めていきたい。

（記入者　佐藤　孝雄）

北稜中

# 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方

## ～生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の工夫～

（３年計画の３年次）

校長　　豊島　匡生

### １　研究主題について

令和３年度から施行された学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」がうたわれており、「対話的」な学習を通して「深い学び」を実現することが求められている。本校ではそれに向けて、令和元年度までの３年間、「主体的・対話的で深い学び」を主題に掲げて授業改善に取り組んできたが、その成果として、「主体的な学び」「対話的な学び」については、ある程度の成果が得られたものと思われる。しかし、「深い学び」については、まだ不十分な面があると言わざるをえない。

「深い学び」が実現しない要因としては、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を意識した授業づくりができていないことが挙げられる。学習指導要領解説において充実を図るよう配慮することが求められている学習活動等は、いずれも「見方・考え方を働かせること」が前提となっているため、「深い学び」を実現するためには、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を意識した学習場面を設定することが必要である。

以上のことから、令和２年度から「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方」を研究主題とし、副題を「生徒が『見方・考え方』を働かせる学習場面の工夫」として研究を進めてきたが、まだ研究が深まっているとは言えない状況にある。そこで、今年度は最終年度として研究主題を継続し、「深い学び」の実現に主軸をおいた授業づくりを進めていきたいと考える。

### ２　研究のねらい

生徒が主体的に参加する対話的な学習場面の中に、生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学習場面を効果的に設定することを通して、深い学びを実現する。

### ３　研究仮説

各教科・領域において、生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学習場面を設定することにより、深い学びを実現できる。

### ４　研究内容

(1) 生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の設定の工夫
(2) 生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面を意識した指導計画の工夫
(3) 生徒が自ら課題を発見できるような問題提示の工夫
(4) 授業の流れと到達目標を明確にした授業の工夫
(5) 授業アンケート結果を踏まえた指導法の改善

## 5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 内　　容 | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| 6 | 1~10 | 第１回授業研究(授業参観週間) | |
| | 1~10 | | 授業内容検討会（教科部会） |
| 6 | 6~10 | | 指導案検討会（第２回授業研究） |
| 6 / 7 | 27~1 | 授業アンケートの実施① | |
| 7 | 8 | 第２回授業研究（要請訪問）<br>中教研（特別活動・キャリア）の発表に向けて | |
| 9 | 5~8 | | 指導案検討会（第４回授業研究） |
| １０ | 5 | 第３回授業研究<br>（教育指導課・センター訪問）<br>第４回授業研究（要請訪問）<br>中教研（特別活動・キャリア）の発表に向けて | |
| | １１ | | 指導案検討会 （第５回授業研究） |
| １１<br><br>11/12 | 2<br>28~30<br>24~2 | 第５回授業研究<br>（中教研特別活動・キャリア発表）<br>授業アンケートの実施②<br>第６回授業研究（授業参観週間） | |
| 2 | 1~3 | 授業アンケートの実施③(3学年) | |
| 3 | 1~3 | 授業アンケートの実施④(1、2学年) | |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 8 | 1~12 | 授業アンケートの分析・考察①<br>１学期の取組の反省と年間計画の見直し |
| 8 | １９ | 若手職員研修会（要請訪問） |
| 1 | １９ | 授業アンケートの分析・考察②<br>２学期の取り組みの反省と年間計画の見直し |
| 2 | １５ | 授業アンケートの分析・考察③　３学年のみ<br>今年度の反省と来年度の研究の方針についての話合い |
| 3 | １５ | 授業アンケートの分析・考察④　１、２学年<br>今年度の研修のまとめ |

## 6　研究の成果

(1) 中教研の発表校となったことで、全校体制での特別活動、キャリア教育に対する取り組みが活性化した。また、発表に向けた２度の要請訪問により、特別活動・キャリア教育のとらえ方や指導の進め方において、研さんを積むことができた。

(2) 若手研修会を実施したことで、教育の最新動向の知識を得るとともに、若手の業務の進め方などについて意見交流をすることができた。

## 7　研究の課題

(1) 本研究主題の３年目の最終年度であったが、研究は特別活動、キャリアの発表が中心となった。各教科における「見方・考え方」を働かせる学習場面の設定は、主体的・対話的で深い学びの実現のために非常に重要な課題であり、来年度以降も継続して研修を進めていく必要がある。　　（記入者　　接待　裕行）

# 基礎・基本の定着（確かな学力）を目指した授業づくり

## ～特別支援教育の視点を取り入れた学習指導の工夫～（３年計画の３年次）

校長　鎌田　康由

### １　研究主題について

本校が抱える課題として、基礎・基本が身に付いていない低学力の生徒が一定数おり、学力の二極化が進んでいること、発達障害やそれに類した特性を示す生徒が年々増加していること、苦しいことや辛いことへの耐性が弱く、頑張りがきかない生徒が少なくないことなどが挙げられる。

本校の学校目標は「夢と志をもち、未来に向かって学び続ける生徒の育成」である。それを具現化するための重点施策の１つとして、ひとりひとりの生徒が「授業がわかる、楽しい」と実感でき、自分から学習に取り組むことができる授業づくりを掲げている。全ての生徒に学ぶ喜びを感じさせ、確かな学力を身に付けさせるためにも、特別支援教育の視点に立った深い生徒理解と、日頃の授業における「授業のユニバーサルデザイン」の実践が必要不可欠であると考える。

そこで、今年度も昨年度に引き続き、「基礎・基本の定着（確かな学力）を目指した授業づくり」～特別支援教育の視点を取り入れた学習指導の工夫～を本校の研究主題として設定した。

特に今年度は、３年計画の３年次として「授業のユニバーサルデザイン」の中でも、昨年度までの取り組みである「学習の流れ、めあての提示」・「視覚的・具体的な指示や説明の工夫」に加え、「参加意欲を高める工夫」に重点的に取り組みたいと考える。そのためにも、授業の導入から課題設定までにおいて、問いをもつようにしかけたり、考えや立場の相違を可視化し、問いを共有できるよう教師のはたらきかけを工夫し、生徒が必要感や切実感をもって問題解決に向かえるようにしたい。また、それらの過程において一人一台端末がどう有効活用できるかも研究したい。

### ２　研究のねらい

基礎・基本の定着（確かな学力）を目指すために、特別支援教育の視点を取り入れた学習指導と授業の導入から課題設定までの教師のはたらきかけの工夫をすることによって、全ての生徒が学ぶ喜びや楽しさを感じて意欲的に学習し、学力の向上につながることを明らかにする。

### ３　研究仮説

特別支援教育の視点を取り入れた授業の実践と、授業の導入から課題設定までの教師のはたらきかけを工夫することで、全ての生徒が意欲的に授業に参加し、基礎・基本の知識や技能の習得が図られ、主体的に学習する生徒を育成することができる。

### ４　研究内容

(1)　「授業のユニバーサルデザイン」による分かる授業づくり

ア　授業構成の工夫

イ　つまずき防止、解消の工夫

ウ　学習の流れ、めあての提示

エ　参加意欲を高める工夫

オ　視覚的・具体的な指示や説明の工夫

カ　肯定的な評価

(2)　授業の導入から課題設定までの教師のはたらきかけの工夫

(3)　１人１台端末の有効活用

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等 |
|---|---|---|
| 5 | 26 | 第１回授業参観週間(~6/10)<br>　全教員が授業参観シートを準備し、授業を公開。お互いに授業を参観し合い、参観後は感想等を授業参観シートに記入して提出。 |
| 9 | 21 | 教育指導課訪問 |
| 11 | 2 | 中教研道徳公開授業（オンライン・録画）<br>・２学年道徳　授業者：坂本智子、題材名：「むこう岸には」<br>・３学年道徳　授業者：大坂　崇、題材名：「ぼくの物語あなたの物語」 |
| 11 | 7 | 第２回授業参観週間(~11/22)<br>　全教員が授業参観シートを準備し、授業を公開。お互いに授業を参観し合い、参観後は感想等を授業参観シートに記入して提出。 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 8 | 3 | 1人１台端末の効果的な活用について<br>講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　先生<br>内容：１人１人の考えを共有する方法 |
| 8 | 17 | 道徳における指導法について<br>講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　大野　勉　先生<br>内容：効果的な発問の在り方について |
| 11 | 21 | 小・中学校ジョイントスクール推進事業　中学校の授業の参観、全体会、分科会 |

## ６　研究の成果

(1) 授業参観週間を設け、先生方が互いに授業を参観することによって、授業力向上に役立った。特に、特別支援教育の視点を取り入れること、授業の導入から課題設定までの教師の働きかけの工夫をすることに重点を置いて取り組むことで、学習課題に対する生徒の興味・関心の喚起につながった。

(2) １人１台端末の活用の機会を増やすことによって、生徒の端末を操作するスキルが向上するとともに、表現活動に個々の創造性を発揮できるようになった。また、作業の合理化・効率化が図られた。

## ７　研究の課題

(1) 学習に対して受け身の生徒が多いため、自主性や積極性を高めるための働きかけをこれからも継続していく必要がある。生徒が主体的に学びたくなる課題設定の在り方を研究していきたい。

(2) 特別な支援を要する生徒が多く、基礎基本を定着させるのが精いっぱいである。特別支援教育の視点を取り入れた授業を継続しつつも、自分で調べて考えて、課題を解決する力をつけるために、問題解決的な学習をどう取り入れていくかについても研究していきたい。

（記入者　増田　美保子）

三条中

# 自分を律し、課題に向き合う生徒の育成

## ～探究的な学習活動を通して～

（２年計画の１年次）

校長　安田　眞理子

### １　研究主題について

令和三年度より完全実施された中学校の新学習指導要領では、観点別学習状況の評価における観点が従来の四つから三つになり、その一つとして「主体的に学習に取り組む態度」が登場した。強調されているのは「自ら学習を調整しようとする態度」と「粘り強く学習に取り組む態度」である。

昨年度までの二年間は「自ら課題を見付け、主体的に取り組む生徒の育成」を目標に掲げ、「課題を見付ける力」や「主体性の育成」を目指してきたが、本校生徒は、与えられた課題には取り組むものの「自己管理力」や「課題に向き合う粘り強さ」に欠け、学力の二極化が浮き彫りとなった。

また、改訂の方向性の一つである「カリキュラム・マネジメント」については、「探究」を核として取り組んできたが、未だに教師主導型の課題設定場面が見受けられる。生徒の学習アンケートからも、授業中の反応、発言、質問が少ないといった積極性の低さが課題としてあげられ、学習内容が習得できていないことへの不安感や危機感をもつ自己効力感の低い生徒が増加傾向にあるという実態も浮かび上がってきた。

そこで、今年度は、“学習サイクルを自律により、主体的学びを促す”ために、生徒の実態や発達段階に応じた学習方法・スキルを丁寧に指導し、「やれそうだ」といった課題に対する見方や「分かりたい」といった欲求の側面、やる気が喚起される感情の側面など、動機付けの諸側面を踏まえた学習指導の研究をし、指導力の向上に努めたいと考え本研究主題と副題を設定した。「知・徳・体の調和が取れ、夢や目標に向かってチャレンジする生徒の育成」という学校目標の達成に向け、生徒には学ぶことの意義や進歩・発展することの意味を改めて問いながら取り組んでいきたい。

### ２　研究のねらい

自ら課題に向き合う生徒を育てるために、一人一人の実態を踏まえ、「学び方」を指導する。探究的な学習を行い、指導法や導入の工夫等をすることによって、授業改善を目指す。

### ３　研究仮説

生徒一人一人が「学び方」が分かり、探究心をもって課題を設定することにより、主体的に課題解決に向き合うことができる。

### ４　研究内容

(1) 探究的な学習活動の工夫
(2) 探究意欲を向上させる手立ての工夫
(3) 学び方の指導

## 5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・授業の概要 等 |
|---|---|---|
| 5 | 18 | 授業研究（計画訪問） |
| 6 | 2 | 小・中ジョイントスクール推進事業:公開授業（三条中） |
| 7 | 7 | 授業研究（要請訪問）１学年　総合的な学習の時間「防災教育」<br>授業者　教諭　夏坂　勝 |
| 11 | 14 | 授業研究　　１学年　数学「緊急地震速報（比例の利用）」<br>授業者　教諭　石岡　めぐみ |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要　等 |
|---|---|---|
| 5 | 13 | 校内研「指導と評価の一体化について」<br>講師　日向端　聖　副参事（教育指導課） |
| 7 | 1 | 校内研「通常学級における特別な配慮を要する子への手立て」<br>講師　三浦　祐子　指導主事（こども支援センター） |
| 8 | 19 | 校内研　「話し方・聞き方」に関する生徒アンケートの分析・考察① |
| 10 | 14 | 校内研　防災訓練・安全教育に関して研修<br>講師　教諭　夏坂　勝 |
| 1 | 18 | 校内研　学齢期における聴覚障害児の言語指導について<br>講師　及川　絵美子　言語聴覚士（みずかわ耳鼻咽喉科医院） |
| 1 | 19 | 校内研　「話し方・聞き方」に関する生徒アンケートの分析・考察② |
| 2 | 15 | 校内研　今年度の成果と課題、来年度の校内研究に向けて |
| 3 | 15 | 校内研　「話し方・聞き方」に関する生徒アンケートの分析・考察③ |

## 6　研究の成果

(1) 探究的な学習活動を全教員が意識しながら、生徒の実態に応じた学び方を指導した結果、主体的に課題に向き合おうとする生徒が増えた。今年度は「情報モラル」「大島理森氏～これからの社会と利他の心」「東北フリーブレイズ講演会」「いのちを育む教育アドバイザー講演会」「腰塚勇人氏～命の授業」「看護の出前授業」「防災教育」等、外部講師の講話を多く聞かせることで積極的に地域社会に参画しようとする態度を養うことができた。

(2) 「三条中生の『話し方・聞き方』」については、ジョイントスクール推進事業で小学校と連携しながら進めている。生徒のアンケート結果をもとに学期ごとに課題を明らかにし、教室掲示することで授業に取り組む姿勢が少しずつ改善の方向にある。

(3) スコラ手帳の活用により、自己管理能力を身に付けることができた生徒が増えた。自己肯定感が育まれることで自己効力感が保たれ、学びに向かおうとする姿勢が身に付いた。

## 7　研究の課題

(1) 「自己管理力」や「課題に向き合う粘り強さ」を伸ばしきれない生徒も多く、学力の二極化が課題として残る。自律的な学習を促すために、家庭学習の習慣を身に付けさせる更なる手立てを考える必要がある。

(2) 総合的な学習の時間や各教科で横断的に「防災教育」に取り組んだが、今年度の取組を継続し、地域社会の連携を強化させることが大切である。他者を尊重し、集団を意識して行動する力、社会における自己の生き方をさらに考えさせたい。

(3) 中学校教育研究会での研修や各種研究大会で学んだことを、全職員で共有する場面が少なかった。情報共有したり伝達したりする場を計画的に設定したい。　　（記入者　関川　玲子）

明治中

# 「学びに向かう力」の育成

## ～主体的な学びを支える学習場面の工夫～

（３年計画の３年次）

校長　　岩　舘　　昇

### １　研究主題について

自然に恵まれ、歴史ある土地柄で育った本校の生徒は、素直で純朴である。教師の指導に従順であり、生徒同士の人間関係も温かく良好に築かれている。それ故か、物事を批判的に見直したり、自ら課題を見つけ出したりする能力に乏しい面が見られる。また、通常学級にも、授業における学習内容を理解するのに特別な支援を必要とする生徒が複数おり、学力の開きも見られる。

学力差を改善するために、基礎力コンテストの事前事後指導の他、各教科等の授業においては学習形態の工夫や教え合い学習により理解をそろえることや、意見や考えを発表しやすい環境づくりに、全体指導のみならず個別指導にも取り組んできた。しかし、学力診断テスト等の結果に成果が表れていない。丁寧に支援しているつもりであったが、生徒が自ら進んで考えようとする力に歯止めをかけることになったのかもしれないと分析する。

本校では「学びに向かう力」を「自ら進んで考え、工夫して学習を進める力」と捉え、本研究主題のもとに研究を進め、本年度は３年目となる。「考えたい、知りたい、解決したい」と生徒に思わせるよう、授業の導入から課題設定までにおいて教師の働きかけを工夫するとともに、探究的な学習活動となるよう学習場面や方法を工夫し、互いに配慮し合える生徒同士の人間関係を土台として、互いの考えをよく聴き、自分の考えを深め、根拠をもって表現できる生徒の育成を目指したい。

### ２　研究のねらい

生徒が互いの考えをよく聴き、自分の考えを深め、根拠をもって表現できる学習場面を、各教科等の特性を生かして設定することにより、生徒の「学びに向かう力」を育成する。また、教材、学習形態、授業展開を工夫して授業実践を積み重ね、相互授業参観や生徒へのアンケート・教師の授業改善自己チェックシートによる授業改善を図り、研究主題に迫る。

### ３　研究仮説

解決の必要性のある課題を設定すること、明確な到達目標の提示、協働と対話を通して探究的に問題を解決する場面の工夫に取り組むことにより、生徒が自ら進んで考え、工夫して学習を進めることができるようになるとともに、更に学びを深めようという主体的に学びに向かう力が育成されることを、授業実践を通して明らかにする。

### ４　研究内容

(1) 生徒が互いの考えをよく聴き、自分の考えを深め、根拠をもって表現できる学習場面を意図的に設定する。

(2) 相互授業公開の実施を通して、次の内容について協議し、授業改善に努める。
　ア　解決の必要性のある課題設定
　イ　明確な到達目標の提示
　ウ　探究的に問題を解決する場面の工夫

(3) 授業改善チェックシート及び生徒への授業アンケートを定期的に実施し、授業改善に生かす。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年 ・ 授業者 ・ 題材名 ・ 講師 ・ 成果 ・ 授業の概要　等 |
|---|---|---|
| 4 | 4 | 全体会（共通理解）　研究主題・副題 |
| 5 | 25 | 全体会（共通理解）　学習指導案の作り方・様式の確認 |
| 7 | 6 | 計画訪問（国語、社会、理科、音楽、道徳、自立活動）<br>第１回授業研究（要請訪問）<br>１年道徳　授業者　太田也主志　「ひまわり」 |
| | 19 | 第２回授業研究（相互授業公開）<br>２年道徳　授業者　夏坂久美子　「異なり記念日」 |
| 8 | 17 | 全体会（授業改善チェックシート結果の共有と授業改善の方向性の検討）<br>相互授業公開（第２回）の協議 |
| | 30 | 第３回授業研究（相互授業公開）<br>３年道徳　授業者　鳶谷　康司　「二通の手紙」 |
| 9 | 8 | 第４回授業研究（相互授業公開）<br>１年音楽　授業者　沢森真奈美　「夏の思い出」 |
| | 14 | 第５回授業研究（相互授業公開）<br>２年道徳　授業者　須藤　　恵　「むこう岸には」<br>相互授業公開（第５回）の協議 |
| | 21 | 相互授業公開（第３回、第４回）の協議 |
| 11 | 16 | 第６回授業研究（相互授業公開）<br>２年数学　授業者　石沢　正彦　「多角形の内角の和」 |
| | 24 | 相互授業公開（第６回）の協議 |
| 12 | 1 | 第７回授業研究（相互授業公開）<br>３年数学　授業者　髙橋　　昭　「中点連結定理の利用」 |
| 1 | 10 | 相互授業公開（第７回）の協議 |
| | 18 | 全体会（授業改善チェックシート結果の共有と授業改善の方向性の検討） |
| | 31 | 第８回授業研究（相互授業公開）<br>３年道徳　授業者　戸田　恵美　「『リクエスト食』を支える」 |
| 2 | 22 | 相互授業公開（第８回）の協議<br>全体会（今年度の成果と課題、次年度の副題の検討） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内 容 ・ 講 師 ・ 概 要 等 |
|---|---|---|
| 5 | 25 | ＮＲＴ及び知能検査の結果の分析・考察、共通理解 |
| 6 | 2 | 要請訪問　一般研修等支援「問題解決的な授業づくり」　福田秀貴 主任指導主事 |
| | 23 | Ｑ－Ｕ検査の分析・考察と共通理解 |
| 1 | 6 | 小・中ジョイントスクール推進事業講話<br>「『いじめ』『不登校』等の根っこにあるもの」　北山勝則 スクールカウンセラー |

## ６　研究の成果

(1) 話合いや教え合いの活動により相手の考えを聴く態度の向上や、自分の考えを深めようとする様子が見られるようになってきた。生徒の生活アンケートからも同様の結果が得られており、授業が楽しいと感じる傾向が高まった。
(2) 単元の終わりに自分の考えをまとめ、文章や図表で表現させることにより、分かったことを自分なりの文章で表現できるようになってきた。
(3) 相互公開授業では、授業改善チェックシートの中から重点的に取り組む項目を明示することで、参観の観点が明確になり、事後の話合いでも話題が焦点化され、主題に迫る協議となった。

## ７　研究の課題

(1) 授業改善チェックシートの集計結果より、「根拠や理由をつけて話す」指導が難しいと教師が感じていることが分かる。根拠となる資料の与え方や探し方の指導の他、発問の仕方や話合いの深め方の工夫が重要であり、今後も根気強い指導の継続が必要である。
(2) 道徳や総合的な学習の時間の授業をはじめ、諸活動を通して１人１台端末を活用した取組を重ねてきた。今後は、各教科の授業において、生徒への課題のもたせ方を更に工夫し、集中して学習に取り組めるような授業づくりを目指していく必要がある。

（　記入者　髙橋　昭　）

市川中

# 見方・考え方を働かせながら、
# 自分の考えを広げ深める学習指導の在り方

## ～言語活動と振り返りの場の設定の工夫を通して～

（４年計画の３年次）

校長　　老久保　智

### １　研究主題について

本校は、新学習指導要領において、学習内容を学ぶことで「何ができるようになるか」という視点を重視するとともに、「資質・能力」を育むための、各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすのが「見方・考え方」と捉え、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んできた。しかし、一年目は、教育指導課・総合教育センター訪問の縮小実施や校内での研究授業を行うことができず、校内研究のテーマに迫った研究が思うようにできなかったため、４年計画で取り組むことに変更した。昨年度は、教科ごとに「見方・考え方」を働かせやすい学習課題や場面の設定の工夫をして授業を実践し、アンケートにまとめて共有した。今年度は、共有して見つかった課題を、教科部会や他教科のものを参考にしながら工夫改善に努め、課題解決する方法を探る年にしたい。

### ２　研究のねらい

自分の考えを広げ深める学習指導の在り方を、各教科ごとに「見方・考え方」を働かせやすい学習課題や場面をどのように設定していくかを授業で工夫すること、言語活動を取り入れ論理的な思考場面を取り入れること、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を工夫して設けることを通して明らかにする。

### ３　研究仮説

(1) 各教科ごとに「見方・考え方」を働かせやすい学習課題や場面をどのように設定していくかを授業で工夫することと、言語活動を取り入れ論理的な思考場面を設定することで、知識・理解の質を高め資質・能力を育むことができる。

(2) 生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を工夫して設けることで、目標をもって学習に向かう姿勢や多面的、多角的にものごとを捉え考える力を養うことができる。

### ４　研究内容

(1) 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせやすい学習課題を設定した授業を実践する。また、言語活動を取り入れ、論理的な思考場面を設定する。

(2) 授業の中に振り返りの場を設定し、「何ができるようになったか」を明確にし、次への意欲につなげるようにする。教科部会や他教科から得られた振り返りシートなどを参考に活用し、変容を見取る評価の方法を工夫する。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等 |
|---|---|---|
| ５ | ３１ | 第１回授業研究（要請訪問）　３年数学　授業者　佐藤　直樹<br>講師　馬渡　正仁（八戸市教育委員会教育指導課主任指導主事）<br>題材名　１章　式の展開と因数分解　２節　式の計算の利用<br>「Ｓ＝ａℓ」の証明 |
| １１ | １５ | 第２回授業研究（二年次研修）２年社会　授業者　中村　鴻作<br>題材名「欧米の近代化に対して幕府はどのように対応すべきか」 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ５ | １１ | 教育指導課・総合教育センター訪問の指導案の書き方に関する研修 |
| ６ | １ | 観点別評価と５段階評価の整合性に関する研修 |
| ７ | ６ | 指導と評価の一体化<br>振り返り場面を効果的に取り入れた授業づくりに関する研修<br>講師　日向端　聖（八戸市教育委員会教育指導課副参事） |
| ８ | １７ | ＮＲＴの分析（教科部会） |
| ２ | １ | 振り返りシート等の活用方法に関する研修<br>次年度における校内研修研究主題の確認 |

## ６　研究の成果

(1) 授業のねらいに即した言語活動を取り入れることが、以下のことにつながった。

①思考の段階を明確にした言語活動を展開することにより、聞き手にわかりやすく論理的に自分の考えを表現できる生徒が増えた。

(2) 振り返りの場を効果的に取り入れることが、以下のことにつながった。

①自分の考えを話す様子を動画撮影して振り返る機会を設けることで、生徒がより良い表現方法を模索する意欲につながった。

②小テストと振り返りシートを組み合わせて活用することで、理解が不十分だったところを、自らノートを見て復習する生徒が増えた。

③振り返りシートを活用し、教師が適切な見取りや助言をすることで、生徒が自分の学びを客観的に見ることにつなげることができた。

## ７　研究の課題

(1) 「思考を広げ深める」ために、各教科で具体的にどのような取組をするかを明示して授業実践を進める。教科間の見せ合い授業を通して、さらに授業改善に努めていきたい。

(2) 授業の導入から課題設定までの教師の働きかけについて全教員で共通理解し、生徒が必要感をもって問題解決に向かう授業づくりをしていく必要がある。

（記入者　　川村　昌子）

豊崎中

# 確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒の育成

（３年計画の１年次）

校長　　横　濵　由　紀

## １　研究主題について

昨年度の研究成果と課題は以下の通りである。

成果として

・教師が教える場面と生徒が考える場面、まとめる場面の組み立てを工夫することで、生徒の深まりを図ることができた。
・全教員による道徳の授業実践を通し、学び合いの質の向上と生徒が議論し探究するための技能と態度の育成を行うことができた。実践が教科や行事、係活動など他の活動にも活かされた。
・全教員が公開授業を行うことで、お互いの授業を見合うことができ、授業改善に役立った。

課題として

・生徒から出てきた問いで課題を設定するために、生徒の「なぜだろう」を引き出す導入の工夫が必要である。
・指導と評価の一体化を図るために、主体的に取り組む態度の適切な評価のための研修が必要である。
・探究的な学びを推進するために、総合的な時間を柱とする計画の見通しが必要である。

そこで今年度は、①自分の意見を発表する、②見通しをもつ、③将来の夢や志をもつの３本の柱を中心に授業改善に取り組むことにした。

そのために、学校目標を「見通しをもって進んで学び創造する生徒の育成」と設定し、
①見通しと深い学びを創り出す取組～「授業づくり」
②諸活動では話合いを進んで行い、自己有用感をもつ場面を創り出す取組～「絆づくり」
③夢や志の実現に向け自己の未来を創り出す取組～「居場所づくり」
の３つの具体的な施策を掲げ、「発信し、繋げる」というテーマのもと、全職員が力を合わせ、本校の研究主題の達成に迫っていきたい。

## ２　研究のねらい

確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒を育成するため、各教科・領域の特性を踏まえた授業改善を具体的に進め、生徒が主体的に学びに向かうための指導法を研究する。

## ３　研究仮説

(1) 学習課題を明確にし、協働的に学び合う場面を設定することで考えを深めることができる。
(2) 話合い活動を通して、自ら主体的に学ぼうとする意欲や態度を育成できる。
(3) 発問の工夫と見通しをもった授業展開を取り入れ、生徒が「わかった！できた！身についた！」を実感することができる。

## ４　研究内容

(1) 確かな学力を育むために、教師の授業力の向上を図る。
ア　授業の導入や教師の発問を工夫することで生徒の気づきを喚起する。
イ　TO DOリストを活用し、見通しをもった学習展開を心がける。
ウ　ユニバーサルデザインやICTを活用し、わかる授業づくりを推進する。

(2) 話合いを基に一人一人の考え方や意見を繋げ、お互いに「自己有用感」を実感させる。
ア　インプットとアウトプットを積極的に行い、自分の考えを確かなものする。
イ　興味・関心、必要性をもたせる教材の提示を工夫し、生徒の問いや発言を大切にする。
ウ　自力解決の場と対話・交流の場を通して折り合いをつけ、自分の考えを発信させる。

(3) 夢や志の実現に向け、自己の未来を創り出すことができる生徒の育成を図る。
ア　全校道徳やキャリア教育を推進することにより将来の自分像を描き、具体的な目標を抱かせる。
イ　少人数学級のメリットを生かして、一人一人の特性を生かし、全職員で個別指導の充実を図る。
ウ　基礎的な知識・技能を生かし、自ら問題解決に取り組もうという意識を育てる。
以上の実践を実効性のあるものにするために、全員が授業公開し、授業技術の向上を目指す。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者等 | 全体会等 |
|---|---|---|---|
| 12 | 6 | 教科：社会（１学年）　　授業者：工藤　隆敏 | |

| | | |
|---|---|---|
| | | 題材：南アメリカ州～ブラジルの開発と環境保護 |
| 12 | 7 | 教科：保体（全学年）　　授業者：尾崎　元子　　題材：卓球 |
| 12 | 8 | 教科：国語（２学年）　授業者：白戸　栄治<br>題材：形容詞・形容動詞の活用 |
| 12 | 9 | 教科：英語（１学年）　　授業者：丸屋　百合奈<br>題材：L5 Discover Japan～ 過去形の導入 |
| 12 | 14 | 教科：英語（２学年）　　授業者：江戸　誠一郎　　題材：L6　Tea from China |
| 12 | 15 | 教科：理科（１学年）　　授業者：大嶋　知子<br>題材：力の大きさとばねの伸びの関係 |
| 12 | 19 | 教科：数学（２学年）　　授業者：伊藤　広哉<br>題材：図形の調べ方～多角形の角（へこみのある図形） |
| | | 教科：音楽（全学年）　　授業者：沢口　美津子　　題材：歌合戦リハーサル |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 4 | 13 | 第１回校内研修　・指導案検討会 |
| 5 | 25 | 第２回校内研修　・NRT の分析　・計画訪問の授業の振り返りと今後の指導 |
| 7 | 6 | 要請一般研修<br>・1人１台端末時代の情報セキュリティ＆モラル<br>講師：総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏 |
| | 9 | 教育研究指定事業～特別支援教育に関する研修～<br>講師：山形大学教職大学院　特別支援教育分野教授　三浦　光哉　氏<br>演題：中学校における発達障害等の理解と対応<br>保護者講演会：思春期の子供との向き合い方～保護者が今すべきこと～ |
| 7～8月 | | 中学校教育課程研修集会への参加（オンライン） |
| 8 | 4 | 小中JSにて教育講演会<br>講師：八戸警察署　生活安全課　課長　小山内　信也　氏<br>講義：「児童生徒に関わるネットトラブルの実際」<br>演習：「ネットトラブルへの対応について」 |
| 9 | 21 | 要請一般研修　・問題解決的な学習を取り入れた授業づくり<br>～導入から課題設定まではどうあればよいか～<br>講師：八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　福田　秀貴　氏 |
| 10 | 5 | 要請一般研修　・生徒一人一人のために～発達障害等の理解と支援～<br>講師：こども支援センター　指導主事　川野輪　美穂　氏 |
| 11 | 22 | 校内研修　・学びの地図を作ろう～学校ビジョンについて～<br>～学校は職員・生徒・保護者・地域でできている（SWOT分析）～ |

## ６　研究の成果

(1) 「発信し、繋げる」をキーワードに、全教員が道徳の授業と教科の公開授業を実施することにより、教師間の指導力の向上と授業改善が見られた。
(2) 自力解決と対話交流の場やTO DOリストの活用により、生徒たちの学び合いと気づきを大切し、お互いの自己有用感を高め、見通しをもちながら校内行事や探究学習に取り組んだ。
(3) 導入や発問の工夫、課題設定の工夫、ICTの活用等により、生徒は「わかった、できた、身についた」を実感し、主体的に学習に取り組むようになった。

## ７　研究の課題

(1) １人１台端末時代において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を図るために、クロームブックの効果的な活用法について研修を深める必要がある。
(2) 個別の学習支援が必要な生徒に対して、全職員で個々の生徒の特性を生かして、段階的に支援体制を築き、基礎的な知識・技能を習得させる必要がある。
(3) 将来の夢や志の実現に向けて、生徒たちが目標を抱き、具体的に行動しようという意識を高めるために、３年間を見通したキャリア教育の実践が必要がある。

（記入者　　江戸　誠一郎）

大館中

# 主体的に学習に取り組む生徒の育成

## ～　協働的に学ぶ場面の工夫を通して　～

（３年計画の２年次）

校長　　木　村　政　和

### １　研究主題について

本校の学校目標である、「お互いの良さを認め、高め合う生徒」に迫るため、上記の研究主題を設定した。

昨年度は『主体的に学習に取り組む生徒の育成』を研究主題、「生徒の学習改善につながる評価の工夫」を副題として取り組んだ。目標やねらいと学習活動の整合性を図り、生徒自らが学習改善に取り組めるような評価場面を意図的に設定することで、本校の研究テーマである「主体的に学ぶ生徒の育成」を目指した。学年末の生徒授業評価アンケートから、個人の学習改善や技能向上に最も参考になると生徒が感じたのは、授業において周囲の仲間から受ける指摘やアドバイスであることが分かった。

このことから今年度は、授業での「協働的に学ぶ場面の工夫」を通して、「主体的に学習に取り組む生徒の育成」を目指す。授業目標や個人の課題を達成させる過程に協働的に学習する場面を設定することを通して、仲間の指摘やアドバイスを参考にしながら、目標を自分ごととしてとらえたり、自己の学習方法を工夫・改善したりするなど学習意欲が高まることにより、全生徒が、主体的に学習に取り組むことの楽しさや、「わかった、できた、身についた」を実感できると考える。また、その中で仲間の良さに気づいたり、自分の成長をサポートする仲間に感謝したりすることを通して、学校目標「お互いの良さを認め、高め合う生徒」の具現化に迫るべく研究を進めていきたい。

### ２　研究のねらい

生徒の学習意欲や学習方法の改善をねらいとする協働的な学びの場面の工夫により、主体的に学習に取り組む生徒を育てる。

### ３　研究仮説

(1) 授業の目標や学習活動のねらいを明確に示し、グループでの解決が必要とされる課題の設定や、個人の課題解決のために生徒同士で試行錯誤させる場面を意図的に設定することで、生徒の主体的に学習に取り組む力を高めることができると考える。

(2) 各教科においての評価結果や振り返りを通して、自分の成長や身についた力を自覚し、その過程でどのような学習や態度が必要であったかに気づくことによって、自己の学習に対する自信や意欲の高揚、理解の深化につながると考える。

### ４　研究内容

(1) 年間指導計画・単元指導計画を参照し、「本単元を通してどのような力をつけさせるのか」という単元の最終目標と、そのために「本時ではどのような方法で、どのような力をつけさせるのか」という本時の目標及び各学習活動のねらいのつながりを授業で生徒に伝える。

(2) 生徒から「問い」や「思い」を引き出し、学習課題を「自分ごと」として捉えられるよう、資料や課題の提示の仕方を工夫する。技能教科や知識・技能を身に付ける場合でも発問を工夫し、生徒が主体的に学習に取り組めるような課題を提示する。【八戸市の重点内容】

(3) 学習課題と学習内容の整合性を図りながら、生徒同士が協働的に解決しなければならない課題を意図的に提示したり、生徒同士の相互評価の場面を設定する。【校内研の重点内容】

(4) 教師の見取りや生徒が協働的に学ぶことを通して気づいたことや、生徒が(3)で体感したことが生かされるよう、同じまたは類似した学習課題・学習内容・活動場面を繰返し設定し、学習課程の構造化を図る。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等 |
|---|---|---|
| ４ | ５ | 第１回校内研　　概　要：協働的に学ぶ場面の工夫についての研究 |
| ４ | ２７ | 第２回校内研　　概　要：研修計画・研究主題・研修方法の共通理解 |
| ５ | ９～ | 第３回校内研（～ 6/27）<br>概　要：自由参観授業（参観者からのフィードバックシートによる振り返り） |
| ７ | １５ | １学期授業評価アンケート実施（全校生徒） |
| ８ | １７ | 第４回校内研　　概　要：指導案の書き方等の共通理解 |
| １０ | １２ | ①教育指導課・総合教育センター訪問<br>概　要：授業後の指導主事との教科別協議会 |
| １１ | １～ | 第５回校内研（～ 11/16）<br>概　要：自由参観授業（参観者からのフィードバックシートによる振り返り） |
| １２ | １６ | ２学期授業評価アンケート |
| １ | １６～ | 第７回 校内研（～ 2/21）<br>概　要：自由参観授業（参観者からのフィードバックシートによる振り返り） |
| ２ | ２１ | 第８回校内研<br>概　要：全体会（成果と課題、授業評価アンケート集計結果について） |
| ２ | ２７ | 学年末授業評価アンケート |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ６ | ８ | 特別校内研　「My Rules ～私の授業のルール～」(教頭)<br>・グループディスカッションを通した相互授業理解　　・研修部通信発行 |
| １０ | １２ | 要請訪問（出前講座）<br>概　要：「考え、議論する道徳」を目指した授業づくり（講師：大野　勉　指導主事） |
| １ | ５ | 第６回校内研<br>概　要：①ＩＣＴリーダー講習会（相馬）　②上越教育大学での長期研修報告（栃木） |

## ６　研究の成果

(1) 授業の目標や活動のねらいなどを明確にし、グループで解決が必要とされる課題や生徒同士で試行錯誤させる場面を工夫することで、「仲間に説明する・教える」「仲間にアドバイス」するために予習をやるようになってきたと感じる生徒が増えた。また、困った時に一人で抱え込まずに周囲に頼ることもできるようになったと答えた生徒も増えた。このように生徒の授業評価アンケートの結果から、課題に対して主体的に取り組もうとする態度が身についてきた生徒が多くみられる。

(2) 各教科において、単元ごとの評価や振り返りを行うことで、これまでの授業への取組が評価結果にどのように影響するのかに気づく生徒も出てきた。そのため、授業態度や家庭学習などの学習法方の改善に取り組もうとする生徒も増え、学習に対する意欲の向上につながっている。

## ７　研究の課題

(1) 協働的な学びの場面を継続することで、学習意欲や主体性を高める生徒、教師の説明場面に安心感を感じる生徒など、多様な生徒がいることがわかった。今後も教科の特性を生かし、年間を通して様々な学習活動が組み込まれた授業づくりを工夫する必要性を感じた。

(2) 授業の自由参観を学期ごとに設定し、『フィードバックシート』を用いてみたが、個人間のやり取りにとどまってしまった。各教科の主体的に取り組んでいる生徒像や学習形態の情報を共有したが、それらを進化するまではいかなかった。今後の研究としては、生徒と同様に職員が話し合いながらお互いの授業力を高められる場面の設定が必要である。

（記入者　窪田　麻記）

東中

# 課題の解決に向けて主体的に取り組む生徒の育成

## ～「自発的行動力」の向上を促す指導を通して～

（２年計画の２年次）

校長　　千　葉　　誠

### １　研究主題について

本校では、昨年度「課題の解決に向けて主体的に取り組む生徒の育成～『自発的行動力』の向上を促す指導を通して～」の研究主題のもと、課題解決に向けた取組として授業づくりや、９ＢＬＯＣＫＳを取り入れることで、生徒の課題解決に向かう態度の育成に取り組んできた。その結果、自ら課題を設定し、その達成に向けて取り組もうとする意識は高まったと考えられる。しかし、課題の解決に向けて「自らの力でやり遂げるために主体的に取り組み、あきらめずに最後までやり遂げようとする姿勢」を充分に育成することができなかったという課題が残った。昨年度の取組から、学習や諸行事において９ＢＬＯＣＫＳは課題解決に向けた意識づけに有効であると捉えている。今年度は、「課題解決を目指し、自発的に、根気強く行動する力」を育てるために、各教科における授業づくりの工夫を引き続き行うとともに、９ＢＬＯＣＫＳとＰＤＣＡサイクルを融合させることで、自発的行動力の向上と根気強く取り組むことのできる生徒の育成を目指し、本研究主題を設定した。

### ２　研究のねらい

自発的行動力を身に付けることが主体的に取り組んでいく態度に繋がり、「主体的・対話的で深い学び」を実践するための根幹となるスキルであると捉えている。

主体的な行動力を育成するために重要なことは、課題意識をもって行動することで、生徒自身が課題を設定することが特に重要であると考える。その前提となるのは、生徒自身による自己理解である。昨年度の９ＢＬＯＣＫＳへの取組は、振り返りの時間を十分に確保できなかったため現状を的確に判断することができず、先を見据えて目標を設定したり、継続して取り組んだりすることができなかったという反省点が挙がっている。

その反省を生かして、今年度はＰＤＣＡサイクルの実践と評価を確実に行い、自己理解を深めることで、自発的行動力の向上を促すことができるということを検証したい。

なお、各教科においては課題設定までの教師のはたらきかけについて研究するとともに、振り返りの場面ではコーチングの手法を用いて内的な欲求を高めていくことも昨年度と同様に実践していくこととする。

### ３　研究仮設

ＰＤＣＡサイクルを実践して自己の現状を理解することで、課題解決に向かう自発的行動力を高めることができるものと考える。

### ４　研究内容

(1)　９ＢＬＯＣＫＳとＰＤＣＡサイクルの活用
(2)　特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
(3)　各教科、領域における教師のはたらきかけの工夫
(4)　一人１台端末の効果的な活用とＩＣＴ機器を効果的に活用した授業づくり

## ５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

| 月 | 日 | 内容・授業の概要等 |
|---|---|---|
| ５ | ２５ | 小・中学校ジョイントスクール推進授業における公開授業（全教科・全学年） |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ５ | １８ | 東中視聴覚部会による「一人１台端末の効果的な活用」についての研修（授業で使えるグーグルスライドの研修、授業や行事が充実するＭｅｅｔ講座） |
| ６ | ２７ | 授業の導入から課題設定おける教師のはたらきかけの工夫 |
| ８ | １８ | 「特別な配慮を必要とする生徒の学びを支える授業づくり」<br>講師　八戸市教育委員会こども支援センター　主任指導主事　横沢　吉則 |
| ９ | ２４ | ９ＢＬＯＣＫＳとＰＤＣＡサイクルの活用（各学年の取組について） |
| １１ | １５ | コーチングの手法について |
| １１ | １６ | 東中学区の小学校教員との学習習慣定着に向けての共通理解 |
| １ | １８ | 今年度のまとめ（成果と課題） |

## ６　研究の成果

(1) 自発的行動力については、９ＢＬＯＣＫＳを継続して活用するとともに振り返りの時間を設定したことで課題が明確になり、主体的に行動しようとする態度の育成につながった。教師側も９ＢＬＯＣＫＳの活用に意識的に取り組むことで、効果高めるための工夫について考えを深めることができた。

(2) 「一人１台端末の効果的な活用」を行ったことにより、授業や行事においてＩＣＴ機器を活用する機会が広がった。また、特別支援学級における授業づくりについての研修を行ったことで、生徒への支援のあり方について各教員が考える機会となった。

## ７　研究の課題

(1) ９ＢＬＯＣＫＳの活用は、定期考査や諸行事において有効であったが、日常の授業や家庭学習への主体的な取組を促すことに結び付けるところには至らなかった。

(2) 課題設定までの教師のはたらきかけについての研究は教科ごとの取組となったが、授業における「課題解決を目指し、自発的に行動する力」に大きくかかわるため、全職員が共通理解を図り、研修する場を確保する必要があった。

（記入者　佐々木　由子）

中沢中

# 自ら学ぶ力の育成
## ～自己調整学習を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　瀧野　貢二

### １　研究主題について

昨年度の研究主題は、「自ら学ぶ力の育成～自己調整学習を通して～」であり、「自己調整学習」という学習方法を学習に限らず、学校行事を含めた様々な活動の場面に導入し、生徒の主体性の向上や自ら学ぶ力の育成、自尊心を高めるための指導方法を研究してきた。目標設定や振り返りを繰り返す中で、生徒の意欲の向上や行事後の達成感が十分に感じられる場面が多くなり、アンケートの分析でも、生徒の望ましい変容が数値から見てとれた。今年度は３年計画の２年目であり、１年目の取り組みで課題とされた内容の改善を図りながら、さらに教師間で研究を深め、より生徒の力を伸ばせるような取り組みを目指していくこととした。

「自己調整学習」とは、「予見段階（課題を分析し、計画を立てる）」「遂行段階（実践しながら自分で自分を観察する）」「自己内省段階（自己評価と結果と原因の分析など）」の「循環的段階モデル」と呼ばれるプロセスにのっとった学習方法であるが、本校では学習に限らず、行事や一年間の目標などにも「自己調整学習」のプロセスを取り入れて、「予見・遂行・自己内省」の一連の流れを繰り返すことで、生徒の「自ら学ぶ力の育成」に迫っていきたい。

### ２　研究のねらい

「自己調整学習」の考え方の中の「循環的段階モデル」という学びのプロセスを、学習を含めた諸活動に取り入れていくことで、生徒自身が自分の学びを計画し、実践し、自己評価して次につなげていく姿勢を身につけることを目指す。その姿勢を身につけさせることが「自ら学ぶ力の育成」であり、それによって諸活動に向かう際の意欲や主体性を高めることができるのではないかと考えている。そのためには、ただこのプロセスを取り入れるだけではなく、教師が積極的に模範を示す「モデリング」の役割を果たす必要がある。生徒がより効果的に、意欲的に学べるよう、よりよい計画の在り方や学び方、適切な自己評価の在り方などを示し、導いていくための方法を研究し、「自ら学ぶ力の育成」に迫っていきたい。今年度は２年目であるので、昨年度の反省を踏まえ、「自己調整学習」の各教科での取り入れ方をさらに研究し、年２回行うＱＵの学習意欲に関するアンケートや、学校独自で作成する学習意欲に関するアンケート結果の分析などを行い、生徒の変容を見ていきたい。

### ３　研究仮説

「自己調整学習」の「予見・遂行・自己内省段階」のプロセスを、学習を含めた諸活動に繰り返し取り入れていくことで、生徒自身に自然にそのプロセスが身についていくと考える。また、そのプロセスを形だけ導入するのではなく、各段階において教師が良い計画の立て方、学習の仕方、適切な自己評価の在り方などを示すことで、生徒がよりよい方法を学び、選べるように導いていくことができる。その結果、自分で自分の学びをコントロールし、より良い方法を選びながら意欲的に学ぶ生徒の育成が果たされると考える。

### ４　研究内容

(1)「自己調整学習」のプロセスを諸活動に取り入れていくタイミングや、ワークシートの在り方を研究する。
(2) 課題解決のためにどんな力が必要とされ、どんな考え方や学習方法があるのかを生徒に明示できるように、教材研究を徹底する。
(3) 生徒の「予見・遂行・自己内省」の様子を手助けし、生徒の意欲を高めるためのアドバイスのタイミングや在り方を研究する。

## ５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ４ | ５ | 第１回校内研…校内研テーマ「自己調整学習」の確認と方向性 |
| ４ | ２７ | 第２回校内研…「自己調整学習」の実践例紹介、自主勉について |
| ５ | １７ | 教育指導課・センター訪問 |
| ６ | ３ | ＪＳ中学校公開授業 |
| ８ | ３ | 第５回校内研…「自己調整学習」を取り入れた授業実践紹介と、授業参観月間について |
| ８～９月 | | 授業参観月間 |
| ９ | １４ | 第６回校内研…授業参観月間の振り返り |
| １０ | ２７ | 初任研師範授業 |
| １ | ２４ | 第８回校内研…今年度の研究のまとめと次年度に向けての協議 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| ５ | ２５ | 第３回校内研…ＱＵ①(６月実施)、各種アンケートについて |
| ６ | ２９ | 第４回校内研…ＱＵ①(６月実施)、各種アンケートの結果分析と考察 |
| １１ | １６ | 第７回校内研…ＱＵ②(１１月実施)、各種アンケート結果分析と考察 |
| １２ | １２ | ＪＳ情報交換会(小中の実態把握と今後の取り組みについて) |

## ６　研究の成果

(1) 自己調整学習を取り入れた授業の実践例を研修部から提示し、９月の授業参観月間に各教科で自己調整学習を取り入れた授業を行った。授業での実践例の紹介や参観した感想をもとに、その成果と課題について共有した。その結果、課題が明確になり、次年度の取り組みの工夫すべき点を把握することができた。

(2) 学校行事期間にも、自己調整学習の流れを取り入れたワークシートを活用し、目標設定から実行、振り返りを毎回行った。その結果、生徒一人一人の行事への取り組み方の意識が高まり、行事終了後の達成感を感じる生徒が多くなった。また、その後の学校生活に対する意識の高まりも感じられるようになった。

(3) 各種アンケート（自尊感情アンケート―そばセット―・ＱＵ・自己調整学習アンケート）の分析を行い、様々な視点からの生徒理解を深め、日々の指導に役立てることができた。

(4) 「自尊感情アンケート―そばセット（SOBA-SET）―」アンケートでは、6 月と 11 月の結果を比べると、1 年生では 18 項目中 10 項目、2 年生では 18 項目中 13 項目で数値が上昇した。(数値が高いほど自尊感情が高い状態を示す)。このことから、自己調整学習の流れを教育活動に取り入れたことが、生徒の自尊感情を高めた一つの要因になっているのではないかと考えられる。

## ７　研究の課題

(1) 自己調整学習を意識した自主勉強への取り組みのために、教師側で自主勉強ノートお手本帳を作成し、各教科でポイントを確認し実践したが、考査の結果や終了後のアンケートの結果から、数値の上昇などの思わしい結果を得ることができなかった。そのため、担任だけではなく各教科の教師が、帰り学活の自主勉タイムなどに積極的に関わっていくことも考えていきたい。また、考査終了後の振り返りにもっと重点を置くことが必要だとも考えられるので、次年度は考査ごとの振り返りワークシートなども活用していきたい。

(2) 「自己調整学習」アンケートでは、6 月と 11 月の結果を比べると、全学年において、多くの項目で数値が下降した。このことから、教師側が自己調整学習に対する理解を深め、自己調整学習を進めていくための様々な力をさらに向上させていく必要がある。また、「予見」「遂行」「自己内省」のうち、「自己内省」をまだまだ十分にできていない生徒がいることも一因と考えられるので、そのような生徒へ教師側が指導や支援の在り方を模索していくことが大切である。

（記入者　　蛯名朋子）

島守中

# 主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成

## ～ねらいに迫るためのＩＣＴとツールの効果的な活用～

（３年計画の３年次）

校長　　米田　裕子

### １　研究主題について

昨年度は、主題を「主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成～ICT とツールの活用を通して～」とし、研究に取り組んだ。

各教科、領域における ICT の積極的な活用がデータの処理や反復練習等を効率化し、生徒の集中力を高めたとともに、深い理解や考察、意欲的な表現活動の一助となって主体的な学びを促した。また、思考ツール等を併せて活用したことで、つまずきのある生徒も自分の思考を整理することができ、主体的な表現が可能になったと考える。

しかしながら、個に応じた指導の充実を図っていくためには、Chromebook、思考ツール等の特質を理解し、ねらいに迫るための効果的な活用方法について、更なる研究が必要である。また、導入から課題設定までの働きかけや振り返りを工夫し、ねらいが達成されたかどうかについて検証するなど、生徒の状況に応じた指導法の改善を図ることが必要と思われる。

以上のことから、昨年度に引き続き、ICT と思考ツール等をより効果的に活用し、指導法の改善を図りながら、主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成を目指そうと考え、主題を設定した。

### ２　研究のねらい

「主体的に学び、考え、表現できる生徒」を育てるためには、目指す資質・能力を明確にし、基礎・基本となる知識・技能をしっかり身につけさせることが必要である。ICT とさまざまなツールを効果的に活用し、確かな学力の定着と、対話的で深い学びを実現させ、粘り強さと自信をもって主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成を目指したい。

### ３　研究仮説

特別支援教育の視点を取り入れたわかる授業を基盤とし、各教科のみならず、領域においても積極的に ICT とツールの活用を行う。これにより、身につけた基礎的・基本的な知識・技能を活用し、主体的に学び、考え、表現しようとする生徒の育成につながると考える。

### ４　研究内容

(1) Chromebook をはじめとした ICT 機器を積極的に利用し、効果的な活用方法を探る。

ア　各個人が課題を明確にし、解決に向け、積極的に研究を行う。

イ　校内研修等を通し、活用方法や情報などの共有化を図る。

(2) 個に応じた指導の充実のため、さまざまなツールを活用しながら、学習過程や成果を的確に把握する。指導の改善につながる評価を工夫する。

ア　ねらいに迫るために、各ツールの特性を生かした活用方法を工夫する。

イ　導入を工夫し、振り返りを丁寧に行い、ねらいが達成されたかについて検証する。

## ５　研究の経過

（1）研究仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 授業研究の取組内容 |
|---|---|---|
| 7 | 1 | 第１回授業研究（全校特活）授業者：教頭　須藤　修生<br>「夢を語る会」 |
| 7 | 21 | 第２回授業研究（全校家庭科）授業者：校長　米田　裕子<br>「プリンは何からできてるの？」 |
| 11 | 14 | 第３回授業研究（1・2年保健体育）授業者：教諭　福士　憲司<br>「武道：柔道　けさ固めから逃れる方法は？」 |
| 1 | 16 | 第４回授業研究（1年国語）授業者：教諭　下田　龍馬<br>「少年の日の思い出」 |

（2）一般研修

| 月 | 日 | 内　容　等 |
|---|---|---|
| 4 | 4 | 第１回校内研<br>・校内研についての共通理解 |
| 4 | 27 | 第２回校内研<br>・「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業に向けて<br>・指導案の様式について<br>・今後の研修計画について |
| 6 | 8 | 第３回校内研<br>・防災教育（今年度の消防クラブ活動についての共通理解） |
| 7 | 28 | 第４回校内研<br>・１学期の振り返り・２学期に向けて<br>・ＮＲＴ、ＨＵＭＡＮ、自尊感情尺度シートの分析と考察 |
| 8 | 19 | 第５回校内研<br>・指導案（教育指導課訪問）の書き方について<br>・思考ツールの活用に関わる研修 |
| 9 | 22 | 第６回校内研<br>・1人1台端末の活用について<br>講師　八戸市総合教育センター　石井一二三先生 |
| 12 | 14 | 第７回校内研<br>・自尊感情尺度シートの分析と考察 |
| 1 | 18 | 第８回校内研<br>・生徒指導に関わる研修　「子どもたちの笑顔のために」<br>（反抗期、HSC、セクシャルマイノリティへの理解等）<br>講師　本校スクールカウンセラー　北山勝則先生 |
| 2 | 1 | 第９回校内研<br>・校内研究のまとめ<br>・成果と来年度に取り組む課題について |

## ６　研究の成果

（1）ICTとツールの活用によって、授業を通して得た情報や学びが視覚的に整理され、生徒たちは意欲をもって表現活動を行うことができ、結果として本時のねらいにアプローチしやすくなった。

（2）振り返りをChromebookに記録しておくことで、生徒の変容が一目でわかるようになり、一人一人の評価に生かすことができた。

## ７　研究の課題

（1）特定の場面だけではなくどのような場面においても、主体的に学ぶことができる生徒を育むために、効果的な導入や振り返りの工夫の研究により力を入れ、授業の改善を図ること。

（2）少人数学級内での学力差にどのように対応して授業づくりを行うか、学校全体で取り組むことについて共通理解を図ること。

（記入者　岩織　安香）

令和４年度

# 小・中学校実践研究集録

編集発行：八戸市教育委員会　教育指導課

〒031-8686　八戸市内丸一丁目１番１号
電　話　0178-43-9519（直通）
ＦＡＸ　0178-47-4997